

山梨市文化財調査報告書 第12集

三ヶ所遺跡

—市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書—

2010年1月

山 梨 市
山梨市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

三ヶ所遺跡

—市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書—

2010年1月

山 梨 市
山梨市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

序

本書は、市道の改良に伴って行われた三ヶ所遺跡発掘調査の報告書です。調査は、国宝の仏殿で著名な清白寺の参道と交差する東西 140 m、南北 15 m の範囲にわたって行われ、平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、中世の溝が検出されました。竪穴住居は 4 軒が検出され、そのうち 1 号竪穴は 10 世紀前半のもので、床面からは「東大」と墨書きされた杯が出土しています。掘立柱建物は 5 棟が検出され、うち 5 号掘立柱は 3 × 3 間で柱穴径が大きく、注目に値するものです。溝は 2 本の平行したものが東西方向、南北方向それぞれ検出されており、道路側溝もしくは条里溝と見られており、今後のこの地域の条里制の成立時期や範囲、方向性などを考える上で大変貴重な発見であるといえます。

最後になりますが、調査を担当していただいた（財）山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成 22 年 1 月

山梨市教育委員会

教育長 堀 内 邦 滿

例　　言

- 1 本書は山梨県山梨市三ヶ所 564-2 番地ほか所在、三ヶ所遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は市道小原東東後屋敷線改良工事に伴い、山梨市より委託を受けて（財）山梨文化財研究所が実施した。
- 3 本書の原稿執筆は第4章第1～3節をパリノ・サーヴェイ株式会社（担当 松元美由紀 分析 松元美由紀・高橋敦・金井慎司）、第4節を植月学（山梨県立博物館）、第5章第3節を室伏徹（甲州市教育委員会 山梨県考古学協会）が行い、そのほかの執筆・編集は鶴原功一（（財）山梨文化財研究所考古第2研究室）が行った。また表3石製品観察表の石材鑑定は河西学（（財）山梨文化財研究所地質研究室）による。
- 4 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は（株）テクノプランニングが実施した。
- 5 鉄製品の保存処理は、（財）山梨文化財研究所保存処理室にて実施した。
- 6 本書に関わる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご協力、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。
三澤達也（山梨市教育委員会） 松土一仁（山梨市役所建設課） 清白寺 河西学・鈴木稔・畠大介・宮澤公雄・平野修・望月秀和・中山千恵（（財）山梨文化財研究所） 三枝哲雄（三枝興業） 森谷忠・柴田直樹（（株）テクノプランニング） 千葉博俊（パリノサーヴェイ株式会社） 室伏徹・入江俊行（甲州市教育委員会） 植月学（山梨県立博物館） 岡野秀典（中央市教育委員会） 稲垣自由・古川明日香（山梨県埋蔵文化財センター） 加藤雄一郎（山梨学院大学学生） 甲陽建機リース株式会社

凡　例

1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴 1:60

竈 1:30

土坑・ピット 1:30

溝 1:100 ほか 断面 1:60 ほか

土器 1:3

鉄製品 1:2

石器 1:3

石鎚 2:3

石造物 1:8

3 遺構図版中の数字は遺物番号を示し、遺物図版、写真図版、観察表の各番号と一致する。遺構平面図における遺物間実線は接合した2点の接合関係を示す。遺物分布図のドットは、現場でナンバーをつけて取り上げた個々の遺物を示し、うち図化した遺物については、図版番号と同一の番号を付した。なお、遺物の種別を示す記号は以下のとおり。

◎ 土器 ● 土師器・土師質土器・土器 ▲ 須恵器 ■ 陶磁器 △ 石器・石造物
◆ 骨 ◆ 粘土 ○ 金属製品・銭貨

4 土器断面図中の破線は接合帶を、黒の塗りつぶしは須恵器を示す。

5 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。

6 遺構図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察表番号と一致している。

7 本書図1は国土地理院発行の1/200,000地勢図、1/50,000地形図、図2は1/2,500山梨市発行都市計画図を使用した。

8 本文の註・参考文献については各節（章）の文末にまとめた。

本文目次

序	
例言	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
写真目次	
表目次	
図版目次	
写真図版目次	
第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	10
第1節 調査の方法	10
第2節 層序	10
第3節 遺構	10
第4節 遺物	21
第4章 自然科学分析	27
第1節 7号土坑炭化物の放射性炭素年代測定(パリノ・サーヴェイ株式会社)	27
第2節 種実遺体同定(パリノ・サーヴェイ株式会社)	28
第3節 骨同定(パリノ・サーヴェイ株式会社)	31
第4節 1号土坑のウマ遺体(植月 學)	33
第5章 総括	35
第1節 土師器類の年代と从鉢形土器	35
第2節 遺構群の時期的変遷	36
第3節 「東大」墨書きについて	38
第4節 三ヶ所遺跡の掘立柱建築について(室伏 徹)	47

報告書抄録

奥付

挿図目次

図1 遺跡の位置	6	図4 遺構の変遷	37
図2 調査区位置図	7	図5 「東大」関連墨書き土器と出土遺跡	39
図3 壱原遺跡H380住出土仏鉢形土器	36	図6 掘立柱建物の建築単位と年代	48

写真目次

写真1 清白寺仏殿及び庫裏	5	写真3 39号土坑古銭	23
写真2 参道左脇の石造物群	19		

表 目 次

表1 ピット一覧表	11	表8 種実遺体同定結果	29
表2 遺構別遺物出土量	12	表9 骨同定結果	32
表3 土器類観察表	24・25	表10 馬齒同定結果	34
表4 土製品観察表	26	表11 馬齒計測結果	34
表5 石器類観察表	26	表12 山梨県内出土「東大」関連墨書き一覧表	
表6 金属製品観察表	26		41~45
表7 放射性炭素年代測定および暦年校正結果	27		

図版目次

第1図 調査区及び周辺	50	第14図 5号掘立柱建物(1)	67
第2図 全体図	51・52	第15図 5号掘立柱建物(2)、1号土坑	68
第3図 全体図西区	53・54	第16図 2~7・17号土坑	69
第4図 全体図中区	55・56	第17図 8~10号土坑	70
第5図 全体図中・東区	57・58	第18図 11~14号土坑	71
第6図 1号竪穴(1)	59	第19図 15・16号土坑	72
第7図 1号竪穴(2)、2・3号竪穴(1)	60	第20図 18~21号土坑	73
第8図 2・3号竪穴(2)	61	第21図 22~25号土坑	74
第9図 2・3号竪穴(3)、4号竪穴(1)	62	第22図 26・27号土坑	75
第10図 4号竪穴(2)	63	第23図 28~30号土坑	76
第11図 1号掘立柱建物、2号掘立柱建物(1)	64	第24図 31~35・38号土坑	77
		第25図 39~43号土坑	78
第12図 2号掘立柱建物(2)、3号掘立柱建物	65	第26図 台座地点	79
		第27図 1号池、1号配石	80
第13図 4号掘立柱建物	66	第28図 1~3・6~8号溝(1)	81・82

第29図	1~3・6~8号溝(2)	83	第35図	出土遺物(4)	89
第30図	9~11号溝	84	第36図	出土遺物(5)	90
第31図	4・5・12号溝	85	第37図	出土遺物(6)	91
第32図	出土遺物(1)	86	第38図	出土遺物(7)	92
第33図	出土遺物(2)	87	第39図	出土遺物(8)	93
第34図	出土遺物(3)	88	第40図	出土遺物(9)	94

写真図版目次

図版1	調査区全景(合成写真)		図版7	1 3号竪穴ベルト(南より) 2 3号竪穴遺物出土状況(北より) 3 3号竪穴内罐出土状況 4 3号竪穴竈周辺縛出上状況 5 3号竪穴竈完掘状況 6 3号竪穴掘り方状況 7 3号竪穴完掘状況(南より)	
図版2	1 調査区周辺空中写真(南より 中央は清白寺及び清白寺参道) 2 調査区空中写真(西より)		図版8	1 4号竪穴覆土断面(南より) 2 4号竪穴遺物出土状況 3 4号竪穴竈裁ち割り状況(正面西より) 4 4号竪穴竈裁ち割り状況(南より) 5 4号竪穴竈袖石・支脚石出土状況(西より) 6 4号竪穴竈袖石・支脚石出土状況(南より) 7 4号竪穴完掘状況(南より)	
図版3	1 調査区空中写真(上より 盛り土反転後) 2 調査区空中写真(東より 中央は連方屋敷に通じる道) 3 西区1号溝ほか空中写真(上より) 4 中区空中写真(上より 1号竪穴ほか) 5 東区空中写真(上より)		図版9	1 1号掘立10号ピット断面(北より) 2 1号掘立7号ピット断面(北より) 3 1号掘立8号ピット断面(北より) 4 1号掘立柱穴列断面(北より) 5 1号掘立完掘状況(北より) 6 1号掘立完掘状況(西より) 7 2号掘立完掘状況(南より)	
図版4	1 1号竪穴遺物出土状況(西より) 2 1号竪穴遺物出土状況(東より) 3 1号竪穴遺物出土状況 4 1号竪穴遺物出土状況 5 1号竪穴床直遺物出土状況 6 土師器環・皿出土状況 7 「東大」銘巌書土器出土状況		図版10	1 3号掘立完掘状況(西より) 2 4号掘立完掘状況(東より) 3 4号掘立67号ピット断面 4 4号掘立66号ピット断面 5 4号掘立65号ピット断面 6 4号掘立64号ピット断面 7 4号掘立63号ピット完掘状況	
図版5	1 土師器出土状況 2 竈内支脚転用窯出土状況 3 1号竪穴竈(西より) 4 1号竪穴竈(支脚転用土器を外した状況) 5 1号竪穴完掘状況(西より) 6 1号竪穴掘り方状況(西より)		図版11	1 4号掘立完掘状況(南より) 2 4号掘立完掘状況(空中写真 上より)	
図版6	1 2号竪穴遺物出土状況(北より) 2 2号竪穴竈周辺遺物出土状況(南より) 3 2号竪穴竈裁ち割り状況 4 2号竪穴竈縛出上状況(竈正面より) 5 竈縛出上状況(竈上より) 6 2号竪穴完掘状況(南より) 7 2号竪穴掘り方状況(北より)				

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 3 | 5号掘立完掘状況(空中写真 上より) | 13 | 19~21号土坑完掘状況 |
| 4 | 1・5号掘立周辺状況(空中写真 上より) | 14 | 18号土坑覆土断面 |
| 5 | 5号掘立完掘状況(南より) | 15 | 18号土坑完掘状況 |
| 6 | 1号土坑 | 図版14 | 1 清白寺参道と周辺調査状況
2 参道脇の1号池
3 1号池石垣状況
4 台座地点上層(東より)
5 台座地点下層(東より)
6 台座地点下層(西より)
7 台座群出土状況(南より)
8 台座地点完掘状況 |
| 7 | 1号土坑(馬齒出土状況) | | |
| 図版12 | 1 2号土坑
2 3号土坑
3 4号土坑
4 5号土坑
5 6号土坑完掘状況
6 7号土坑断面
7 7号土坑焼骨出土状況
8 7号土坑焼土・焼骨出土状況
9 8号土坑
10 9号土坑完掘状況
11 11・12号土坑完掘状況
12 13号土坑
13 14号土坑完掘状況
14 15号土坑完掘状況
15 16号土坑
16 22号土坑
17 23号土坑
18 24号土坑 | 図版15 | 1 1号溝
2 中区完掘状況(反転後)
3 中区完掘状況(反転前)
4 西区完掘状況(東より)
5 1号竪穴調査風景
6 参道脇石造物群(西側)
7 参道脇石造物群(東側)
8 清白寺参道の現状 |
| 図版13 | 1 25号土坑
2 26号土坑断面
3 26号土坑半截状況
4 26号土坑完掘状況
5 38号土坑完掘状況
6 38号土坑
7~9 39号土坑
10 39号土坑錢貨出土状況
11~12 43号土坑 | 図版16 | 1号竪穴 遺物 |
| | | 図版17 | 1号竪穴 遺物 |
| | | 図版18 | 1号竪穴 遺物 |
| | | 図版19 | 2~4号竪穴 遺物 |
| | | 図版20 | 土坑・台座地点 溝 遺物 |
| | | 図版21 | 溝 遺構外 遺物 |
| | | 図版22 | 炭化材・炭化種実 |
| | | 図版23 | 焼人骨 |
| | | 図版24 | 1号土坑馬齒(1)
1 上面(右側頬側面)
2 上部除去後(左側舌側面側) |
| | | 図版25 | 1号土坑馬齒(2)
3 左側頬側面
4 馬齒 |

第1章 経過

第1節 調査の経過

三ヶ所遺跡の発掘調査は、JR東山梨駅と山梨市後屋敷間に計画された市道建設を原因とする。この一帯は、今日モモ・ブドウを中心とした果樹地帯および住宅地であり、また農道沿いに面して存在する国宝清白寺や県史跡遠方屋敷などの史跡・文化財を抱える観光地でもある。現状の農道では進入路の道幅が狭いため、観光バスなどの大型車が通行できないといった懸案に対する道路改良の要望を踏まえて計画されたもので、山梨市都市計画図には「山梨市駅東山梨線」として、山梨駅方面につながる予定路線図が図示されている。

連方屋敷を含む道路予定地周辺は、「三ヶ所遺跡」という名称で、古代・中世の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図等で周知されている。そこで工事計画に先立ち、平成20年（2008）、山梨市教育委員会は予定地内各所にて試掘調査を実施した。路線予定地内に任意で 1×1 m四方の試掘坑を各所に設定、遺構確認面まで人力により掘削、遺構・遺物の検出状況を確認し、本調査の範囲を絞り、工事計画をもとに平成20年度の本調査予定地区を設定し、清白寺参道を中心に東西約140mの間とした。

調査については委託事業として本年度現地調査のみ実施、次年度整理作業という予定で、山梨市が（財）山梨文化財研究所に業務委託を行い、平成20年7月25日契約、工期は7月26日～10月31日とし、調査が行われることとなった。事業名は地方道路整備臨時交付金事業、委託業務名は小原東東後屋敷改良に伴う埋蔵文化財発掘調査業務である。本調査にあたっては山梨市教育委員会が作成した仕様書に基づき、山梨市建設課、山梨市教育委員会との協議、打ち合わせを随時行なながら、山梨市教育委員会職員の監督のもと、本調査を実施することとなった。山梨県教育委員会にて届出は平成20年6月29日付提出、7月29日付で山梨県教育委員会より通知を受けている。

整理事業については、平成21年8月25日契約、工期は8月26日から平成22年1月29日で、山梨市が（財）山梨文化財研究所に業務委託し、報告書刊行に向けての作業が行われることとなった。

第2節 発掘作業の経過

現地での発掘調査は平成20年7月28日より10月31日まで、約3ヶ月間実施した。調査にあたっては廃土置き場が路線予定地内で確保できなかったことから、調査地区を南と北に細長く2分割し、南側を調査したのち廃土を反転して北側を調査し、遺構図面を合成することとした。

調査は西区より開始し、溝を調査したのち、中区、東区へと移動し、堅穴、ピット、土坑、掘立などを調査した。その過程で1号掘立、2・3号堅穴が調査区と道との境の上手中に続いていることがわかり、調査区を一部拡張した。ほぼ半分が掘りあがった9月17日に1回日のラジヘリ撮影を実施し、その後重機で盛り土を反転、北側を調査した。西区では参道に沿った溝などを調査するとともに、参道脇にかつて存在した池を確認した。また西区南東隅に石造物の台座が並んで検出されたため、道路との境ぎりぎりまで調査区を拡張した。続く中区、東区では土坑、ピット群の調査を進めていくなかで1号堅穴と重複するように5号掘立が存在することがわかり、一旦埋め戻した1号堅穴を急きょ再発掘し、掘立の全体像の把握に努めた。また北壁では4号掘立の柱穴が調査区外にかかっていたため、柱穴1本分のみ調査区を拡張して調査した。10月23日には、ほぼ完掘した状態で2回日の空撮を実施し、10月27日には現地調査を終え、埋め戻しに入った。

なお調査面積は、西区310m²、中区1185m²、東区136m²ほか、計1640m²である。

調査日誌、調査参加者は以下の通り。

【調査日誌】

平成20年(2008)7月29日(火) 調査範囲を確認し、表土剥ぎを開始。道幅が狭く、当初予定した重機を入れることができず、小さな重機を使用することとなった。調査事務所などのハウス等を設置。東西方向の溝を確認。

- 7月30日(水) 表土剥ぎ。機材搬入。基準杭設置。
- 7月31日(木) 表土剥ぎ。
- 8月1日(金) 表土剥ぎ。調査区段の精査。
- 8月2日(土) 表土剥ぎ。
- 8月3日(日) 表土剥ぎ。
- 8月4日(月) 表土剥ぎ及び遺構確認作業。竪穴2軒、焼骨を伴う土坑確認。夕方激しい雷雨。
- 8月5日(火) 遺構確認。
- 8月6日(水) 1号溝掘削開始。
- 8月7日(木) 溝掘り下げ。
- 8月8日(金) 重機による表土剥ぎ。1号溝掘り下げ。
- 8月12日(火) 1~3号溝調査。遺物取り上げ。
- 8月13日(水) 1・2号溝出土状況写真撮影。遺物取り上げ。
- 8月18日(月) 1号溝断面実測。ベルト除去。溝内出土状況のポール撮影。
- 8月19日(火) 遺構外の精査。溝内遺物取り上げ。礫除去。
- 8月20日(水) 1号溝内再精査。
- 8月21日(木) 1号土坑確認。馬歯検出。
- 8月22日(金) 1号土坑完掘。写真撮影。
- 8月25日(土) 西区調査。
- 8月26日(火) 西区調査。
- 8月27日(水) 西区調査。
- 8月28日(木) 西区調査。
- 8月29日(金) 西区調査。
- 9月1日(月) 東区調査。調査区盤面精査。溝2本(4・5号溝)確認。
- 9月2日(火) 東区調査。搅乱等を掘削し、調査をほぼ終了とする。中区東側より精査開始。
- 9月3日(水) 中区の精査。細かなシミ状の搅乱掘り下げ。2~4号土坑調査。
- 9月4日(木) ピット群の調査。道際に東西に並ぶ柱穴列確認(1号掘立)。
- 9月5日(金) 鋸籠掛け。掘り下げ。竪穴1軒確認。1号掘立の柱穴半截。5・6号土坑調査。
- 9月8日(月) 1号掘立の南側を拡張。2・3号竪穴確認、掘り下げ。南壁を拡張。1号竪穴掘り下げ。完形の土師器壺など出土。
- 9月9日(火) 1号竪穴遺物出土状況写真、遺物取り上げ。礫実測。2・3号竪穴掘り下げ。遺物取り上げ。1号掘立完掘。3号竪穴内より錆出土。
- 9月10日(水) 1号竪穴礫取り上げ。断面図作図。2・3号竪穴完掘。1号掘立完掘写真撮影。2号掘立柱穴列半截。1号配石調査。
- 9月11日(木) 2・3号竪穴窓調査。2号窓立断面図作図、完掘へ。1号竪穴完掘写真、遺物取り上げ。帝京科学大生4名、学芸員実習のため調査参加。
- 9月12日(金) 中区ピットなど調査。3号竪穴窓内礫実測。7号土坑焼骨調査。
- 9月16日(火) 1号竪穴窓内調査。支脚転用土器出土。中区西端鋸籠掛け。ピット掘り下げ。中区をほぼ調査終了とする。
- 9月17日(水) ピットなど調査。全体の精査。ラジヘリによる空振。1号竪穴窓調査。

- 9月19日(金) 全景、各遺構の完掘状況写真撮影。台風接近により周辺整理。
- 9月22日(月) 中区補足調査。
- 9月24日(水) 再精査により掘立1軒確認(3号掘立)。1号竪穴竈調査。支脚転用土器内より支脚石出土。
- 9月25日(木) 3号掘立断面図。1号竪穴掘り方完掘、写真撮影。2・3号竪穴掘り方調査。ポール撮影による追加写真測量。
- 9月26日(金) 重機による盛り土の反転、北側表土剥ぎを開始。4号竪穴設定。調査。竈部分を拡張。1～3号竪穴掘り方断面図作図。
- 9月27日(土) 完掘状況写真撮影。
- 9月29日(月) 表土剥ぎ。
- 9月30日(火) 表土剥ぎ。東区の長方形土坑群など掘り下げ。中区東側の精査。遺構確認。4号掘立確認。1号竪穴と重複する3間×3間の掘立柱建物確認(5号掘立)。4号竪穴竈半截。
- 10月1日(水) 表土剥ぎ。中区1号竪穴を再調査(5号掘立重複が判明したため)。4号竪穴竈調査。ポール撮影。床面掘り方截ち割り。
- 10月2日(木) 表土剥ぎ。精査。20～25号土坑半截。東区完掘。写真撮影。断面図作図。
- 10月3日(金) 表土剥ぎ。
- 10月4日(土) 重機による表土剥ぎは本日で完了。
- 10月6日(月) 西区精査。石列検出。溝4本確認。
- 10月7日(火) 西区溝などの掘り下げ。台座地点で台座列確認。西区溝の調査。参道脇の池にトレーンを入れ、池の石積みを確認。
- 10月8日(水) 1号池調査。西区ほぼ調査終了。
- 10月9日(木) 1号池完掘。石積みのポール写真撮影。台座地点のポール撮影。
- 10月10日(金) 中区西側精査。4号掘立の一部を拡張。ピット番号を付けて半截。台座地点の写真撮影。安全対策のため池をコンバネで一日封鎖する。
- 10月14日(火) 中区精査。台座列断面図作図。
- 10月15日(水) 台座地点掘り下げ。寛永通宝など出土。中区精査。4号掘立完掘。土坑掘り下げなど。
- 10月16日(木) 台座地点掘り下げ。上坑調査。中区精査。
- 10月17日(金) 台座地点の一部拡張。台座を取り上げ、下層を調査。中区の土坑をほぼ完掘。シートの片付け。4号掘立完掘写真撮影。
- 10月20日(月) 台座地点精査。ポール撮影。下層掘り下げ。5号掘立柱穴半截。4号竪穴竈調査。
- 10月21日(火) 台座地点下層精査。土坑3基確認。5号掘立断面図。完掘。空撮準備。
- 10月22日(水) 40号土坑、ピット群調査。10～12号溝調査。
- 10月23日(木) ラジヘリによる空中写真撮影。全体写真、各遺構の完掘状況写真撮影。
- 10月24日(金) 補足調査。
- 10月27日(月) 補足調査。
- 10月28日(火) 重機による埋め戻し開始。
- 10月29日(水) 埋め戻し。
- 10月30日(木) 埋め戻し。
- 10月31日(金) 埋め戻し。室内で図面整理。

【発掘調査作業員】(敬称略)

奥石邦次 角田勇雄 清水征二 名取正司 横内清次 茂内達 鷹野義朗 藤巻敏也 平賀早苗 坂本行臣 原島進 萩原忠 藤原五月 岸本美苗 窪田信一 岩崎誠至 筒井聰 皎田勝大 早川栄蔵 長谷川規愛

第3節 整理等作業の経過

遺物整理、報告書作成作業については、平成21年8月26日から平成22年1月29日までの間、山梨文化財研究所内で実施した。遺物水洗のち、遺物の総量を把握するため、各遺構ごと、種別ごとの出土重量を計測した。その後、注記、接合作業、遺構内同一個体の識別、遺構内接合を行ったのち、遺構間での接合関係を調べ、接合がひととおり終了したのち、実測図化用資料を抽出、図化した。遺物については2倍図で図版を組み、トレースを行った。遺構は空撮写真の図化データをもとに、遺物出土データを合成し、遺構図の修正、遺物分布図、接合図の作成、断面投影を行った。また現場での手取りの断面図等をパソコンに取り込み、パソコン上でトレース、レイアウトした。塹内土壤などのサンプルは、乾燥のち乾燥重量測定、水洗選別を行い、炭化種実などを抽出し、同定委託した。配石等で出土した焼骨については、洗浄、抽出のち同定委託し、伴出した炭化物については樹種同定および放射性年代測定をすることとした。以上の同定・年代測定は株式会社アーヴィング・サーサイエンスに委託した。また1号土坑出土馬歯に関しては年齢などの同定を山梨県立博物館の植月学氏に依頼した。

【整理作業員】(順不同 敬称略)

竜沢みち子・岩崎満佐子・古郡明・齊藤ひろみ・須田泰美・田中真紀美・広瀬悦子・藤井多恵子
原野ゆかり・小林典子・小林裕子・大村明子・長田由香・伊藤美香・角屋さえ子・三森つる子・藤原五月
渡邊美伸・小林登志恵・佐藤広美

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

三ヶ所遺跡は山梨県甲府盆地東側、JR山梨市駅と塩山駅の中間付近にあたり、山梨市域東端、甲州市寄りに位置する。盆地東部を流れる笛吹川が形成した扇状地地形の台地面、南東向きの緩やかな平坦地に立地し、笛吹川とその支流重川に挟まれた中間付近に位置する。標高は361～362m。JR中央線、東山梨駅の東方500mにあり、現在周辺はブドウ・モモを主とする果樹地帯、住宅地となっている。遺跡分布図における三ヶ所遺跡は、東西520m、南北570mに及ぶ広大な範囲で、古代から中世の集落遺跡とされていて、連方屋敷、清白寺を含む一帯となっている。今回報告する本調査を実施した地点は、東山梨駅と後屋敷地区方面を結ぶ新設道路の予定地内で、南北に直線的にのびた清白寺参道と、従来より存在する東西方向の細い農道とが交差する地点を中心に、農道に沿って東西方向に展開する。このあたりは平坦で日当たりも良く、土壤も肥えているが、大きな河川からは離れていて、調査区東端に南流する五箇村堰開設により水田が開かれる以前は、水に乏しい地域だったようである。今日の果樹地帯となる以前は水田地帯であり、畑の区画に水田面の痕跡をとどめている。

第2節 歴史的環境

三ヶ所遺跡周辺には連方屋敷、清白寺の存在が物語るように、東山梨地域でも中世以来の最も重要な地域のひとつであったことは言うまでもない。さらに周辺の条里的な地割の存在も大いに注目される点である。条里地割の成立時期は定かではないものの、本遺跡周辺には随所に認められるもので、連方屋敷、清白寺も地割の一角を占めるように位置する。また連方屋敷の正面南中央には、南北の通りに面して町屋的な地割の発達が認められ、連方屋敷との関連性は明らかである。遺跡分布をみると、周辺には平安時代を主とする古代以降の遺跡が点在するが、中でも本遺跡は格段に大きな遺跡といえる。

清白寺（山号 海涌山）は調査区北側に位置する。正慶2年（1333）あるいは觀応2年（1351）の創建で、開基は足利尊氏、開山は夢窓疎石とされ、開創は二世住職、疎石の高弟清溪通徹である。ただし正慶2年説、觀応2年説（夢窓の没年）はともに明治になってからの新説とされる。夢窓自身は嘉元3年（1305）10月～憲治2年（1307）2月、延慶元年（1308）7月～2年春、2年7月～正和2年（1313）春、元徳2年（1330）9月～元弘元年（1331）2月、正慶元年（1332）春～2年3月の間、甲斐在住が確認できるといわれ、永徳2年（1382）には惠林寺住寺絶海中津が米寺するなど夢窓開山説は信憑性が高いものの、尊氏開基は考えにくいという（山梨市2006）。



写真1 清白寺仏殿及び庫裏



図1 遺跡の位置

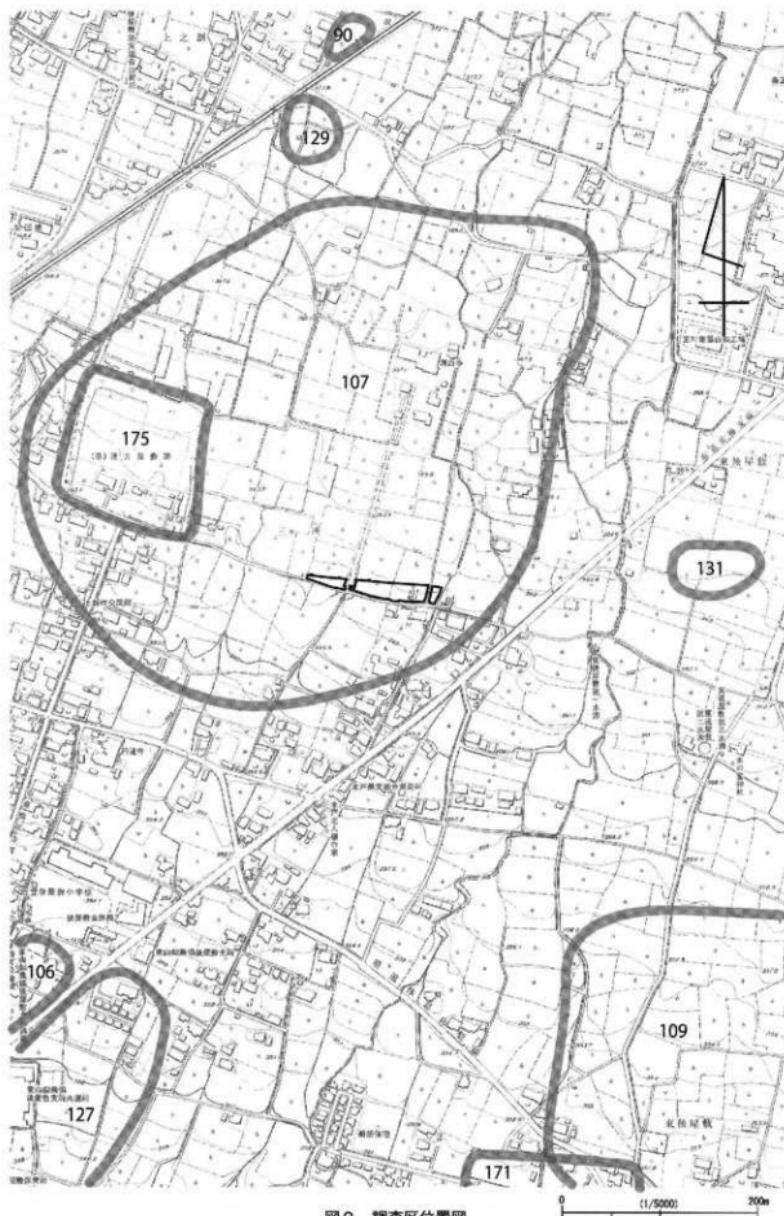


図2 調査区位置図

本尊觀迦如來。伽藍配置は懸門、山門、仏殿、本堂が南北に一直線の配置を示す禅宗形式をなす。国宝仏殿は檜皮葺きの方三間表附入母屋造で、禅宗様式の建築であり、大正6年の修理の際に発見された身舎組物の墨書きにより応永22年（1415）建立と判明しており、応永年間に大規模な伽藍修復がされたと考えられている。仏殿以外を焼失したのち寛永7年、諸堂再興を発願、同18年工事を終え、正保2年（1645）鎌倉建長寺末から妙心寺末に転派したが、天和2年（1682）12月に火災で諸堂焼失、貞享年間に惠林寺から入寺した蘭室により再建工事が始まり、享保ころまで続き、享保16年（1731）の懸門完成で寺觀が整った（山梨市2006）。なお仏殿は寛保3年（1743）屋根葺、天明元年（1781）、明治12年（1879）に修理が行われ、明治40年に特別建造物（旧国宝）指定、大正6年解体修理、昭和30年屋根葺のうち国宝指定された。また元禄2～6年（1689～1693）再建とみられる庫裏は、昭和60年県指定のうち国重文となった。また本堂は、元禄年間建立で市指定文化財。なお寛永年中から当寺住職は寺子屋を開いており、享和年間（1801～4）には200名もの化徒があり、学制頒布の明治5年まで開校していたという（山梨市2006）。

仏殿内には一本造りの平安仏（十一面觀音立像、平安前期）も安置されていることから、寺院の開設が平安時代に遡る可能性があるとされる。また現在地より北二町の「古寺家」が夢窓開山当初の寺地であったという由緒書があり（山梨市2006）、前身寺院が存在した可能性も指摘されるところである。なお清白寺成立に関しては遠方屋敷の館主の菩提寺と推定する説もあるなど、所在する位置関係が近いことから両者を関連付ける見方がある。

調査区の西、東西道路に沿って250m先には、中世の居館跡として知られる県史跡、遠方屋敷がある。東西117～130m、南北120mの四周に土塁をもつ単郭方形居館で、一般的な中世居館跡よりもひとまわり大きく、土塁の遺存状況が良好な点が特徴的である。館主の伝承については、安田義定の九世安田孫左右衛門尉光泰（連峯入道）がこの屋敷に居住し連峯屋敷と呼ばれたという記録があるとされるほか、「甲斐國志」は「藏前宗ノ頭四人」のうち2名が古屋氏で、屋敷地内に當時古屋氏2名が居住し、同衆には古屋氏が多いこと、周辺に古屋氏が多く居住していることから、藏前衆古屋氏一党との関連を推測する。また上野晴朗氏は南側中央に門があり街区がのびていることから、「藏前の門所」と推測している。居館跡内には南側に人家があって、南側と西側は土塁を一部欠くが、西側から北側にかけて土塁が良好に遺存している。居館内ではこれまでに平成6年に住宅建て替えに伴い南東隅で調査が行われ、集石遺構に伴い常滑壺（13世紀末～14世紀初頭）、内耳土器（15世紀か）が出土した。平成15年に居館内9138m²が山梨市に寄付されたのち、史跡整備・学術調査のための試掘調査が平成16年から現在まで、山梨市教育委員会により継続的に実施されていて、2007年までに53か所、62本のトレンチにより1300m²が調査されている（三澤2007）。その結果、屋敷地中央で南北に細長い礎石を伴う挿立柱建物1棟、南北寄りで東西の礎石建物1棟が確認され、中央の礎石面から高麗青磁梅瓶片（13世紀前半～後半）、龍泉窯青磁蓮弁文の碗片（13世紀中葉）が出土したほか、14世紀中～15世紀前半と考えられるわらけ集中区などが検出されている。16世紀の遺物はほとんどなく、その後近世陶器類が出土することから、14世紀以前築造、衰退期を含みながらも近世以降まで存続したと考えられ（三澤2007）、清白寺の建立、周辺地割や条里との関連性が指摘されている。

市内の条里プランについては山梨市史に詳しい（中山2005）。それによれば笛吹市一宮町・甲州市塙山・山梨市後屋敷をはじめ重川右岸に広く展開する峡東条里と、笛吹川右岸、兄川削状地の八幡地区を中心に広がる八幡条里の2者の区別が可能で、前者は南北軸が真北から12°東に傾き、後者は24°東に傾く。峡東条里は一宮浅間神社と清白寺東の道（本調査区中区と東区間の農道）付近を直線的に結ぶ南北ラインを軸線とする広がりをもち、熊野神社・首田天神社（甲州市）、大井保神社（山梨市）などが条里プランに組み込まれるといわれ、今宵遺跡（笛吹市一宮町）、桜井畠遺跡（甲府市）などの考古学的調査の事例から9世紀前半での施工が考えられるという。一方、八幡条里は窟八幡神社と天神社（山梨市）、熊野神社（甲州市）を結ぶ東西ラインを軸線として広がり、その成立時期は窟八幡神社、天神社の成立時期から16世紀初頭またはそれ以前と考えられ、牧庄、安田氏の勢力圏との関わりを伺うことができる中世莊園の条里プランとさ

れる（中山 2005）。本遺跡の調査区域一帯にみられる地割については、峠東条里の中心軸線上に位置するとともに八幡条里が峠東条里に接続する地域にあたり、条里プラン成立を検証するうえで重要な地域といえる。そのほか、これまでに調査が行われた奈良・平安時代の遺跡をいくつか説明する（図1）。

日下部遺跡は、三ヶ所遺跡西方約1kmにある平安時代の集落遺跡である。日下部中学校（現 山梨北中学校）校舎建設に伴い昭和24年に調査が行われたもので、全国的にも古代集落の調査例としては先駆的な事例である。5次調査の結果、9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居28、掘立柱建物跡1、溝4が検出され、墨書き土器（真・正・南・田・鑿・柄井など）、腰帶具（巡方・丸韁・鉗具）の出土が注目される。

江曾原遺跡は本遺跡の西3.5kmにあり、日下部遺跡とともに昭和25年に調査された。時期は明確ではないが、平安時代の竪穴住居3、掘立柱建物跡2、井戸、大溝などが検出され、溝内からはクルミ・モモ・ウメ・オオムギ・コムギ・イネなどの種実が出土している。

七日子遺跡は本遺跡の北約2kmに位置する。筒粥神事で有名な七日子神社の裏手にあり、平安時代、10世紀前半の竪穴住居4が検出されているほか、道をはさんで東の畑で布目瓦が採集できる。寺院の規模、伽藍配置などは全く不明ではあるが、古代の堂あるいは守院があるとされ、七日子庵寺として知られている。

図2に三ヶ所遺跡の位置および周辺遺跡の分布図を示す（番号・位置は山梨市遺跡分布図に準拠）。

No	遺跡名	種別	所在地	時代
90	唐上遺跡	散布地	三ヶ所字唐上	古墳・中世
106	新町東遺跡	散布地	三ヶ所字新町東	縄文
107	三ヶ所遺跡	散布地	三ヶ所字寺平	平安・中世
109	東後屋敷遺跡	集落跡	東後屋敷字小屋敷	縄文・奈良・平安
127	原遺跡	散布地	三ヶ所字原	古墳
129	上之割八王子遺跡	散布地	上之割字八王子	平安
131	梨木遺跡	散布地	上之割字梨木	平安
171	武田金吾屋敷跡	城館跡	東後屋敷字小屋敷	中世
175	連方屋敷	城館跡	三ヶ所字連方	中世

【参考文献】

- 上野晴朗 1972『平安武出氏』新人物往来社
上野晴朗 1983『式田何女 城と兵刃』新人物往来社
上野晴朗 1987『日下部 日下部遺跡調査報告書 付 七日子遺跡 江曾原遺跡』山梨市教育委員会
山梨市教育委員会 2002『山梨市遺跡分布図』
斎野雅彦 2005『連方屋敷』『山梨市史 史料編 考古・古代・中世』山梨市
中山誠二 2005『条里』『山梨市史 史料編 考古・古代・中世』山梨市
山梨市 2006『清白寺』『山梨市史 文化財・社寺編』
三澤達也 2007『連方屋敷』『山梨考古』106

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

市教委の試掘データをもとに重機により造構確認面まで表土剥ぎを行い、測量のための基準杭を打設、国家庭標を付けた。造構確認面を鏽筆により精査し、豊穴、溝などの掘り込みを確認したち掘り下げ、出土遺物は光波測量機およびノートパソコンによる図化システム（「造構くん」アイシン精機製）により3次元データを記録しながら取り上げた。掘りあがった造構はカメラ搭載のラジコンヘリにより空撮を行い、平面図化を行った。そのほか個別の造構や、覆土中での礫出土状況などは、ポール先端にカメラをつけた簡易空撮システム（ポール撮影）により空中写真撮影を行い、空撮データに合成した。そのほか記録写真は、一眼デジカメ、一眼レフカメラ（リバーサル・白黒）により適時撮影を行った。

調査区範囲は細長く、周辺に残土置き場を確保できなかつたことから、調査区内を南側、北側の2分割調査することとし、2回に分けて表土剥ぎを実施、空撮も2回実施した。調査区は南北方向の道・参道を境に、便宜的に東区・中区・西区の3地点に区分して呼称した。また参道右側で追加調査した池跡は、池地点、西区南東で拡張した地点は、石造物台座が配列していたことから台座地点と仮称した。

豊穴住居はセクション図、覆土中の礫出土状況の平面図、床面の硬化面範囲を光波またはポール撮影で記録したのち、先掘状況の図化用写真としてポール撮影を行つた。掘り方掘削後、掘り方平面図のためのポール撮影を行い、断面図を作図した。柱穴程度の掘り方をもつピットについては直径、深さ、土質の観察をし、断面図作成は行つてない。ピット以上の直径をもつ墓坑的な規模の穴は土坑とし、セクション図を作図した。出土遺物については、微細遺物を除き出土位置を記録、遺物番号を付けて取り上げた。Noは遺跡全体で遺構内外に関わらず通し番号とし、図化システムデータから台帳を作成、造構名等の情報を確認できるようにした。

第2節 層序

基本層序はとくに設定していない。また下層の堆積状況確認のための深掘りは行つてない。ただし、西区の4号豊穴、中区の1号掘立、4号掘立68号ピット、2・3号豊穴等、各所で地表面からの堆積状況を断面実測しているので、参照されたい。基本的にはもと水田面で、南方向の緩やかな傾斜面を平坦に造成していることから、全面的に水田の床土面があり、とくに南側には盛り土痕跡が認められる。造構確認面は褐色粘質土で、小砾が露出するところがある。

第3節 造構

調査区は、農道、参道で区切られた東西に細長い3ブロックとなっている。ここでは西側を西区、中央の最も面積が広い部分を中区、東端の農道と堰の間を東区と呼称する。

検出された造構は以下の通りである。

豊穴住居4　掘立柱建物5　土坑42　溝12　ピット　池1

西区では農道に沿って2本の溝が東西方向に平行に走り（1・2号溝）、直交するように清白寺参道に沿って3本重複しながら存在する（6～8号溝）。それらの溝は道の側溝と考えられることから、現在の道の前身とみられる。また1・2号溝に切られるようにして斜め方向に3号溝がある。1号溝の中央、溝と重複して1号土坑があり、馬歯が出土したことから馬の墓と考えられる。また1号溝西端では下層から平安時代の4号豊穴が検出されている。西区南東隅からは石列および石造物の台座3基が並んで検出された。現在、調

表1 ピット一覧表

番号	区	横cm	縦cm	備考
1	中区	31	31	標準地寸
2	中区	43	31	標準地寸
3	中区	52	31	標準地寸
4	中区	66	26	標準地寸： 線引寸
5	中区	57	31	標準地寸
6	中区	66	31	標準地寸
7	中区	66	26	標準地寸： 線引寸
8	中区	102	59	標準地寸： 「野原古」
9	中区	51	99	1号地寸： 66cm
10	中区	52	49	標準地寸
11	中区	24	57	標準地寸
12	中区	31	61	標準地寸
13	中区	96	61	標準地寸
14	中区	74	47	2号地寸： 66cm
15	中区	85	53	標準地寸
16	中区	66	41	標準地寸
17	中区	73	41	標準地寸
18	中区	91	48	標準地寸
19	中区	84	41	2号地寸： 66cm
20	中区	35	27	標準地寸～標準地寸： 16～21ピットは測量内に記載
21	中区	102	36	標準地寸
22	中区	36	22	標準地寸
23	中区	60	33	標準地寸： 「野原古」 線六丈
24	中区	74	62	標準地寸： 線六丈
25	中区	102	26	標準地寸
26	中区	66	22	標準地寸～標準地寸
27	中区	65	22	標準地寸～標準地寸
28	中区	44	65	標準地寸： 20号ピットと連接
29	中区	35	35	標準地寸
30	中区	70	43	標準地寸
31	中区	70	49	標準地寸： 線六丈
32	中区	42.5	75	標準地寸： 線六丈
33	中区	39	41	標準地寸～標準地寸： 線六丈
34	中区	44	21	標準地寸： 線六丈
35	中区	74	21	標準地寸
36	中区	74	41	標準地寸
37	中区	26	60	標準地寸～標準地寸： 線六丈
38	中区	61	21	標準地寸
39	中区	51	20	「野原古」 標準地寸： 上野原
40	中区	51	18	「野原古」 標準地寸： 上野原
41	中区	91	49	標準地寸
42	中区	56	32	3号地寸： 標準地寸
43	中区	71	63	標準地寸
44	中区	63	41	標準地寸
45	中区	51	27	標準地寸
46	中区	66	27	標準地寸
47	中区	55	37	5号地寸： 標準地寸： 線六丈
48	中区	31	34	標準地寸
49	中区	61	25	5号地寸： 標準地寸： 「野原古」
50	中区	69	31	5号地寸： 標準地寸： 「野原古」
51	中区	70	38	標準地寸
52	中区	36	30	標準地寸
53	中区	67	25	5号地寸： 標準地寸
54	中区	53	39	標準地寸～標準地寸
55	中区	53	50	標準地寸
56	中区	49	21	標準地寸
57	中区	37	28	標準地寸
58	中区	35	51	標準地寸
59	中区	25	30	標準地寸
60	中区	18	18	標準地寸
61	中区	65	29	標準地寸
62	中区	79	56	「野原古」 標準地寸
63	中区	117	46	4号地寸： 標準地寸
64	中区	91	67	4号地寸： 標準地寸
65	中区	102	124	4号地寸： 標準地寸
66	中区	101	124	4号地寸： 標準地寸
67	中区	99	97	4号地寸： 標準地寸
68	中区	102	124	4号地寸： 標準地寸
69	中区	62	56	
70	中区	21	53	
71	中区	13	53	
72	中区	21	27	
73	中区	59	36	
74	中区	50	66	
75	中区	86	61	5号地寸： 標準地寸
76	中区	86	61	5号地寸： 標準地寸
77	中区	82	62	5号地寸： 標準地寸
78	中区	88	15	5号地寸： 標準地寸
79	中区	70	64	5号地寸： 標準地寸
80	中区	18	18	5号地寸： 標準地寸
81	中区	72	46	5号地寸： 標準地寸
82	中区	39	51	5号地寸： 標準地寸
83	中区	65	95	5号地寸： 標準地寸
84	中区	69	31	標準地寸
85	中区	69	41	標準地寸
86	中区	41	41	標準地寸
87	中区	28	36	標準地寸： 線六丈
88	中区	59	60	標準地寸： 線六丈
89	中区	26	34	標準地寸： 線六丈
90	中区	62	49	標準地寸： 線六丈
91	中区	50	49	標準地寸： 線六丈
92	中区	33	44	標準地寸： 線六丈
93	中区	33	44	31号地寸： 線六丈
94	中区	23	36	33号地寸： 線六丈
95	中区	62	37	33号地寸： 線六丈
96	中区	39	39	33号地寸： 線六丈
97	中区	65	60	33号地寸： 線六丈
98	中区	35	41	31号地寸： 線六丈
99	中区	34	45	31号地寸： 線六丈
100	中区	69	67	31号地寸： 線六丈
101	中区	69	55	31号地寸： 線六丈
102	中区	64	77	33号地寸： 線六丈
103	中区	55	23	33号地寸： 線六丈
104	中区	44	28	33号地寸： 線六丈
105	中区	45	31	33号地寸： 線六丈
106	中区	21	37	33号地寸： 線六丈

表2 遺跡別遺物出土量(g)

種 文	土 器 類 別 名	須 北 否	土 器 類 別 名	世 間 形	近 世 陶 器	灰 陶 器	鐵 製 品	古 銅	そ の 他
1型火	54	910	3517						
1型火下		22	92						
1型火上		100	1174						
2型火		205	1792	16			26		
2型火下		5	18						
2型火上		29	170						
3型火		118	240	38			42		
3型火下		1	24						
4型火		34	62				2		30
4型火上		25	12						
遺物・他	712	3660	752	232	62	92	90	42	6 104
2			12						
3			6						
13		5	26						
18					27	180	108		34
20		16				35	44		
24			4			39	4		
27		8	19						
29		4	19						
30			2						
32			6						
33							21		184
34									2
35			13						
36		1	4			100			22
43		49							
上層	80	171	26	137	9	166	9	68	220
20層		26	21	3	65				
30層		14							
60層		170	42	6		17			3
70層		20	6						
80層									
90層		100	39	6		17			3
100層			19						
112層		8			9				
42層			3						
62層		13							
63層		3							
107層			23						
212層		5	4	33					
222層		20							
322層			12						
342層		9							
382層		16							
511層		2	6						
532層		16	5						
552層		1							
562層			3						
582層				26					
592層			5						
593層		3							
592層		40							
602層		5							
622層		7	2						
692層		30							
732層		3							
742層			17						
802層				14					
1型V12ビ		1	1						
1型V13ビ			4						
1型V9ビ		111	17						
1型V10ビ			7						
2型V13ビ			6						
2型V14ビ			14						
2型V16ビ			26						
3型V42ビ		8	7						
3型V47ビ			17						
3型V51ビ			8						
3型V50ビ			6						
3型V53ビ		2	5						
4型V32ビ		10	4						
4型V53ビ		14	8						
4型V64ビ		17	48	13					
4型V53ビ			19						
4型V66ビ		15	11						
4型V67ビ		23	41						
4型V68ビ		11	11						
4型V69ビ		24							
5型V49ビ		9							
5型立柱		11	16						
古墳地	3	176	52	20	182	265	76	306	150
1型石			50		2				4
1型石		7	50						
合計	951	3531	8429	540	372	623	562	79	1053
									45 568
									総重量 16,778

査地点北側に「海浦山清白押寺」という標柱をはじめ、石灯籠、石仏等を移動してまとめた地点があるが、それらが元々存在した地点にあたる。古座地点の東側、参道脇には、参道脇の水路近くに池があったという話を調査中に地元の方より知られた。路線予定地内にあたるため試掘したところ、話のとおり石積みで囲んだ池が見つかった。中区では中央付近に竪穴住居が3軒存在し、その周辺に一部竪穴住居と重複するよう掘立柱建物が存在した。区内は全体的に細かな耕作痕が著しく、その中にビット、土坑などが点在した。東区には南北方向の溝2本が平行して存在し、現農道に先行する旧道路側溝と思われる。また用途は不明ながら大形隅丸長方形の土坑が複数重複して存在した。

1号竪穴（第6・7図）

（位置）中区中央やや東寄り、5号掘立と重複して存在し、壁には掘立の柱穴やそのほか複数のビットとの切り合いにより、やや複雑な形態を呈する。

（形態）東西3.5m、南北3.5mの隅丸方形で、東壁、南東隅寄りに竪がある。主軸方向はE-12°-S。周溝は不明確であるが、壁際には全周するように掘り方としての落ち込みがある。床面には中央付近に硬化面が明瞭に残り、一部貼り床も存在した。つまり竪穴住居構築にあたり、床面中央を掘り残すようにして四周の壁際を幅広に掘削するというタイプの掘り方をもつ。床面までの深さは38cmである。

（覆土）南北にベルトを残して土層を観察した。暗褐色土を主体とし、壁際には壁の崩落土と思われる黄褐色土が堆積する。覆土中位へ下位にはやや大型の礫がドーナツ状に分布し、ほとんどが床面から浮上しているのが特徴的である。竪周辺にあるものに関しては竪由来の礫を含むものとみられ、一部被熱した礫もみられたが、天井石に相当するような大形礫はみられなかった。円礫状、梢円形状の礫が多く、それらの礫中には磨り面をもつ38のような使用痕のある礫も含まれる。掘立の柱穴に相当する位置に確認面から掘り込まれた搅乱状のビットが床下まで達するように存在する。断面図によれば竪穴住居よりも掘立柱穴が新しいと判断されるが、たまたま柱穴の位置に重複した搅乱状の穴と考えられ、また他の柱穴と竪穴の切り合い関係を見ると、掘立が古く、竪穴が新しい。

（竪）東竪で、壁際に1.1×0.7mの楕円形の掘り方をもち、標道はわずかに東壁に突出する。袖石には南側に1個の礫を直立させ、北側には一部2重にするように3個の礫を直立する。袖石の高さは25cm、幅8cmである。中央奥壁寄りに直立した石に土師器壺胴下半を逆位に被せた支脚が検出された。壺はやや細身の長胴タイプのハケメ甕で、高さ23cm、最大幅15cmを測り、底部中央には直径4×5cmの穿孔がある。通常は礫のみ、あるいは土器のみの支脚を見ることが多いが、礫に土器を差し込んだ事例は管見では知らない。また底部に穿孔があるという点も珍しく、実用面以外の精神性に関わる行為のようにも思われる。

（遺物）床面上から完形品の土師器壺・皿が4点出土した。床面中央から北側にかけてみられ、3点は正位で、1点は逆位で出土している。逆位出土の1点には、体部外面に墨書き「東大」が書かれている。また床面よりやや浮いて甕がまとめて出土している。そのほか覆土中の遺物は本遺跡内の他の住居に比べると多く出土したが、西・北壁寄りからは少なく、竪周辺、南壁寄りに分布の傾向がある。出土量は、土師器類は5821g出土し、うち壺類1038g、甕類4783gと甕類が非常に多い。

（年代）甲斐型土師器壺・皿の年代観から口縁部が飞縁化する10世紀前半およびその直前段階の9世紀後半代といえる。

2号竪穴（第7・8図）

（位置）中区中央南壁寄り、調査区外にかかるようにして検出され、拡張して可能な限り掘り広げた。西隣には3号竪穴が並ぶように存在する。

（形態）調査区外にかかるため全体像は不明であるが、東西3.8m、南北は現状で2mで、隅丸方形あるいは長方形と思われる。主軸方向はN-7°-E。壁の高さは40cm。竪は北壁、わずかに東寄りにある。周溝は西壁にのみ存在し、幅20cm、深さ10cmである。掘り方の有無を確認するため薄く床面を剥いだところ、全面的に礫層露出面となり、竪脇と床面に浅いビットが検出されたのみで、大がかりな掘り方地業は行っていない。

い。

(覆土) 第7図では北側から見た断面図を反転して図示しているが、3層から上は盛り土で、北側の切り土を平にならしている。竪穴覆土は5層以下で、暗褐色土を主とする。礫が床面より浮上して散在しているが、数は多くない。

(竪) 小形礫が竪の奥壁に積み重なるようにして並び、一部直立した礫、煤が付着した礫もみられるが、袖石ではない。また天井石ではなく、覆土周囲にもそれらしい礫は見当たらなかった。礫は地山の礫が露出したものとも思われる。竪の掘り方は浅い皿状で一部被熱し、地山の小礫が露出する。南北1.5m、東西1.1mの楕円形で、煙道は壁から40cm余り突出し、斜めに北側に立ちあがる。支脚石はないが、燃焼部中央がわずかに深くくぼんでいる。

(遺物) 覆土中位から下位にかけて少量分布する。破片化した甕類が多い。土師器類は計2218g出土し、うち壺類は238g、甕類は1980gと甕類が大半を占める。

(年代) 9世紀末～10世紀第1四半期。

3号竪穴(第7～9図)

(位置) 中区中央南壁寄りにあり、一部調査区外にのびていたため、拡張して竪穴の全体を明らかにした。東隣には2号竪穴がある。

(形態) 竪穴本体の規模は、東西3.1m、南北3.2～3.4mの隅丸方形で、東壁が西壁に比べやや長い。主軸方向はN5°・E。床面までの深さは30cmである。竪は北壁ほぼ中央に位置する北竪である。周溝は北西、南西、南東隅に部分的にあり、全局していない。床の硬化面は中央付近に2m×1.6mの範囲で認められた。床面を剥いで掘り方を探ったところ、南西・南東隅が浅い落ち込みをもち、それ以外ではわずかに全体が下がり、北東を中心に礫層面が露出した。

(覆土) 2号竪穴で見られた暗褐色土は上層の1層にあり、下層では壁際を中心に、にぶい黄褐色土が厚く堆積していた。礫は少なく、竪周辺などに小礫を中心にして散在する。

(竪) 竪は1×0.8mのごく浅い燃焼部に、1mの細長い煙道をもち、全体では南北1.8mとなる。確実な袖石はないものの、袖石の一部に用いたと思われる礫が向かって左側にあり、被熱し、煤が付着していた。そのほかにも小礫が袖石付近に数点存在するが、天井石をはじめ、袖石に用いられた礫は竪穴内に存在しない。

(遺物) 瓢南側、床面中央寄りにごくわずかに散在し、非常に少ないが、北西隅近くから鉄製錠がほぼ完形に近い状態で出土した点が注目される。出土量は土師器類406g、須恵器38gである。

(年代) 9世紀第4四半期。

4号竪穴(第9・10図)

(位置) 西区西端、調査区北壁にかかるようにして存在し、竪付近は拡張して完掘したが、竪穴本体は半分未満の調査にとどまった。1号溝が重複したため、覆土のほとんどを失っている。

(形態) 東西4m、南北は現状で2.4mで、隅丸長方形かと考えられる竪穴住居。東壁に竪をもつ。主軸方向はE-12°・S。周溝は南壁中央付近に部分的に認められるが、そのほかにはない。ただし壁際に幅40～80cmの広い周溝状を呈した掘り方が巡り、その内側には床面の硬化面が広く認められ、焼土分布、被熱面も存在する。竪も周溝状の掘り方に構築されている。

(覆土) 北壁での地表以下の上層断面を示したのが第9図断面である。竪穴覆土は4層以下で、黒褐色土、褐色土、黒褐色土からなり、ローム面を床面とする。

(竪) 東壁の全体を明らかにできなかっただけで、竪の位置が東壁のどのあたりにあたるのか不明であるが、やや南寄りと考えられる。燃焼部の掘り方は明瞭ではないが、周溝状に掘られた掘り方内に収まる。石組竪で、袖石は2個づつの円礫、角礫を55cmの間隔で立て、中央よりも南寄りに自然石を用いた支脚石を立てている。竪の幅が比較的広く、支脚石が南寄りに立つことから、南北に2口の穴を開けた2連式の竪の可能性を考えられる。天井石はない。また煙道はなく、壁外への突出した掘り方は認められない。

(遺物) 遺物はきわめて少ない。

(年代) 9世紀第4四半期。

1号掘立（第11図）

中区中央、南壁際に柱穴4本が直線的に並ぶ。壁面にかかるように検出されたため、拡張して柱穴列1列分を明らかにした。柱穴列の延長線上には関連する柱穴がないため、東西方向は4本（3間）で完結することがわかる。おそらく農道にかかるようにして南北に3本（2間）のび、東西に長い2×3間の長方形の配置を示すものと推測される。柱穴は両端の2本（7・10号ピット）の径が約100～125cmと大きく、中2本（8・9号ピット）が約85cmとやや小さい。柱穴の平面形は隅丸方形～円形で、主軸方向はE7°・Sである。柱穴セクションによれば覆土は黒褐色土、褐色土などで、柱痕は確認できない。柱穴の深さは50～60cm、柱穴間隔は心心1.7～1.85mで、7号ピットと10号ピット間の長さは心心5.2mを測る。

2号掘立（第11図）

中区中央やや西寄りに存在する2間×2間の方形配置を呈す柱穴列。中央に10号土坑が重複し、中央北寄りには中世の火葬骨を伴う1号配石が重複する。個々の柱穴間隔は1.5～1.6m、柱穴平面形は隅丸方形～不整円形で、直径75～95cmである。建物としては東西3.2～3.4m、南北3mで、わずかに東西方向が長い。主軸方向はN4°・Eと、1号掘立とほぼ同じ方向を示す。柱穴セクションによれば、11・12・13号ピットには中心付近に幅25cm程度の黒褐色土の柱痕が通るほか、12・14・15号ピットには柱の当たりを示す小ピットが底面に認められる。柱穴の深さは35～60cmで、おおむね50cm程度の深さを示す。

3号掘立（第12図）

中区中央、3号堅穴脇に存在する。東西2間、南北3間の方形建物で、主軸方向はN15°・E。柱穴はやや貧弱で、直径35～60cm。平面形は円形で、西列は3号堅穴に切られ、柱穴1本を欠く。柱穴の深さは20～35cmと浅く、柱痕は確認できなかった。柱穴間隔は東西柱穴間で1～2.1m、南北柱穴間で1.5～1.6m、全体では東西4.3～4.35m、南北4.4～4.5mを測る。

4号掘立（第13図）

中区西寄り、北壁調査区間にかかるようにして検出。東西3本（2間）、南北3本を確認し、さらに北側にのびることが推測されたため、2間×3間の南北に長い長方形建物と考えられ、主軸方向はN17°・E。南北4.2m以上、東西4.3～4.4mを測る。柱穴間隔は2～2.1m、柱穴の平面形は円形～一部楕円形、深さは50～70cmで、柱穴セクションによれば64～68号ピットには中心部に幅30～50cmの黒褐色土、暗褐色土が入り込んだ柱痕が認められた。また63号ピットには礎板石とみられる30cm大の平石が柱穴底面に据えられていたほか、64号ピットには柱の当たり痕とみられる小ピットが底面中央に確認された。

5号掘立（第14図）

中区中央、1号堅穴と重複して確認された。3間×3間の方形建物で、主軸方向はN9°・E。東西5～5.3m、南北5.2mを測る。当初、1号堅穴を調査した時点では、掘立との重複について確認できなかつたため、いくつかの柱穴を土坑として調査した。その後、盛り土の反転後に北側を調査した結果、柱穴列が連続することがわかり、掘立建物と認定、改めて調査した。柱穴は西側南北列が明瞭に検出できたが、それ以外はややわかりにくい。また南側東西列は1号堅穴に切られ、とくに82号ピットは攪乱状の落ち込みと重なり、わずかに柱穴の痕跡が掘り方に確認できた。柱穴間隔は1.7～2m、柱穴の深さは55～70cmで、柱穴セクションによれば、75号ピットには中心に幅30cmの柱痕が確認できた。また5号土坑、40号ピットでは柱の当たり痕が確認されている。

1号土坑（第15図）

西区中央、1号溝と切り合うようにして存在する。東西2m、南北1.3mの隅丸長方形の土坑で、深さ65

cm。断面は箱状。主軸方向は E-20°-S。覆土は黄褐色土で、直ちに埋め戻しが行われたらしく、確認段階では周囲の土との区別が難しい状況であった。周開東端、壁に貼りつくようにして馬歯の頸骨が出土した。齒の遺存状況は良好で、埋葬姿勢をそのまま留めるものとみられる。南向きに前歯を向けることから、東頭位南向きに頭を曲げて納めた馬の埋葬墓と考えられる。ただし 1 頭分を納めるにはやや小さい感がある。また骨は上下歯、下顎のほかには全く遺存していないかった。詳細については第 4 章第 4 節横月報告を参照。伴出遺物がなく時期は不明ではあるが、1 号溝に切られていることが第 29 図 D-D' の断面観察によりわかる。調査の過程でも、溝の確認後に土坑の存在が判明している。溝とほぼ同一方向に土坑の向きを設定していることから、周辺地割を意識して方向を決めていることが推測でき、清白寺の寺域へ埋葬したものといえる。一応溝よりも前、中世以降の所産と考えておくが、細かい時期は不明である。

2 号土坑（第 16 図）

中区東側に位置し、84 号ビットと重複する。直径 60cm の円形で、深さは 19cm。覆土は黒褐色土で、断面は浅いタライ状。

3 号土坑（第 16 図）

中区東側に位置する。直径 1.15 m の円形で、深さ 21cm。覆土は黒褐色土を主とし、断面は浅い皿状。

4 号土坑（第 16 図）

中区東側に位置する。直径 84 × 78cm の円形で、覆土は暗褐色土を主とする。深さ 25cm で、断面形はボール状。

6 号土坑（第 16 図）

中区中央、1 号竪穴南東に位置し、7 号土坑南側に隣接する。直径 78 × 72cm の円形土坑で、深さ 24cm。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土を主とする。断面形はボール状。

7 号土坑（第 16 図）

中区中央、17 号土坑南東に重複する。重機による表土剥ぎの際に焼骨片の集中箇所が見つかり、周囲に炭化物が多く含む焼土分布範囲が認められた。土坑の存在を想定し、東西にベルトを残して掘り下げたところ、断面に直径 80cm の土坑状を呈した焼土層の落ち込みが認められた（2 検）。ただ暗褐色土中に存在するため、遺構としては土坑自体の形を捉えることができなかった。焼土範囲は南北 1.1 m、東西 0.9 m で、中心部分に直径 20 × 10cm の範囲で焼骨集中部分がある。焼骨はその後の分析で人骨と判断され、報告については第 4 章第 3 節に譲る。

8 号土坑（第 17 図）

中区中央、3 号竪穴北東に位置する。1.1 × 0.8 m の楕円形の土坑で、深さ 20cm。断面は桶状。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とする。

9 号土坑（第 17 図）

中区中央西寄り、2 号掘立北側に位置し、2 号掘立 23 号ビットと重複する。いくつかのビットの集合体で、全体では 1.8 × 1.4 m の不整楕円形となっている。覆土は黒褐色土を主とし、深さは 18 ~ 32cm を測る。

10 号土坑（第 17 図）

2 号掘立内に位置するいくつかのビットの集合体。全体では 0.9 × 3 m の東西に長い不整形を呈し、深さは 10 ~ 22cm で、覆土は黒褐色土である。

11・12 号土坑（第 18 図）

中区中央東側、南壁寄りに位置する。12 号土坑は調査区外にのび、11 号土坑が西側に重複する。ともに不整楕円形で、全体形の大きさは 2.8 × 1.6 m、深さは 64cm と深い。遺構ではなく風倒木痕などの自然の落ち込みか。

13 号土坑（第 18 図）

中区西側、4 号掘立南側に位置する。0.9 × 1.4 m の不整楕円形で、深さは 45cm。

14号土坑（第18図）

中区西側、4号掘立南側に位置する。1×1.4mの楕円形で、深さは20cm。断面は浅い桶状。覆土は暗褐色土を主とする。

15号土坑（第19図）

1.5×1.4m、深さ0.75mの不整円形土坑を中心に東西にいくつかの掘り方が連結したピットの集合体で、全体では東西3.3mを測る。北側には36号土坑が重複する。

17号土坑（第16図）

中区中央、1号堅穴南東隅に重複し、7号土坑とした焼骨を含む土坑墓が南側上層に接する。直径1.2×1.6mの不整円形で、深さ40cm。断面は皿状。覆土中に礫を多く含む。

18号土坑（第20図）

東区北壁にかかるようにして存在する。東西5m、南北は調査区外にのびるため現状2mで、隅丸長方形を呈し、主軸方向はE-6°-W。表上下層から掘り込みがあり、鈍い黄褐色土・灰黃褐色土を覆土とし、深さは0.5mを測る。實際に周溝があり、幅30～65cm、深さ10cmの溝が西側の一部を除き全周する。床面は軟質で、硬化面はない。覆土中より戦時中以前に遡るのではないかと思われる鉄製品などが出土している。東区内にある他の類似土坑と関連するものと思われる。

19号土坑（第20図）

東区にあり、20号土坑と直交するように重複する。南北2m、東西4.3mの隅丸長方形で、主軸方向はE-20°-W。近接する18・21号土坑と同じ向き、ほぼ同じ大きさを示す。深さは40～45cmで、底はほぼ平らであるがやや東傾斜を示し、東壁の一部は袋状にえぐれている。覆土は周辺類似土坑と同じで、しまりのない鈍い黄褐色土などを主とする。

20号土坑（第20図）

東区、19号土坑と直交するように重複し、19号土坑を切る。東西2.3m、南北5mで、主軸方向はN-25°-E。ゆがんだ隅丸長方形で、深さは0.5～0.6m。底面はほぼ平らであるが、わずかに中央が高く、壁方向に対して傾斜が見られる。

21号土坑（第20図）

東区、20号土坑に連結するように接する。東西4m、南北1.7mの隅丸長方形で、主軸方向はE-17°-W。深さは70～90cmで、底面は東に向かって傾斜をもち、東壁は袋状にえぐれている。

22号土坑（第21図）

中区東側、調査区北壁際に存在する。直径1×1.1m、深さ20cmの円形土坑で、断面形はたらい状。覆土は暗褐色土。

23号土坑（第21図）

中区東側、調査区北壁際にあり、ほぼ同規模の23号ピットと重複する。0.9×1.2mの楕円形で、断面は箱状。深さは43cm。セクション図を見ると23号ピットに切られる。覆土は暗褐色土を主とし、礫を含む。

24号土坑（第21図）

中区東側、調査区北壁寄りにある。0.8×1.3mの楕円形～長方形土坑で、深さ35cm、断面形は箱状。覆土は暗褐色土である。

25号土坑（第21図）

中区東側、24号土坑南にある。直径1.3mの円形で深さは50cm。断面はわずかに袋状を呈し、底面は半たい。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土を主とする。

26号土坑（第22図）

西区東側、調査区北壁にかかるようにして検出。北側を拡張し、おおよその形を把握した。礫を覆土中に多量に含む集石土坑で、1.4×1.8mの楕円形と思われる。深さは40cmで、断面形はボール状。覆土は暗褐

色土を主とする。焼土・炭化物等ではなく、礫も被熱を受けた形跡が認められなかった。遺物がなく、性格について明瞭にできなかったが集石炉ではなく、墓に開わる土坑ではないかとみられる。

27号土坑（第22図）

中区西側にある。1.1×1.7mの不整形であるが、2基の土坑の重複と見られ、北側の土坑は0.8×1.1mの楕円形土坑で、深さ28cm。覆土は暗褐色土を主とする。

28号土坑（第23図）

中区西側、4号掘立東にあり、28～30号土坑が南北に連なる。28号土坑は調査区北壁寄りにあり、0.8×1mの楕円形土坑で、深さ20cm。底面は凹凸があり平坦ではない。覆土は暗褐色土を主とする。

29号土坑（第23図）

中区西側、4号掘立東、28号土坑南に位置する。いくつかのピットが重複し、複雑な形態となっている。2.5×1.3mの不整形楕円形で、深さ35cm、セクションによれば南側の30号土坑を切るらしい。断面直状を呈する。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とする。

30号土坑（第23図）

中区西側、4号掘立東、29号土坑南に位置する。小ピットが多数重複し、複雑な形態をなす。1.7×1.3mの楕円形で、深さ30cmを測る。断面形は凹凸があり、平らではない。

31号土坑（第24図）

中区中央、32～35号土坑北側にあり、調査区北壁に潜るようにして検出。直径0.9mの円形～楕円形土坑と思われる。深さ5cmと浅く、ピットが重複する。

32～35号土坑（第24図）

中区西側、4号掘立東に位置する。大形の不整形で、堅穴状ではあるが、住居ではない。当初4つの土坑のまとまりとして認識し、掘り下げるが、結果的にそれぞれが連結し、ひとつの大きな落ち込みとなった。ここでは当初の土坑番号をそのまま生かすこととする。全体では東西3.6m、南北4mで、深さ10～25cm。覆土は黒褐色土を主とする。遺物は33号土坑とした南西隅のあたりから土製粘土塊、鉄製刀子が出土している。

36号土坑（第19図）

中区西端に位置し、15号土坑と重複する。1.7×1.1mの不整形楕円形で、深さは25cm。

37号土坑（第24図）

西区東南の台座地点で検出。0.5×0.9mの長方形の土坑で、深さ0.6m。覆土は黒褐色土・褐色土を主とし、断面形は箱状で、現代の攪乱。

38号土坑（第24図）

西区東南の台座地点にある。1.1×0.95mの楕円形で、上面に配石があり、40cm大の平たい円礫からなる大形礫4個を中心とした礫が複数載せられた状況で検出され、覆土は暗褐色土を主とする。断面形は直状で、深さ30cm。底面は平らではない。配石層の一例か。

39号土坑（第25図）

西区東南隅、石列で囲まれた台座地点に位置する。70×65cmの隅丸方形～円形土坑で、深さ52cm。2つ東西に並んだ台座を取り上げて下層を調査したところ、第39図4の台座にかかるようにして検出された。覆土は疊泥じりの鈍い黄褐色土を主とする。底よりやや浮いて古銭が出土した。土坑南壁近くから12cm浮いて5枚のまとまりがあり、その脇に18cm浮いて1枚が出土している。古銭は計6枚あり、いわゆる六文銭とみられ、本土坑が墓であったことが推測される。ただし骨は出土していない。

40号土坑（第25図）

中区中央、1号堅穴、5号掘立の東側にある。0.6×1.3mの長楕円形土坑で、深さ55cm。断面箱状で、覆土は黒褐色土を主とする。底面には疊層面が露出する。

41号土坑（第25図）

中区中央、5号掘立北側、調査区北壁寄りにある。1.2×1mの楕円形で、深さ20cm。断面皿状で、覆土は暗褐色土を主とする。

42号土坑（第25図）

中区中央、5号掘立北西にある。90×70cmの楕円形で、深さ20cm。断面皿状で、覆土は暗褐色土を主とする。

43号土坑（第25図）

中区東側、調査区北壁にかかるようにして検出された。1.3×1.1m、深さ約1m。覆土中より諸磯式期かと思われる同一個体の繩文施文土器片2点が出土している。繩文前期の土坑の可能性が高いが、土器片は混入とも考えられる。

台座地点（第26図）

西区南東隅にあり、清白寺参道の向かって左側にあたる。調査区南東隅から、参道に平行する大形礫を直線的に並べた南北方向の石列が検出されたため、参道脇ぎりぎりまで拡張したところ、参道と直交する現農道に平行するように東西方向の石列が確認され、先の石列と直角にL字状を呈することがわかった。石列はさらに東側、参道下へ続いていることが推測されたが、それ以上の拡張は断念した。石列の長さは東西2.5m、南北3.4mを測る。東西の石列に平行するように、石造物の台座が3点、東西方向に並んで出土した。第39図の3～5で、3と4の間隔は13mあり、検出当初は礫石ではないかとして、参道の山門に関わるものかと考えたが、石造物の台座とわかり、本地点を遺構名としては適当ではないが「台座地点」と呼称することとした。上層からは直径5～10cmの大いな小礫が南側を中心に広がり、下層面にも礫層面が存在するが、断面観察によれば間層をはさむことから、礫による2つの整地面があることがわかる。遺物は礫中に混じるようにして土師質土器片、鉄製品、古錢などが出土している。現在、調査地点北側参道にある清白寺標柱の両脇に、石造物が2007年秋にまとめられて安置されているが、それらが本来存在したのがこの台座地点であったと思われる。移動にあたっては台座を残したまま石造物のみを移動したらしい。江戸時代の觀音像をはじめとする複数の石造物があり、どの石造物と台座が対応するのかわからなくなっている。この台座地点は参道と東西の道が交差する辻にあたり、清白寺への入口に石造物を配置したものと思われる。台座下層からは、台座に直接伴うものではないが土坑墓とみられる39号土坑が検出され、そのほか38号土坑も存在する。寺域内に墓地が作られたとみられるが、寺の正面入り口にあたるこのような場所も墓地として土地利用されていたことを示す事例である。

なお移設後にまとめられた石造物記年銘は次の通り。

向かって左側 念仏講塔（A）－嘉永元年（1848）

六地蔵2（B・C）－Bは享保16年（1731）

六地蔵石幢（D）－元禄3年（1690）

石仏2（E・F）

向かって右側 「海涌山清白禅寺」標柱

六地蔵石幢－元禄3年か

六地蔵－嘉永7年（1854）



写真2 参道左脇の石造物群

検出された台座3点は、おそらく左側の石仏2体（E・F）および六地蔵（B・C）のうちいずれか3つのものであろうと思われる。

1号池（第27図）

中区と西区の間、参道の向かって右側にある。もと清白寺標柱があった場所の北側に隣接する。参道脇に沿って流れる側溝の泥を溜めた池が30年以上前に存在したという話を地元の方より伺い、試掘溝を入れた

ところ、石積みが検出され、池に伴うものであることがわかった。標柱の台座の直下にあたるため、完掘することはできなかったが、東西 2.4 m 以上、南北 3 m の長方形であることがわかった。西・北の石積みは自然石を落とし積み風に 2 ~ 3 段積み上げたもので、南については石積みの状況は不明瞭であった。また東については調査区内に石積みはなく、側溝の側壁にまで広がる可能性がある。深さは 0.8 m、底は平らである。覆土は鈍い黄褐色粘土と砂層の互層を主とし、遺物はほとんど伴っていない。

1号配石（第 27 図）

中区中央やや西側、2号掘立の上層に位置する。重機による表土剥ぎの際、掘立の確認面よりも 25 cm ほど上面に焼骨を伴う炭化層が検出され、周囲には 15 cm 大の自然礫が 10 個ほどまとまり、配石を形成していた。その中心部分に炭化層があり、周囲には径 0.4 × 0.8 m の範囲で炭化物・焼土粒・焼骨を伴う層があつて、その下層の一部に焼土層がみられた。この配石を中心とした火葬施設と考えられる。焼骨は人骨で、詳細については第 4 章第 2 節の分析に譲る。1号配石の 35 m 東に位置する 7 号土坑でも、やや多くの焼骨が出土しているが、この一帯が清白寺南側にあたり、寺域内と考えられることから、火葬地として利用されていたことが考えられる。

1号溝（第 28 図）

西区で検出された東西方向の直線的な溝で、38 m を確認し、東端が台座地点の石列に切られるが台席列付近に 1号溝の継ぎらしい溝があり、さらに中区西端に南壁際に落ち込みがあることから、1号溝が直線的に伸びているものと思われる。主軸方向は E-25°-S。幅 0.9 ~ 1.9 m、深さ 30 cm で、覆土中に礫が多く含む。溝中央部と西側で断続的に溝が重複している。南側にある 2号溝とはほぼ平行し、両者は旧道路の側溝と思われる。溝の間隔は 1.3 ~ 1.8 m を測る。遺物には土師質土器や中世陶器があり、中世後期、15・16 世紀の溝と考えておきたい。溝の方向は、この地域一帯にみられる条里地割の東西方向と合致するものであり、連方屋敷を含めたこの付近の地割およびその成立年代を考える上で参考事例となる。

2号溝（第 28 図）

西区、南壁ぎわで確認された東西方向の直線的な溝で、27 m を確認した。主軸方向は E-19°-S で、1号溝とは同じであり、1号溝と共に旧道路側溝をなすと思われる。ただ覆土の状況は 1号溝と異なり、礫があまり入っていない。また西端ではまる傾向にあることから、両者で一対ではなく、時期差のある溝の重複とも考えられる。溝幅は 1 m、深さ 0.3 m。

3号溝（第 28 図）

西区、中央付近にあり、1・2号溝に切られる直線的な溝で、約 8 m を確認した。主軸方向は N-12°-W。この溝は他の条里地割の方向の溝とは異なり、斜め方向に南流している。幅 1.1 ~ 1.5 m、深さ 20 cm。1・2号溝よりも古いことから、現在、付近に見られる地割の成立以前の土地区画のあり方を探る意味で示唆的である。

4号溝（第 31 図）

東区、農道脇にあり、南北に 10.5 m、直線的に続く。主軸方向は N-19°-E で、現農道とは同じである。東側に 5号溝が平行して走る。両者の間隔は約 2.5 m で、2 本平行することから道の側溝と見られる。溝は幅 30 ~ 50 m、深さ 8 cm で、北側では 20 号土坑付近で消失する。土坑群の存在によって、その先の状況がわからない。2つの溝をつなぐように直交方向の細い溝が溝間に 2 本存在する。溝間には硬化した油はない。

5号溝（第 31 図）

東区、4号溝東にあり、南北方向に 9.5 m、直線的に続く。主軸方向は N-15°-E で 4号溝とは同じである。溝は幅 70 ~ 80 m、深さ 12 cm。21 号土坑手前で消失している。

6号溝（第 28 図）

西区、参造西側の 3 本の南北溝のうち、東側の溝。長さ 10.5 m、幅 0.6 ~ 1.5 m、深さ 20 cm。南端を 1号溝に切られる。主軸方向は N-27°-E。1号溝とは直角方向に交わる。

7号溝（第28図）

西区、参道西側の3本の南北溝のうち、中央の溝。長さ9.5m、幅0.5~0.8m、深さ10cm。1・8号溝に南端を切られる。主軸方向はN-20°-E。

8号溝（第28図）

西区、参道西側の3本平行した南北溝のうちの最も西側にある直線溝。長さ9.5m以上、幅0.4~0.7m、深さ5cmと浅い。隣接する7号溝と南端が重複し、掘り方としては7号溝を切る。また南端が1号溝に切られる。主軸方向はN-20°-E。

9号溝（第30図）

中区西端の東西方向の直線溝で、調査区西壁にもぐるようにして6.5m検出された。幅1.3m以上、深さはセクションによれば70cm、主軸方向はN-20°-E。西区東端で検出された6~8号溝と、清白寺参道をはさんで対になると思われ、参道に関わる側溝と見られる。

10号溝（第30図）

中区中央、5号掘立北側にあり、11号溝と平行するように南北方向に4m検出した。主軸方向はN-17°-Eで、条里に関わる南北方向の他の溝とも方向が類似する。11号溝との間隔は0.3m。5号掘立の北辺柱穴列あたりで消失する。溝幅は0.3m、深さは11cmで、溝内には小ビットが重複する。

11号溝（第30図）

中区中央、5号掘立北側にあり、10号溝と平行するように南北方向に4.5m検出した。10号溝と同じく5号掘立北辺柱穴列あたりで消失する。主軸方向はN-17°-E。溝幅は0.3~0.5m、深さ10cmで、溝内には小ビットが重複する。10・11号溝は2本平行することから道の側溝とみなしておく。

12号溝（第31図）

中区東端、調査区東壁にかかるようにして検出。17mを確認した。農道下へ潜るため、溝幅は不明。幅1.2m以上、深さ16cm。主軸方向はN-17°-E。東区西端にも同様の落ち込みが存在し、本溝と合わせて、現農道に先行する旧道路側溝と考えておきたい。

第4節 遺物

1号竪穴（第32~35図）

1~11は甲斐型壺。12~20は甲斐型皿。21は仏鉢形土器。22・23は小形ハケメ壺。24~33はハケメ壺。34はハケメ鉢。35はロクロ壺か。36は須恵器蓋。37は須恵器壺。38~40は石器で、38は磨り面をもつ砾、39は凹み石、40は支脚石。

1・2・12・13は床面に正位あるいは逆位で出土した土器類で、いずれも完形である。1は完形の壺で、玉縁口縁が発達しつつあり、体部は丸い。2は玉縁の発達が弱く、体部は直線的である。体部外縁正面で1ヶ所、「東大」という墨書が見られる。県内では大原遺跡をはじめ、いくつかの遺跡で同名の墨書土器が出土しており、時期的にも同じ頃の所産といえる。意味合いについては不明といわざるを得ないが、達筆な筆運びという印象を受ける。第5章3節にて再検討したい。3は玉縁化がほとんど見られない壺。4は玉縁化が発達した段階の壺。7は甲斐型黒色土器で、口径は通常よりもやや大きい。8は口縁部が外反屈折する甲斐型壺、蓋受であろうか。12は内面にらせん渦巻暗文をもつ皿で、体部外縁には壺と同じく斜位の手持ちヘラ削りをもつ。手持ちヘラ削り例は本竪穴ではこの1点のみである。13・14も12とはほぼ同形の皿であるが、体部外縁下半は回転ヘラ削りとする。ともに内面にはらせん渦巻暗文がある。15・16にもかすかではあるがらせん渦巻暗文の一部が見え、皿はほぼ同一時期の資料でのまとまりをもっている。18はやや新しい、後出的な皿。21は内面黒色の仏鉢形鉢で、口縁部は内湾し、口径約20cmと大形で、底部は丸底かと思われる。底部がないため高さは不明ではあるが、約11cm程度と推測される。外面には回転ナデ上に横位のヘラナデ

を丹念に行い、内面は横位ヘラナデのち体部下半をヘラ削り（ヘラナデ）する。同一個体がやや多く出土している。ハケメ甕の特徴としては、口縁部が肥厚化しつつある段階といえ、24では口縁部が胴部とほぼ同じ厚みなのにに対し、26～29では段面に図示したように、外面から粘土板を貼りつけて2重とした肥厚口縁である。ただしここで極端な肥厚口縁に至ってはいない。32は窪内、支脚石に被さっていたハケメ甕胴下半で、胴径は15cm、通常の甕に比べると細身である。内面の輪積み痕が顕著なものも特徴的で、幅約3cmの粘土帯を8段積み上げ、横位のハケメのち指頭で整形している。底部には直径4×5cmの大きな孔が開けられている。34は鉢形甕で、この器種は普遍的に出土するものではなく、古代山梨郡を中心とした盆地東側を中心として分布が限局的である。用途も定かではなく、特殊ではなかったかと考えられる。35は小破片のため全体像を推測することが難しいが、甕ではなく鉢形になるかとも思われる。38は何らかの研磨作業に用いたと思われる台石で、表裏面にはかすかに同一方向の使用痕が複数認められる。39は図面にすると縄文時代の凹み石のようであるが、縄文のそれとは凹みの状況が異なり、この窪穴に伴う平安時代の叩き石的な用途に用いた石器と考えておく。中世にかけてこうした石器はときどき散見される。40は自然石であるが、竈支脚石として用いられた棒状の礫で、被熱により赤変し、割れが入っている。

2号竪穴（第36図）

1～3は土師器甲斐壺坏。4～11はハケメ甕。12・13は鉄製品。

1～3の壺は口縁部が玉縁化する直前の形態である。4～9のハケメ甕はいずれも口縁部が薄く、2重貼り付けをしていない。1号竪穴よりも古い甕の様相を示している。12は不明鉄製品であるが、鉄鎌あるいは刀子かと思われる。13は刀子で、使用、研磨の繰り返しで刃部が短くなってしまったものと思われる。先端をわずかに欠くものの、ほぼ完存する。

3号竪穴（第37図）

1・2は甲斐型土師器壺。3は小形ハケメ甕。4はハケメ甕底部。5は須恵器甕。6は鉄製鎌。

1・2は口縁部が直線的で、内面に放射状暗文をもつ。1・2号竪穴よりもより古い様相を呈す。6は長さ15.5cm、幅1.8～3.4cmの鎌で、先端をわずかに欠く。基部に折り返しがあり、約1cmの垂直な立ち上がりとなる。鎌の出土事例は、そう多いものではない。

4号竪穴（第37図）

1・2は甲斐型土師器壺。3はハケメ甕。4は支脚石。

1は3号竪穴の土師器壺と同じく、内面に放射状暗文をもつもので、時期も同じであろう。4は竈支脚石に用いられた円礫で、側縁に敲打痕が残る。高さ15cm、幅11cmとやや小形である。

4号掘立（第37図）

1～3は土師器壺。1は63号ピット出土。口縁部が直線的で薄い。2は62号ピット出土。底径が大きく、回転糸切痕をもつ。ともに体部下半の削り痕が不明瞭で、甲斐型壺ではなく、須恵器系の壺かもしれない。3は64号ピット出土で、内面に放射状暗文をもつ甲斐型壺である。

5号掘立（第37図）

1・2は土師器甲斐型壺。ともに内面に放射状暗文があり、口縁部形態は類似する。1は76号ピット出土。2は40号ピット出土。底径がやや大きく、体部が直線的に聞くもので、本遺跡の土師器の中ではより古手である。

土坑（第38図）

18号土坑1は焼付碗。19世紀代か。20号土坑1は直径6～7cmの環状鉄製品。用途は不明。21号土坑1は長さ3cmの角釘。30号土坑1は甲斐型土師器壺で、内面にかすかな放射状暗文がある。33号土坑1・2は焼成粘土塊。3は長さ7.6cmの鉄製刀子。39号土坑1は土師質鉢で、すり鉢（こね鉢）か。2～7は古鏡で、2～6が鏽ついてひとまとまりになっていた一群であり、7は1枚のみ離れて出土している。2～6の重なり方は写真2のとおりで、2の皇宋通寶を最上とすると、2→6の順に下に向かって重なる。鏡鉢は上、下、下、

下、下と、文字側を揃えたかのように重なっていた。計6枚あることから墓坑に埋納された六文銭であろう。出土位置が2つに分かれていたのは、右手、左手にそれぞれ握らせたものであろうか。ちなみに2の皇宋通寶は北宋(1038年)、3の洪武通寶(背福)は福州(1368年)、4の洪武通寶(背一錢)は明の洪武元年(1368年)、5の元豎通寶は北宋(1078年)、6は銭名不明、7の永樂通寶は中世末～近世初頭である。いわゆる渡来銭を主とし、寛永通寶以降の銭種を含まないことから、中世末の資料とみてよい。台座地点出土の1・2は銘が読み取りにくくなっているが、ともに寛永通寶。6・7は不明鉄製品。

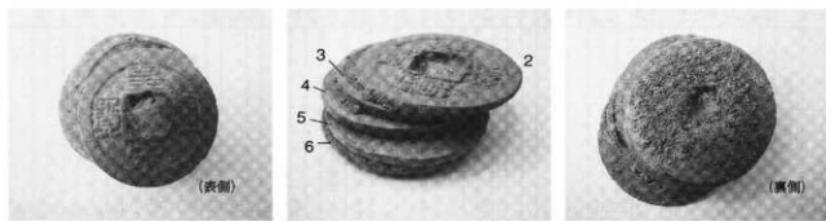


写真3 39号土坑古銭

表4 土器品觀察表

國	地點	No.	種類	形制	長/幅/厚cm	外/內底	斷面形狀	色調	底或 底(大多~中)	底形 底小底 底不規)	發音 音?	注記
38	33上	1	馬十脚	?	4.6/3.2/0.4	?	原底邊~鋸	?	C. 深·長	?	31	671 橫型底半 一部分變
38	33下	2	斜上槽	?	7.0/6.4/1.5	?	鋸	C. 短·寬·小槽	?	130	671	

表5 石器類觀察表

國	地點	No.	分類	長/幅/厚cm	石材	色調	底或 底(大多~中)	底形 底小底 底不規)	發音 音?	注記
35	1號	38	刮石	23.2/18.9/0.4	花崗岩	白灰	312	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
35	1號	39	尖狀石	12.0/8.5/0.5	花崗岩	白灰	311	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
35	1號	40	支撐石	25.2/19.0/0.7	花崗岩	白灰	617	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
35	4號	4	支撐石	15.0/11.3/0.6	花崗岩	白灰	669	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
39	1號地底	4	刮石	16.0/12.5/12.0	花崗岩	白灰	660	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
39	1號地底	5	刮石	50.0/49.0/26.0	花崗岩	白灰	660	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
39	1號地底	6	刮石	47.0/46.0/13.0	花崗岩	白灰	417	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	17	打斧	7.3/5.1/1.1	砂岩	灰	166	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	18	打斧	10.8/6.5/0.8	砂岩	灰	166	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	19	打斧	12.8/4.8/2.5	砂岩	灰	166	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	20	打斧	16.3/4.8/1.95	砂岩	灰	166	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	21	小鍬	2.57/1.59/0.36	木頭	透明	637	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸
40	遺跡外	22	小鍬	2.59/1.65/0.37	木頭	黑~灰	397	?	?	表面有裂紋 表面有凹凸

表6 金屬製品觀察表

國	地點	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚cm	底或 底(大多~中)	底形 底小底 底不規)	發音 音?	注記
36	2號	12	鑿?	鐵	3.7	1.16	0.05	3.85	?	2240	生鏽
36	2號	13	刀子	鐵	8.59	1.46	0.81	9.2	?	332	鐵頭小?
36	2號	6	刀子	鐵	16.6	3.4	0.95	63.1	?	332	鐵頭小?
38	20±	1	盒	35	5.75	9.5	10.1	26.49	20上~25	?	332
38	21±	1	刀削	鐵	0.37	0.7	0.38	0.89	21上~25	?	332
38	33±	3	刀子	鐵	7.6	1.3	0.73	7.84	?	332	鐵頭小?
38	39±	2	鉗	鐵	2.45	—	0.13	2.68	?	332	鐵頭小?
38	39±	3	鉗	鐵	2.3	2.29	0.18	3.57	39±27.56	?	332
38	39±	4	鉗	鐵	2.31	2.32	0.2	1.61	39±27.56	?	332
38	39±	5	鉗	鐵	2.13	2.32	0.12	3.38	39±27.56	?	332
38	39±	6	鉗	鐵	2.33	2.32	0.11	2.61	39±27.56	?	332
38	39±	7	鉗	鐵	2.45	2.48	0.14	2.7	39±27.56	?	332
38	台地底穴	1	鉗	鐵	2.39	2.44	1	1.65	19.652	?	332
38	台地底穴	2	鉗	鐵	2.36	2.26	0.11	2.6	19.653	?	332
38	台地底穴	5	不明	鐵	13.27	0.54	0.66	6.43	19.654	?	332
38	台地底穴	7	不明	鐵	9.5	1	0.47	8.39	19.657	?	332
40	遺跡外	2	鉗	鐵	3.61	1.28/0.30	—	3.7	1.39/18	?	332
40	遺跡外	3	鉗	鐵	2.52	(2.65)	0.11	11.49	1.39/18	?	332
40	遺跡外	4	鉗	鐵	2.48	2.46	0.12	3.01	水製造工 水製造工	?	332

第4章 自然科学分析

第1節 7号土坑炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、山梨市三ヶ所遺跡の土坑覆土の水洗選別によって回収された炭化材（7号土坑 炭）である。水洗選別は、覆土7.4kgを対象に実施されており、今回分析に供した炭化材のほか、多量の焼骨片や礫などが回収されている。炭化材は、多量の細片より最も大きい約2cm角程度を抽出し、観察範囲内で最も外側の年輪部分（2年分）を試料として採取している。今回の分析調査では、試料の由来（樹種）に関する資料を得るために、同一試料より分割した炭化材について樹種同定も行っている。

2. 分析方法

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀浴（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5,730 ± 40年）を較正することである。曆年較正は、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、本報告では1年単位で表示する。曆年較正結果は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比（確率分布）は、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表7 放射性炭素年代測定および曆年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ ¹³ C (‰)	補正年代 (曆年較正用) (yrBP)	曆年較正年代 (cal)			相対比	測定機関 Code.
				σ	cal AD 1,436 - cal AD 1,464	1.000		
7号土坑 炭 炭化材（クリ）	430±30	-25.47±0.32	432±28		cal AD 1,422 - cal AD 1,492	0.981		IAAA-91143
				2σ	cal AD 1,603 - cal AD 1,610	0.019		

3. 結果および考察

炭化材（7号土坑 炭）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は 430 ± 30 yrBP、暦年較正結果（測定誤差 σ ）は calAD1,436-calAD1,464 である（表7）。発掘調査所見によれば、7号土坑は中世の遺構と推定されており、今回得られた較正暦年代はこの所見を支持する結果と言える。

また、放射性炭素年代測定試料に供した炭化材は、落葉広葉樹のクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）であった。この他に7号土坑から回収された炭化材2点についても同様に確認を行ったが、いずれもクリであった。山梨県内における中世の火葬墓あるいは火葬跡とされる遺構から出土した炭化材の調査事例では、横森赤台（東下）遺跡（高根町）の中世の遺構から出土した炭化材は、クリが多く、フサザクラ、リョウブ、ツツジ科、トネリコ属、カキノキ属が混じる組成が確認されており（横田, 2000）、本遺構と同様にクリが多いという共通点が指摘される。

第2節 種実遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、山梨市三ヶ所遺跡の平安時代の竪穴住居跡（1～4竪）の竪窓土（1竪窓 6.5kg、2竪窓 7.6kg、3竪窓 4.7kg、4竪窓 7.2kg）の水洗選別により回収された炭化物などを含む微細植物片6試料である。試料の詳細は、結果とともに表8に示す。

2. 分析方法

試料を粒径別に篩別後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表8に示す。竪穴住居跡のカマドからは、木本4分類群（オニグルミ、クワ属？、モモ、トチノキ？）6個、草本12分類群（イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、イネ科、テンツキ近似種、カヤツリグサ科、アサ、スペリヒュ科、アカザ科、マメ類、マメ科？）129個の計135個の種実遺体と、木の芽、炭化材、木材組織が確認されない部位・種類不明の炭化物、昆虫などが検出された。

検出された種実遺体群は、本来の色調とは明らかに異なる黒色を呈し、膨張、発泡など状態が悪く、火を受け炭化したものと思われる個体（栽培種のモモ、イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、アサ、マメ類と、木本のオニグルミ、クワ属？、トチノキ？、草本のイネ科の胚乳、マメ科？）と、炭化が認められず（または、元々黒く硬い種皮や果皮を持つため、炭化の有無の厳密な判別が困難なものを含む）、保存状態が良好な個体（草本のイネ科の果実、テンツキ近似種、カヤツリグサ科、スペリヒュ科、アカザ科）に分けられる。

このうち、後者は、いわゆる人里植物に属する草本類で、付近の明るく開けた場所に生育していた草本群落に由来すると考えられる。遺跡の立地などを考慮すると、炭化していない種実が長期間残るとは考え難く、後代より混入した可能性が高い（吉崎, 1992など）。このことから、炭化種実以外の種実については、その由来を慎重に検討する必要があるため、結果表示にとどめている。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

<木本>

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属
核の破片が検出された。炭化しており黒色、完形ならば、長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の頂部が尖る広卵形。

表8 種実遺体同定結果

分類群	部位	状態	上塗量 [kg]		1堅重	2堅重	3堅重	4堅重	偏考 (計測値mm)
			6.5	7.6	4.7	7.2	*	*	
木本									
オニグルミ	核	破片	炭化						
クワ属?	種子	完形	炭化		1		3		
モモ	核	破片	炭化	1					
トチノキ?	種子	破片	炭化	1					
木の芽	芽	完形	炭化						
炭化材			炭化	2.86	0.37	0.76	<0.01	61.54	重量[g]
				12.77	9.96	12.61	4.01	22.29	最大径[mm]
草本									
イネ	穎	破片	炭化						
	胚乳	完形	炭化	1	2	2	7	10	
		破片	炭化		1	8		17	
オオムギ	胚乳	完形	炭化	3	2		1		
		破片	炭化				2		
コムギ	胚乳	完形	炭化					1	
		破片	炭化	1					
アワ近似種	果実	完形	炭化				1		
イネ科	果実	完形	炭化					1	
		破片	炭化		12			2	
				23				4	
テンツキ近似種	果実	完形	炭化	1			2		
		破片	炭化						
カヤツリグサ科	果実	完形	炭化						
アサ	果実	破片	炭化	1		1			
スペリヒュ科	種子	完形				8			
アカザ科	種子	完形		2					
マメ科	種子	完形	炭化			1			
		破片	炭化					4	長さ5.63, 幅5.09, 厚さ3.68 長さ4.33, 幅2.81, 長さ3.96, 幅3.04
マメ科?	種子	完形	炭化			2			長さ2.05, 幅1.45, 厚さ1.30 長さ1.50, 幅1.08, 厚さ0.71
不明炭化物				0.06	0.04	0.05	0.03	<0.01	重量[g]
昆虫					2			2	
分析残渣	炭化材全体 (2mm以上)							41.74	重量[g]
	炭化材全体 (2mm以下)			3.79	2.66	1.41		14.82	重量[g]
	炭化していない植物片			0.03	0.20	0.22		1.20	重量[g]
	十粒・總			0.53	0.47	0.12	0.04	2.93	重量[g]

*プラスチックケースに抽出された炭化種子

破片は、縦に1周する縫合線に沿って割れた半分未満で、大きさは最大5mm程度。核は硬く緻密で、表面には縱方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・クワ属 (*Morus*)? クワ科

種子と考えられる完形個体が検出された。炭化しており黒色、長さ1.7mm、幅1.3mm、厚さ1.0mm程度の三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一辺が鋭利で、基部は欠損し孔がある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならばやや偏平な広橢円体で頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縫合条が、腹面正中線上には浅い縫合条とその両側に幅の狭い帶状部がある。破片は大きさ1cm程度。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)? トチノキ科トチノキ属

種子と思われる破片が検出された。炭化しており黒色、完形ならば径24mm程度の偏球体で、表面には

は赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。破片は大きさ6mm程度。種皮は薄く硬く、3層が確認され、割れ方は不規則。

＜草本＞

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎の破片、胚乳表面に穎が付着する個体が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4.5mm、幅2.3mm、厚さ1.1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が継列する。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6.75mm、幅3.4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の細胞を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が継列する。破片は基部の果実序柄部で、最大1.6mm程度。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ5mm、径2.9mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縱溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縱筋がある。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ3.9mm、径2.5mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縱溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縱筋がある。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳・穎が検出された。炭化しており黒色、胚乳は長さ1.3-1.7mm、幅1.0-1.5mm、厚さ0.8-1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面は粗面で、穎(果)が付着する。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実と胚乳が検出された。果実は淡灰褐色、長さ26mm、径0.8mm程度の半卵形で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縱長の網目模様が継列する。胚乳は炭化しており黒色、長さ1.5mm、径0.4mm程度のやや偏平な長楕円体。背面は丸みがあり、基部正中線上には胚の痕跡が径0.2mm程度の楕円状に窪む。腹面は偏平。胚乳表面は粗面で、微細な縱筋がある。

・テンツキ属 (*Fimbristylis*) カヤツリグサ科

果実が検出された。淡褐色、径0.7mm、厚さ0.5mm程度の両凸レンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。左右の縁は稜をなし、果皮表面には隆起する格子状の網目模様が配列する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。灰褐色、径1.2mm程度のレンズ状広倒卵体、頂部の柱頭部分はやや伸び、基部を欠損する。果皮表面はやや粗面。

・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。長さ3mm、径2mm程度の歪な広倒卵体。縦方向に一周する稜がある。頂部は切形、基部に淡灰褐色、径1mm程度の楕円形の勝点を欠損する。果皮表面は葉脈状網目模様があり、断面は横状。

・スペリヒュ科 (*Portulacaceae*)

種子が検出された。黒色、径0.6mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、勝がある。勝には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が勝から同心円状に配列する。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、径0.9mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、勝がある。種皮表面には勝を

取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、やや偏平な楕円体で焼き崩れている。2堅カマドの完形個体は、長さ 5.63mm、幅 5.09mm、厚さ 3.68mm を測る。4堅カマドの破片個体のうち計測可能な 2 個は、子葉の合わせ口から半割しており、それぞれ長さ 4.33mm、幅 2.81mm、長さ 3.96mm、幅 3.04mm を測る。腹面子葉の合わせ口上にある細長い臍を欠損する。種皮は薄く表面はやや平滑だが、焼き崩れており、状態は悪い。

・マメ科 (Leguminosae)

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ 2.05mm、幅 1.45mm、厚さ 1.30mm と長さ 1.50mm、幅 1.08mm、厚さ 0.71 mm のやや偏平な長楕円体。腹面の子葉合わせ口上に細長い長楕円形の臍がある。種皮は薄く表面はやや平滑だが、焼き崩れており、状態は悪い。上記した栽培植物のマメ類と比べ小粒であることから、マメ類とは区別している。

4. 考 察

平安時代の堅穴住居跡（1～4堅）の竪穴土からは、炭化した栽培種のモモの核、イネの穎と胚乳、オオムギの胚乳、コムギの胚乳、アワ近似種の果実、アサの果実、マメ類の種子が確認された。これらの種実の由来や状態などを考慮すると、当該期におけるこれらの栽培植物の利用が推定される。

山梨県内における弥生時代～中世の住居跡から検出された炭化種実遺体の調査事例の集成（柳原、1999）によれば、甲府盆地では弥生時代後期および古墳時代はイネの比率が圧倒的に高く、8～10世紀は時期や遺跡によってイネとムギ類の比率が異なるが両者が混在する状況にあり、10世紀第2四半期を境にムギ類（オオムギ・コムギ）を中心とする雑穀類が増加することが示唆されている。今回の分析調査では、イネ・ムギおよび雑穀類が検出されたものの有意の数量は得られず、比率の比較検討には至らないが、少なくとも複数の栽培種の利用が指摘できる。

栽培種以外の分類群は、木本のオニグルミ、クワ属？、トチノキ？、草本のイネ科が確認された。オニグルミ、トチノキは、溪流沿いの肥沃地などに渓谷林を形成する落葉高木で、クワ属は伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する落葉高木である。おそらく、これらは遺跡周辺の森林の林縁部や河川沿い等に生育していたものに由来すると考えられる。オニグルミとトチノキは、堅果が可食できることから、植物質食糧として採取・利用された可能性がある。イネ科は、人里植物に属する草本類で、周辺の明るく開けた場所に生育していた草本群落に由来すると考えられる。

第3節 骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試 料

試料は、中世とされる 7 号土坑および 1 号配石覆土の水洗選別によって回収された骨片類である。

2. 分析方法

各遺構の土壤試料は、篩分け（篩目径 2mm）を行い、2mm 以上の残渣を肉眼で観察し、骨片の有無を確認する。水洗選別後に選別・抽出された骨片類は、肉眼で観察し、その形態的特徴から種と部位の同定を行う。

3. 結 果

結果を表 9 に示す。検出された骨は、1 号配石および 7 号土坑から検出された骨は、いずれもヒト (*Homo sapiens*) であった。骨片は、白色・細片化し、表面に細かなひび割れが生じるなど、いずれも焼骨の特徴を

示す。馬場ほか(1986)によれば、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。以下に、各遺構における骨片類の検出状況を記す。

(1) 7号土坑

7号土坑からは、前頭骨眼窓上縁左側破片、左頸骨片、側頭骨錐体部片、下顎骨左下頸頭、頭蓋骨片、肋骨片、中手骨/中足骨片、肋骨/四肢骨片などが検出された。当

試料では、脳頭蓋の矢状縫合あるいは環状縫合の可能性がある縫合について内側が閉じており、外側が開いている状態が観察された。この点を考慮すると、本人骨は熟年(40~59歳程度)と推定されるが、性別に関しては不明である。

(2) 1号配石

1号配石からは、前頭骨の可能性がある破片、歯牙片、大腿骨近位端片などが検出された。被熱によって骨自体が収縮していることが推定されるが、大腿骨骨頭の大きさなどから、少なくとも成人(16歳程度)以上には達していたと考えられる。性別については不明である。

【引用文献】

- 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤 総治.1986.根古屋遺跡出土の人骨・動物骨.笠山根古屋遺跡の研究 一福島県笠山町根古屋における再葬墓群一.福島県笠山町教育委員会.93-113.
- 林 昭三.1991.日本古木材.新蔵鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄.1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会.328p.
- 伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.
- 伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.
- 伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載 III.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.
- 伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.30-166.
- 伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載 V.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47-216.
- 柳原功一.1999.炭化穀実から探る食生活—古代～中世を中心に一.柳原功一(編著).帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2 食の復元 遺跡・遺物から何をよみとるか.株式会社岩田書店.81-98.
- 中山英人・井之口希秀・南谷忠志.2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会.642p.
- 島地 謙・伊東隆夫.1982.図説木材組織.地球社.176p.
- 植田弥生.2000.横森赤台(東下)遺跡出土炭化材の樹種同定.「高根町 横森赤台(東下)遺跡 一回道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書一」,山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第171集,山梨県教育委員会・山梨県土木部.65-71.
- 吉崎昌一.1992.古代維持の検出.考古学ジャーナル.355.2-14.

表9 骨同定結果

遺構名	部位	左右	部分	数量	備考
7号土坑	前頭骨	左	眼窓上縁片	1	
	鼻骨	左	破片	1	
	側頭骨		錐体部	1	
	下顎骨	左	下顎頭	1	
	頭蓋骨		破片	51	
	肋骨		破片	5	
	中手骨/中足骨/指骨		破片	1	
	膝骨/四肢骨		破片	11	
	四肢骨		破片	20	
	不明		破片	-	115.0g
	残渣		破片	-	1419.6g
1号配石	前頭骨?		破片	1	
	歯牙		破片	5	
	大腿骨		近位端片	1	
	不明		破片	-	18.0g
	残渣		破片	-	1047.9g

第4節 1号土坑のウマ遺体

植月 学（山梨県立博物館）

山梨市三ヶ所遺跡の1号土坑より出土したウマ一体分の頭部について分析結果を報告する。1号土坑は東西方向に長軸を持つ長方形の土坑である。15～16世紀の溝と切り合い、土坑の方が古いとされる。周辺の状況から中世頃に属すると想定されているものの、確実ではない。

検出されたのは上下顎歯と骨の一部のみで、土坑東部寄りで検出された。臼歯と切歯はほぼ解剖的な位置を留めた状態で、頭頂側を上にして、左側面が裏面に沿うような形で土坑中位に埋存していた。土坑は長軸約2m、短軸約1.3mを測り、形状、規模からみてウマの墓壙と推察される。

下顎骨や上顎骨の一部が残存していたにも関わらず、他の部位の骨がまったく遺存していないかった点が問題となるが、明らかに頭部が丸ごと埋存していたと推定される歯の出土状況にも関わらず、頭部の骨でも臼歯周辺以外の骨は消失していたので、その他の部位も分解、消失してしまったと推測される。全身が埋葬されたとすれば、首から頭を上部に捻った状態であったんだろう。

歯には重複ではなく、一個体分である。下顎左M3（第3後臼歯）を除くすべての臼歯が揃っている。切歯も10本含まれており、同定が未だだが、ほぼ一個体分が揃っている（本来は12本）。

図版24-1は筆者の元に届いた段階の上面観で、右側面を上にした状況であった。切歯部分は土が崩れており、原位置から離れていたが、圓面によれば本来はほぼ原位置で埋まっていたようである。臼歯部分は一部動いているものの、比較的原位置を保っていた。上顎の骨は頬側がほとんど消滅し、舌側は残っていたが、非常に多い。右下顎骨も一部残っていたが、取り上げる際に崩れてしまった。

図版24-2は遊離している切歯と、臼歯部分のかたまりを取り上げ、余分な土を取り除いた状況である。左上顎臼歯はこの際に外れてしまった。No.13、14は下部に切歯がなかったので、それぞれ下顎I3、上顎I3であろう。

図版25-1は取り上げた臼歯部分の下面（左側面）である。上顎骨は舌側が一部残るが、遺存状況は悪い。下顎の臼歯はすべて植立した状態である。下顎骨も下顎体や切歯骨の一部が残っているが、やはり遺存状況は悪い。これら植立した歯については破壊の恐れがあり、計測も右側臼歯で可能であったため、あえて取り出すことはしなかった。

出土した歯の計測値を表に示した。歯根を留める標本については西中川・松元（1991）の推定式により年齢推定をおこなった。その結果、おおむね3歳代と推定され、その平均は3.51歳であった。また、やはり西中川・松元（1991）の骨長推定式と林田・山内（1957）の体高推定式を用いて、植立している左下顎臼歯列長より復元された体高は131.9cmであり、中型馬であったと推測される。ただ、頭蓋骨長による推定は誤差が大きく、幅をもってとらえる必要がある。

なお、犬歯は相当する位置の土を崩して調べたが検出できなかった。しかし、ウマの大歯の崩出は4歳以降とされるので（Schmid 1972）、本個体では雌雄の区別は不明である。

【引用文献】

- 西中川駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』 pp.164-188
林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6 pp.146-156
Schmid, E. 1972 Atlas of animal bones for prehistorians, archaeologists, and Quaternary geologists. London. Elsevier

表 10 馬歯同定結果

No.	上下	歯種	左右
1	上	M3	右
2	上	M2	右
3	下	P2	右
4	上	M3	左
5	上	M2	左
6	?	I	?
7	?	I	?
8	?	I	?
9	?	I	?
10	?	I	?
11	上	I3	右
12	?	I	?
13	下	I3	左
14	上	I3	左

No.	上下	歯種	左右
15	上	P2	左
16	上	P3	左
17	上	P4	左
18	上	M1	左
19	?	?	?
20	下	切歯骨	—
21	?	I	?
22	上	M1	右
23	上	P4	右
24	下	P3	右
25	下	P4	右
26	下	M1	右
27	下	M2	右

No.は分析に際して任意にふたしたもの。

I=切歯、P=前臼歯、M=後臼歯

表 11 馬歯計測結果

歯種	左					右					推定年齢 No.
	歯冠長	歯冠幅	齒高	備考	推定年齢	No.	歯冠長	歯冠幅	齒高	備考	
上	P2	35.52	24.68	52.0	—	15	—	—	—	—	— ■
	P3	29.50	24.15	67.0	—	16	—	—	—	—	■
	P4	27.60	22.77	75.5	歯根破損	—	17	26.60	22.27	76.0	歯根形成中 — 23
	M1	26.73	26.70	69.0	—	18	26.44	26.49	67.0	—	3.97 22
	M2	26.45	23.50	78.0	—	5	26.35	23.45	77.0	—	3.49 2
	M3	22.29	17.78	—	歯根形成中	—	4	22.27	17.27	—	— 1
下	P2	—	—	—	—	■	32.37	13.43	52.0	—	3.67 3
	P3	—	—	—	—	■	29.84	14.90	67.0	—	3.60 24
	P4	臼歯列長	—	—	—	■	26.15	12.35	73.0	歯根破損	— 25
	M1	167.8	—	—	—	■	28.66	14.38	73.0	—	2.72 26
	M2	—	—	—	—	■	28.53	12.08	—	歯根形成中	— 27
	M3	—	—	—	—	■	—	—	—	—	—

左下臼歯列長による推定下頸骨長:40.9cm 下頸骨長による推定体高:131.9cm

平均年齢:3.51才

■:歯骨に植立している歯(計測不可能)

第5章 総括

第1節 土師器類の年代と仏鉢形土器

4軒の堅穴および掘立柱建物からは、甲斐型土師器を主とする土器群が出土した。ここでは改めて年代、時期について整理を行い、いくつかの特徴的な器種について、考察を加える。ここでは並崎市宮ノ前編年の時期区分と年代観を用いる。

1号堅穴 坯 宮Ⅷ期（9世紀末～10世紀1/4）～宮Ⅸ期（10世紀2/4） Ⅹ 宮Ⅶ（9世紀3/4）～Ⅺ期
ハケメ甕 宮Ⅸ期

2号堅穴 坯 宮Ⅸ期 ハケメ甕 宮Ⅶ～Ⅹ期

3号堅穴 坯 宮Ⅷ期

4号堅穴 坯 宮Ⅷ期

4号掘立 坯 宮Ⅷ期

5号掘立 坯 宮Ⅷ期

以上を時期的に整理すると次のようになる。

宮Ⅸ期 3・4号堅穴 4・5号掘立

宮Ⅷ期 1・2号堅穴

宮Ⅶ期 1号堅穴

1号堅穴の土器組成のなかで、仏鉢形土器の存在は注目すべきである。これは僧尼が所持したといわれる仏鉢で、「少なくとも僧尼がその集落に出入りしていたことを示す遺物」（平野2002）とされ、出土した遺跡及び周辺には何らかの寺、堂などの仏教施設の存在が推測されている。2002年までの平野修氏の集成によれば、山梨県内では以下の遺跡から仏鉢形土器の出土が見られる。

所帯I遺跡（北杜市白州町）土師器1

所帯II遺跡（北杜市白州町）7住 土師器1

薬師堂遺跡（北杜市明野町）1住 須恵器1

宮ノ前遺跡（並崎市）須恵器2 土師器1

宮ノ前第2遺跡（並崎市）須恵器1

宮ノ前第5遺跡（並崎市）須恵器1

堂の前遺跡（並崎市）須恵器2

大坪遺跡（甲府市）土師器3

武田氏館跡第21次（甲府市）須恵器1

松原遺跡（笛吹市一宮町）土師器1

竜ノ木遺跡（笛吹市一宮町）土師器1

これらのうち、宮ノ前第2遺跡では8世紀後半から9世紀前半の四面廻掘立柱建物が検出され、瓦、瓦塔、須恵器壺G類が出土し、仏堂と考えられている。宮ノ前、宮ノ前第5、堂の前遺跡はいずれも宮ノ前第2遺跡南側に集中する遺跡群で、宮ノ前遺跡では8世紀前半の「寺」刻書土器が出土するなど、宮ノ前第2遺跡関連の遺跡群として理解される。大坪遺跡は土師器生産遺跡とされるが、瓦塔、円面鏡が出土したことから仏教施設の存在が推定されているほか、近くにある東畠・道々茅木遺跡からは小金銅仏像、壺G類が出土している。松原、竜ノ木遺跡は国分尼寺に近いことから、国分寺闇連集落といえる。

山梨県閑連の仏鉢形土器としては、2003年に長野県佐久市聖原遺跡H380住から出土した、内面にヘラ書き文字のある土器が注目された（図3）。この土器には8世紀末～9世紀代の甲斐型土器で、「甲斐國山梨郡人野郷戸口／乙作八千／此後口佛口為／八千体口」「佛」と記され、おそらく大野郷某の注文品として大坪

遺跡周辺で作られ、宗教活動に伴い、遠く東信地方で使用、遺棄されたものと考えられる。大野郷は、現山梨市大野を故地とするならば、笛吹川と重川の間に挟まれた一帯とみられ、本遺跡あたりも大野郷に含まれるものとみられる。あながち、今回の出土資料と無縁と思われない。

さて、三ヶ所遺跡では仏教施設の可能性のある建物として掘立柱建物があるが、仏堂そのものと考えられる柱穴配置を示すものはない。ただし3間×3間の5号掘立は、一般集落には少ない建物構造で、仏堂の可能性のある建物といえる。仏鉢形土器が出土したのが1号竪穴竈南側からで、1号竪穴は5号掘立と重複するものの竪穴の方が新しいことが明らかである。したがって時間差を考えると、土器は掘立には伴わないとみるのが自然ではあるが、5号掘立に伴ったのち1号竪穴段階まで保持され廃棄されたとみることもできる。

調査区内で仏教関連遺構を見出そうとする視点とは別に、本遺跡北側に所在する清白寺との関連づけも考えねばならない。つまり仏殿内に平安仏が安置されていることから、平安時代にさかのほる前身寺院があったという説である。その平安仏は高さ130cm余の十一面觀音菩薩立像で、木造一木造であり、「両腕まで、材から彫出し、内削りを施し背板をあてる構造は古様である」とされ、平安時代前期の作と考えられている（山梨市 2006）。ただし清白寺自体、かつて北二町にあるという「古寺家」と称す地から移転したものという伝えがあり、現在地に前身寺院が存在したという保証はない。

【参考文献】

- 山梨市 2006 「清白寺」『山梨市史 文化財・社寺編』
佐久市教育委員会ほか 2003 『坐原』佐久市埋蔵文化財調査報告書第107集

第2節 遺構群の時期的変遷

遺構外の遺物を含め、今までの遺構群の時期的な変遷、遺構・遺物のあり方について整理しておく。

1：縄文時代前期 諸磯b式期を中心とする縄文前期土器片が中区西側を中心に散在する。それに伴う打製石器、石礫がある。第40図20・21はとともに前期的な形態を示し、土器と同時期とみておくが、21は水晶製石鏃で、前期後半における水晶利用を示すものとして興味深い。調査区内に居住痕跡はなく、遺物の組み合せから短期的な居住地としての利用が想定される。縄文土器は諸磯式以外ではなく、そのほかの時期には土地利用がなされなかつたらしい。

2：平安時代（宮VII期） 3・4号竪穴および掘立柱建物群のうち、4・5号掘立の柱穴覆土出土の土器が本期

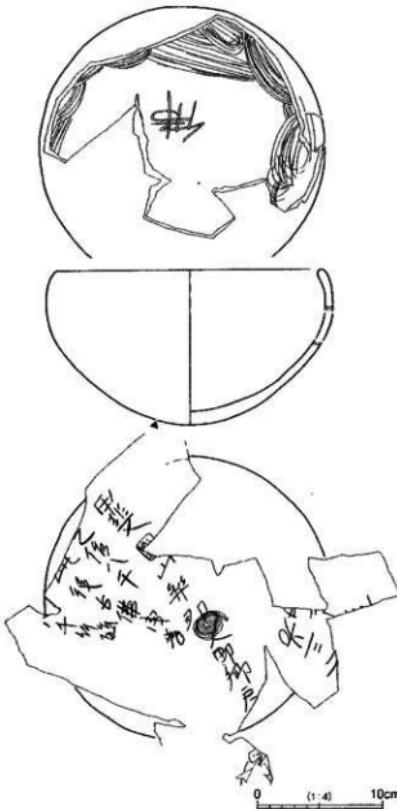


図3 坐原遺跡 H380 住出土仏鉢形土器 (1/4)

2段階 平安時代（宮V期）



3段階 平安時代（宮VI期）



4段階 平安時代（宮VII期）



5段階 中世（14～16世紀）



6段階 江戸（17～19世紀）



7段階 近・現代

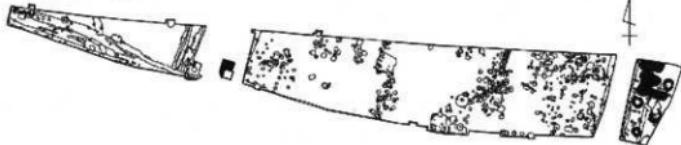


図4 遺構の変遷

0 (1/1000) 10 50m

を示す。また第4節で室伏氏が報告するように1・2号掘立も同じ尺度で構築され、ほぼ同じ方向性を示すことから、掘立群のほとんどは同時期に計画、建築されたものとみておく。ただし室伏氏の分析では掘立群は8世紀後半に位置づけられる可能性が指摘されていて、本期以前に掘立群が先行する可能性がある。ここでは竪穴と掘立が伴うとし、掘立群と3・4号竪穴の同時存在を想定しておく。掘立群は最も規模が大きく3間×3間の柱配置をもつ5号掘立を中心的な母屋と考え、2間×3間と考えられる1・4号掘立を付属屋、2間×2間の2号掘立を倉庫とみておく。距離関係から1・5号掘立・3号竪穴と、2・4号掘立は別世帯の可能性があり、同時期における2群とみておきたい（前者をA群、後者をB群と仮称）。また1・5号掘立・3号竪穴のあり方から、掘立群に竪穴が1棟程度伴う可能性があり、同時期と見られる4号竪穴が西端に離れて存在することから別の一群があるとみておきたい（C群）。掘立群について、室伏氏は国司主導の計画性が伺われるとするが、掘立群から集落が発達するあり方は一般集落とは性格的に異なるものとみられる。遺跡周辺では本期以前において、土地利用がきわめて低調であったとみられることから、何らかの公権力、あるいは富豪層により土地開発への着手が行われたという見方は十分可能である。その目的はなにか、わからないといわざるを得ないが、空閑地に対する耕作地の開発などを想定するにとどめる。

3：平安時代（宮Ⅷ期） 1・2号竪穴のみで、1号竪穴は5号掘立と比べると主軸方向がやや南に振れている。それらは位置的に前段階のA群を継承するものと見られ、ほかのB・C群については調査範囲内では継続性が認められず、集落規模としては縮小、衰退したと考えられる。

4：平安時代（宮Ⅸ期） 1号竪穴のみであるが、隣接する3号掘立は主軸方向が同じで、同時期とみておく。A群を継承する建物群とみたい。なお、1号竪穴からは仏器とみられる仏鉢形土器が出土している。付近に寺が存在した証といえるが、清白寺の前身が本段階あるいは前段階あたりで成立したことが考えられる。

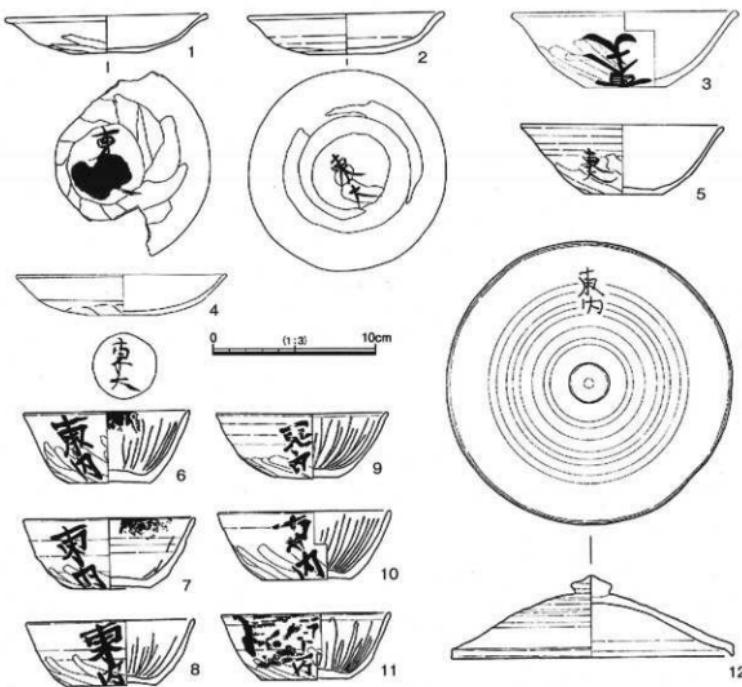
5：中世（14～16世紀） 溝の多くは本段階とみられ、道の側溝と理解されるものを含む。現道路に先行するものであり、周辺に広く認められる条里地割の一部を構成するもので、本地域での条里地割成立は中世とみておきたい。焼入骨が出土した1号配石、7号土坑も火葬墓に関わる遺構として、本段階の範囲で捉えておく。そのほか溝と重複する馬の埋葬墓である1号土坑は、時期は不詳ながら本段階とみたい。台座地点にある39号土坑も、六文銭の構成から中世段階の墓坑とみておく。現清白寺参道と重なる南北溝群が条里地割と関連することが明白ではあるが、条里地割施工のち清白寺が開設されたのか、それ以前から存在した寺院の主軸方向を基準として周辺地割が設定されたのか、その前後関係は不明である。ただ、焼入骨土坑、土坑墓の分布が示すように、墓間連遺構が集中するのが特徴で、清白寺寺域として埋葬関連の遺構が周辺に構築されたのであろう。

6：江戸（17～19世紀） 清白寺の南面入口として台座地点が整備される。石列、礎敷きがなされ、石仏台座が道に沿って配置される。現在標柱周辺にある石造物群が本来台座地点に存在したものとを考えられるが、それらの年代から、対になる六地蔵石幢、六地蔵、念佛講塔の順に、元禄3年以降、江戸末にかけて順次整備、増加していくもので、参道は今日と同じ位置に固定されたものと見られる。

7：近・現代 東区内に戦時中、あるいはその後と考えられる長方形土坑が集中する。穴倉的なものがあるいは防空壕的なものと想像される。そのほかドーナツ状の溝が各所にみられたが、いずれも現代のモモ畑の果樹周囲の施肥用の溝とみられる。また細かな耕作痕が中区を中心に広く認められたが、それらは水田化される以前のやや古い時期の畠地痕跡である。

第3節 「東大」墨書について

三ヶ所遺跡1号竪穴からは、甲斐型土師器壺（9世紀末～10世紀初頭）体部外面に正位で記された墨書文字「東大」が1点のみ出土した。山梨県内では、これまでに甲府盆地東部を中心に数遺跡で「東大」墨書き土器が出土し、さらに文字を逆転させた「大東」の出土も知られているので、それらに關し若干の考察と集



- 1 大原遺跡
 2 デクヤ遺跡(1・2)
 3 堂所遺跡(3)
 4 車地藏遺跡(4)
 5 三ヶ所遺跡
 6 松本塚ノ越遺跡
 (6~12)



図5 「東大」関連墨書き器と出土遺跡

成をしておきたい。

山梨県内の墨書・刻書土器については、2004年までの資料について、明治大学古代学研究所データベース（山梨県を平野修が集成・編集）で検索が可能となっており、類例を探すには大変便利である。ここでは「東大」「大東」が出土した遺跡をあげておく。

- ① 大原遺跡（笛吹市一宮町）「東大」9、「大東」3、「東大カ」3、「大東カ」1
- ② デクヤ遺跡（甲府市滝沢町）「東大」3、「東大カ」3、「東□」1、「□大」1、「大カ東」1
- ③ 堂所遺跡（笛吹市芦川町中芦川）「東大」1
- ④ 車地蔵遺跡（笛吹市一宮町）「東大」1
- ⑤ 三ヶ所遺跡（山梨市）「東大」1

現在のところ、三ヶ所遺跡を含めて5遺跡あり、いずれも甲府盆地東部に分布が見られる。古代の都域でいえば、山梨郡内に限定的といえるが、大原遺跡の概報（猪股ほか1990）にあるように「郷を越えて使用された文字」という指摘のとおりである。特徴としては大原、デクヤ遺跡のように複数の同名墨書きをもつ遺跡、堂所、車地蔵、三ヶ所遺跡のように1個体のみの事例をもつ遺跡がある。大原遺跡については、玉井郷の中心的な集落遺跡で堅穴数が数百軒に及ぶ大集落であり、デクヤ遺跡については、笛吹川支流に面し、物流の拠点である津の可能性が高いとされている。それに対し、三ヶ所や堂所遺跡は堅穴数が少なく、集落規模としては極めて小規模といえる。さらにいえば、大原・デクヤ・車地蔵・三ヶ所遺跡が盆地内の遺跡であるのに対し、堂所遺跡は芦川沿いの山中という立地上の違いがある。書かれた土器はいずれも甲斐型土器で、壺、皿の2器種のみである。すべて墨書きで、書かれた部位は底部外面が多いようであるが、体部外面もみられ、その場合正、倒の別がある。文字は書き慣れた感じを受けるものが多いが、同一人物の手によるものとは言いがたく、それぞれ書き手が異なると見たほうがよいだろう。時期的には甲斐型土器が玉縁化する10世紀初頭前後～玉縁化が発達した時期といえ、暗文をもつ9世紀後半代ではなく、おむね同一時期である。これらの遺跡分布をつなぐ共通項は見いだせないが、甲斐国を中心地であった笛吹市旧一宮町内に多い傾向があるといえそうである。

「東大」の意味について、森本圭一氏は「東大は、人名の一部なのか、平城木簡のように殿舎等の一部に関係あるものなのか興味をさそう」と記している（森本・竹内1975）。また堂所遺跡の報告の中で岡野秀典氏は、東大寺を絶木山として建立された国分寺との関連を推測する。10世紀前半代には国分二寺修理に関する記事がみられることから、各地の国分二寺の荒廃状況が推測されるが、その材料調査のために芦川山中に集落が営まれたと考え、芦川山中が国分寺寺領ではなかったかと推測する。また官道、準官道との関連も指摘していて、上芦川を通過する若彦路から一宮方面への運送の利便性を考慮したためとみている。

なお、全国での有無を同データベースで検索したところ、「東大」はないが、「大東」については静岡県磐田市中泉の大宝院寺遺跡にて出土していることがわかった。また、以上の他に近年調査された富士河口湖町滝沢遺跡にて、「太東」が2・3例あることを調査担当の古川明日香氏（山梨県埋蔵文化財センター）よりご教示いただいた。滝沢遺跡例のありかたから、「大」が「太」に変換された事例があることがわかる。

そこで、ここではさらに広げて山梨県での「大」「東」「太」を含む墨書き例を集めておく。なお、「カ」とする可能性の高い事例もあげておく（表12）。

「東」と関連性のある墨書きとしては「東大」「大東」のほか、「石禾東」「東石禾」（松原遺跡）、「東内」（松本塚ノ越遺跡）、「東山」（地耕面遺跡）がある。「石禾」は「石和」であり、郷名であることは明らかで、東を前後に付ける事例がある点は、「東大」と同じである。禾と人を字形の類似という点で関連付けが許されるならば、東大、大東は東石禾、石禾東と同義と推測することもでき、「東大」は「東石禾」の略といえよう。時期的に先行出現する松本塚ノ越遺跡の「東内」については内と大が発音的に同じであり、また内と大は文字としても類似するものである。したがって東大との類似度はより高いといえる。ただ「東大」のすべてを「東石和」と解釈することは、土器の分布状況から難しい。つまり位置的に石和郷東にあてはまらない遺跡にデ

表 12 山梨県内出土「東大」開運墨書一覽表（明治人学古代学研究所データベースを改変）

部類	通名	所在地	出土遺跡	新文	土所	替器	漆器	漆器底	漆器側	漆器方	漆器	漆器	山腹墨		出典	年代	
													1c	2c	3c	4c	
大鉢	伊賀市 平井町	23溝 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2001
大鉢(第2次)	伊賀市 長良山施設	15溝 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1996
テカラ	伊賀市 寺原町	22溝 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2001
漆の瓶	伊賀市 日下町	2-3号桶穴 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2003
漆の瓶	伊賀市 日下町	2-3号桶穴 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1996
漆の瓶	伊賀市 日下町	2-3号桶穴 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1987
上手瓶	近江市 坂井町	11号桶 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1992
上手瓶	南アルプス市(旧御代町)	229号桶 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1992
上手瓶	南アルプス市(旧御代町)	76号桶 口(大)	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2001
漆桶不連通上蓋5 所アルプス市(旧御代町)	SD038	不連通 口(大)	漆器	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2003
漆桶下	北之庄(旧木曾村) 北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1996
漆桶	南アルプス市(中木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1987
漆桶	北之庄(旧木曾村) 北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2000
漆桶	北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1996
漆桶	北之庄(旧木曾村) 北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2001
漆桶	北之庄(旧木曾村) 北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1999
漆桶	北之庄(旧木曾村) 北之庄(旧木曾村)	2号立柱 3号住居流 36号住居流	土所	大	土所	土所	漆器	漆器	漆器	正位	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2001

クヤ、寺所遺跡があり、石和の西、南西に所在する。

「大」と関連する墨書には、ほかに「大親」(秋山氏館跡)、「油大」(デクヤ遺跡)、「大前家」(溝呂木道上遺跡)、「人徳」(腰巻北遺跡)、「川大」(御幸道遺跡)、「大田」「大柴」「大山」(大原遺跡)、「大伴」「大井」(甲斐国分尼寺跡)、「大万」「大房」(松原遺跡)、「人内」(五反田遺跡)がある。人名・姓とみられる事例(人徳、大万、大柴、大伴、大井)が多いなかで、「油大」「川大」のように後ろに「大」を付けた事例は「東大」と同じ用い方といえ、関連性が伺われる。

各遺跡の墨書例を見た場合、「東」と「大」が同じ遺跡で出土する傾向があることがわかる。ともに出土している遺跡としてはデクヤ、宮ノ前、寺所、梅ノ木、大原遺跡、国分尼寺跡があり、単なる偶然とは考えにくい。また「大」と「太」も秋山氏館跡、御幸道、大原遺跡のように同一遺跡で出土する傾向があり、混同して用いられた、あるいは同義文字として変換されたことがあったと思われる。したがって滝沢遺跡の「太東」も「東大」「大東」と同じ文字とみてよいだろう。

「東大」の意味を国分寺修復と関連させる岡野氏の説について、一宮町周辺に多い傾向は支持を強めるものである。しかし墨書土器が10世紀初頭に限定期的で、国司、国衙の勢いが衰退する時期に国分寺の大規模な修復があったのかどうか、実態として不明であり、調査状況や瓦の様相から検証する必要があろう。「東大」は全国的に見ればかなり特殊な文字で、「東大寺」と関係するのであれば全国的にもっと出土してもよいかと思われるが、甲斐以外での類例がないことから、国分寺との関連性を指摘することは難しい。また先にあげたように、「石和東」と同義として地名とみるのは、分布状況から全ての事例に当てはめることはできないと思われる。別の考え方として、氏族名とみる見方がある。「大東」は苗字として今日でも存在するほか、古川明日香氏のご教示によれば、山梨郡散事小長部と同族とされる太氏があるという。

この点について原秀三郎氏は、「古事記」神武段によると小長谷部は神武天皇の皇子神八井耳命を始祖とする19氏族のひとつで、その同族には意富(鈴富・多・太とも)臣を斧頭とする小子部連、科野国造、常道の仲国造らがいたことを指摘する(原2002)。さらに小長谷部集団が分布する駿河国磐田郡鈴富郷を意富(多・太・大郷)と考え、意富(太)氏の姓と郷名が一致する例として注目する。三ヶ所遺跡が山梨郡大野郷内に位置することから、山梨郡散事としての小長谷部の存在が明らかのことから、大野郷は太(意富・鈴富・多)郷であって、太氏との関連があるという見方も可能となってくる。

なお補足するならば、山梨郡散事小長谷部に関する史料は2点ある(山下2009)。天平10年(738)の正倉院文書「駿河國正税帳」記載の部領使小長谷部麻佐(川斐國より御馬獻上のため駿河國を通過した際に同国6郡から食糧を支給された)と、天平10年(738)正倉院文書「駿河國正税帳」記載の小長谷部練麻呂(甲斐國へ帰国する防人39名が駿河國通過の際に同国6郡より食糧を支給された)の2名に関するものである。ここでは小長谷部が山梨郡内に役人として居住していたことを確認し、大野郷との関連を示唆するものとみておきたい。このように姓としての可能性も、ひとつの有力説として浮上する。

ここでは関連墨書の検討、・遺跡内での文字の組み合わせを中心にして「東大」墨書の意味について検討した。今後の事例増加を待つとともに、各地の事例を「太氏」との関連で注目する必要性を感じる。

【参考文献】

- 尾崎嘉彦ほか 1990 「大原遺跡発掘調査報告」一宮町遺跡調査会・一宮町教育委員会
原秀三郎 2002 「第三章統一跡 十領の設置と壬生部」「城と王權の古代史学」猪吉房
山下孝司 2009 「古代甲斐國の人名」「山梨考古学論集VI」山梨県考古学協会30周年記念論文集
森本圭一・竹内清志 1975 「杭No.280地点 第1分住居址」「勝沼バイパス建設に伴う古代甲斐國の考古学調査(総編)」山梨県教育委員会
園野秀典 1999 「まとめ」「笠所遺跡発掘調査報告書」芦川村埋蔵文化財調査報告書 第1集 芦川村教育委員会
志村憲一ほか 2003 「デクヤ遺跡——一枚魔乗物最終処分場建設に伴う発掘調査報告書」甲府市文化財調査報告書22 甲府市教育委員会ほか
小瀬忠秋・阿部歎 2003 「松本塚ノ越遺跡(ホテルやまなみ地点)」「石和町埋蔵文化財調査報告書」第8集 石和町教育委員会ほか

第4節 三ヶ所遺跡の掘立柱建築について

室 伏 徹

三ヶ所遺跡からは5棟の古代の掘立柱建物が検出されている。各建物の建築単位で分析すると、

- 1号掘立柱建物 側柱 (3.50尺 : 1.06m) 5/3 × 4/2 ?
- 2号掘立柱建物 側柱 (3.50尺 : 1.06m) 3/2 × 3/2
- 3号掘立柱建物 側柱 (3.50尺 : 1.06m) 4/3 × 4/2
- 4号掘立柱建物 側柱 (3.50尺 : 1.06m) 6/3 ? × 4/2
- 5号掘立柱建物 側柱 (3.40尺 : 1.03m) 4/3 × 4/3

となる。いずれも桁行3間から2間、梁行3間から2間の小規模側柱構造建築で、山梨県内の集落遺跡で一般的に見出されるものであるが、

- 1) 建築単位がほぼ同じであること
- 2) 建物の方位が一致し、ある程度の距離を置いて配置されていること
- 3) 規模構造が建物ごとに異なっていること

などの、特色を見出すことができる。

以上から掘立柱建築群は、構造の違いから異なる役割を持つ建物として、殆ど同時に計画的に配置された一群を成す建物群であると考えられる。ところが、このことは逆に、この一群を成す建物以外が無いこと、つまり建替えなどの行為が行われなかつたことを意味している。

建物の建築年代は、柱穴内の出土遺物から9世紀後半が想定されるが、平城宮内裏北官衙遺構の建築単位は(3.25尺 : 0.985m)から(3.90尺 : 1.182m)で、8世紀後半の正倉院の建築単位は(3.88尺 : 1.176m)、8世紀末から9世紀前葉の平安京右京六条一坊の邸宅遺構は(3.90尺 : 1.182m)～(4.50尺 : 1.364m)を囲り、山梨県でも8世紀後半に整備されたと考えられる甲斐国分寺塔遺構が(3.52尺 : 1.067m)を測ることから、これらと比較しても8世紀後半で9世紀には降らない年代と考えられる。この遺跡から検出され、掘立柱建築に重複する竪穴住居は、9世紀後半から10世紀前葉の小型住居が4軒だけであり、これらの竪穴住居の関係者が設置した掘立柱建物とは考えにくいことも、時代を遡らせる理由の一つである。

三ヶ所遺跡付近は、磯貝正義の甲斐国分寺の都郷配置の復元によれば、和名類聚抄の山梨西郡の大野郷の北側で、山梨東郡の於曾郷と山梨西郡の加美郷の間に挟まれた空白地帯に当たっている。

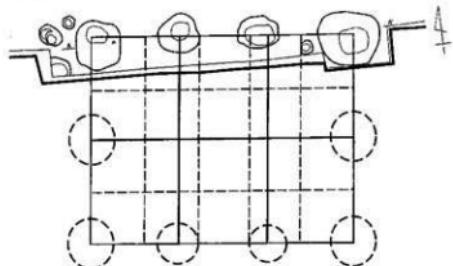
8世紀後半は、甲斐国分寺の造営が始まる時期で、各國の国府もこの時期から造営が始まり、郡司にかわり国司の指揮権が強化される時期に当たり、この時期に掘立柱建築を計画的に配置する集落が設けられたとするなら、国司の影響を無視できない。下って9世紀前葉は、上麻郡に植坂、柏前、真衣野3ヶ所の御牧が設置された時期に当たり、その開発のため、山梨郡から等地力郷や栗原郷の関係者が移住し、同名郷が新設された可能性が指摘されている。牧を統括する牧監が甲斐に設置されたのは天長4年(827)であるから、設置の初期段階では国司がその指揮権を発動したと考えられる。8世紀後半に設置された計画的な集落が9世紀前半には營まれなくなったことが、山梨郡関係者による巨摩郡の御牧開発に連動したものとするなら、三ヶ所遺跡の調査成果は興味深いものといえる。

平安時代末以降、三ヶ所遺跡から北側の甲府盆地北東部の一帯は牧莊と呼ばれるようになる。しかし、その語源となった牧については、成立年代、名称を含め何ら記録が無く、実態が把握されていない。このことから三ヶ所遺跡とともに、さらに北側にあたる鍛冶構を伴う日下部遺跡なども含め、この地域の奈良・平安時代の遺跡は注視する必要があると考えられる。

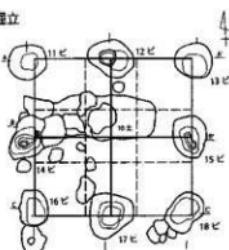
[註]

ここでいう建物表記法(建築単位表記)について補足しておく(室伏 2006)。

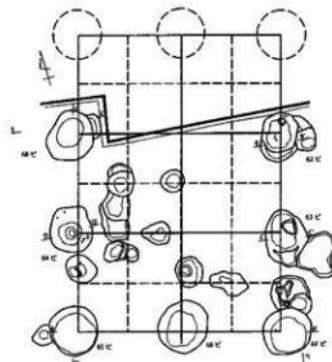
1号掘立



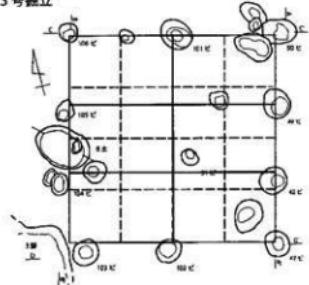
2号掘立



4号掘立



3号掘立



5号掘立

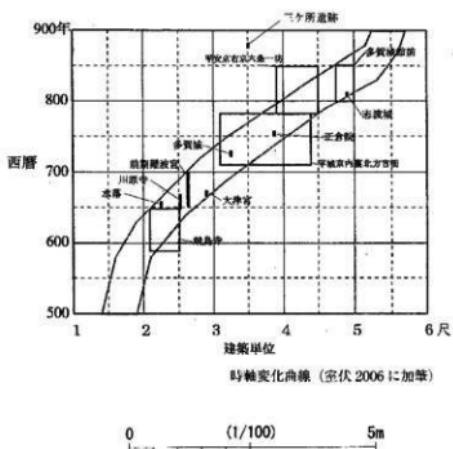
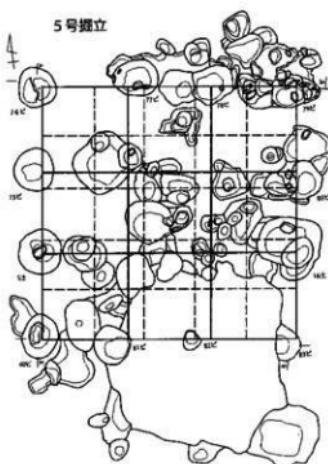


図6 掘立柱建物の建築単位と年代

例えば、桁行3間、梁行2間の偶柱建物で、建築単位が3.25尺で桁行4単位、梁行が3単位の掘立柱建物の場合、

$$\text{偶柱} (3.25) / 3 \times 3/2$$

$$[\text{偶柱・総柱}] (\text{建築単位}) [\text{桁行単位数}/\text{桁行柱間数}] \times [\text{梁行単位数}/\text{梁行柱間数}] + [\text{扉の方位置}] [\text{扉幅の単位数}]$$

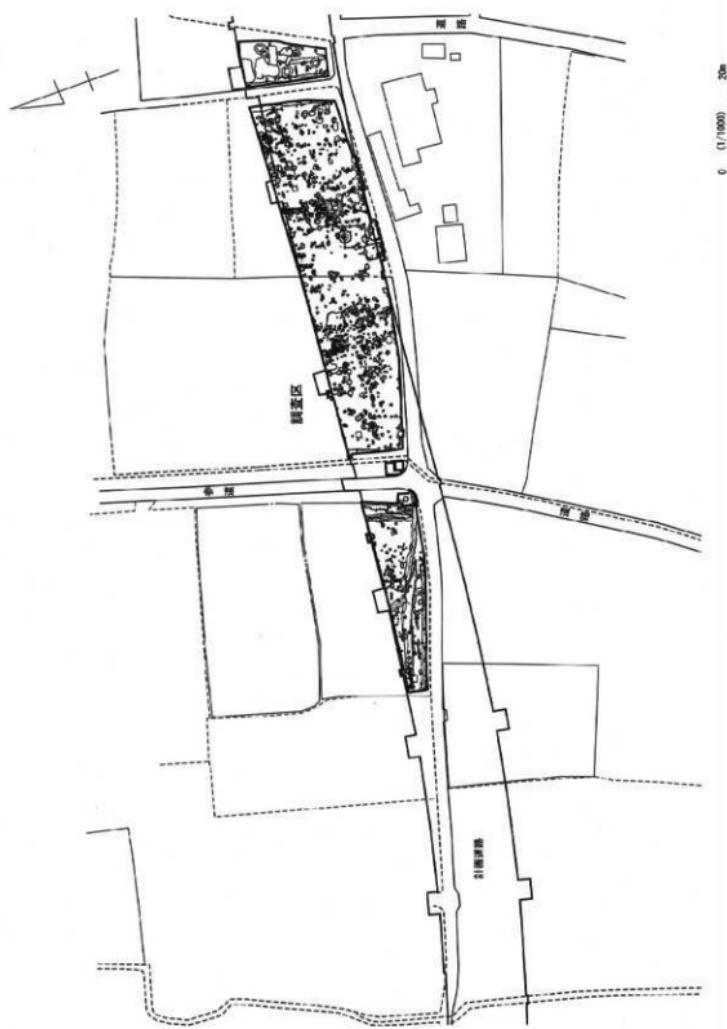
と表記する。基準値、物差しとなる長さを建築単位とし、その方眼上に四隅の柱位置を決め、間の柱の位置を柱間数で均等に割った位置とする建築設計の仕方があるという考え方によるもので、建築単位は時代によって変化し、新しくなるほど建築単位が大きいという傾向（時軸変化曲線）が指摘されている。また建物の性格によっては建築単位を2～5倍にして、柱間を大きくする倍尺運用基準があることが判明しており、そうした捉え方で造構の性格、年代を解明できる可能性があるという。

ただ、本遺跡で柱穴から出土している土師器は9世紀後半であり、それらが建物撤去後に伴う廃絶時期以降の年代を示す可能性もあるものの、室伏氏の時期推定とは大きく食い違いをみせる結果となっている。時軸変化曲線を見直す必要、あるいは地方への波及といった時間差を考慮すべきなのか、地域的に保守的な様相も考えられ、必ずしも一律に進化論的発展が展開しなかったことも念頭に置くべきであろう。（檍原）

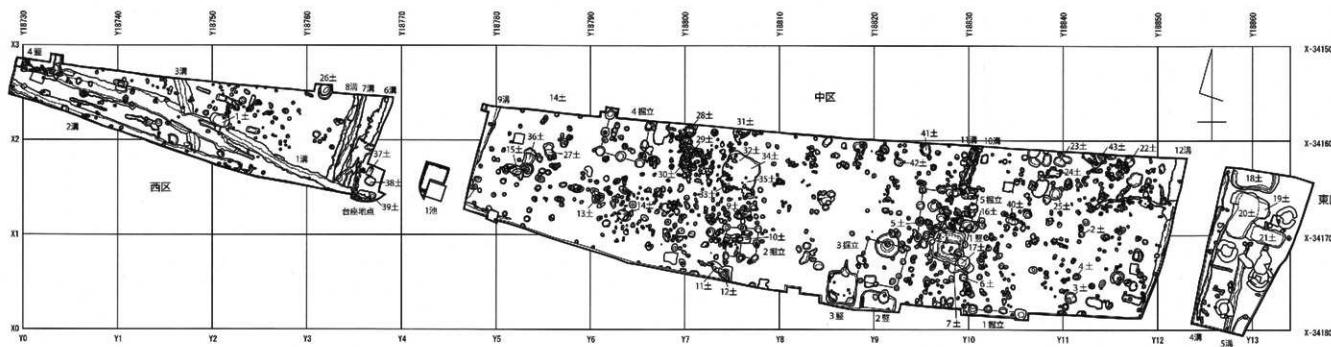
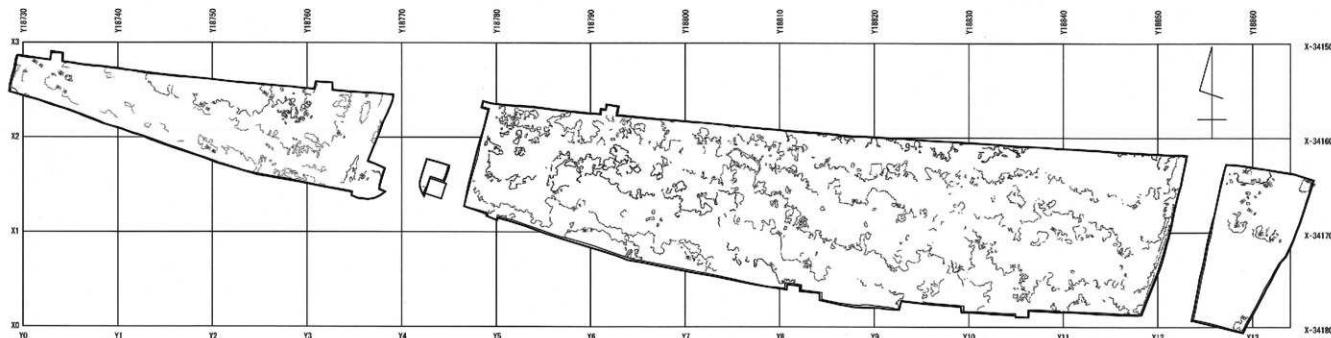
【参考文献】

室伏徹 2006『奈良・平安時代建築解析法としての建築単位の捉言』『掘立柱・礎石建物建築の考古学－都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法－』帝京大学山梨文化財研究所

最後ではあるが、本調査から報告書刊行に至るまでの間、多くの方々にお世話になった。調査にご理解を示された山梨市、御指導いただいた山梨市教育委員会、参道近くでの調査でご迷惑をおかけした清白寺様、ご教示いただいた地元の方、調査および整理作業に従事された調査スタッフの方々、特別寄稿をいただいた植月学氏、室伏徹氏、そのほか多くの方々のご理解、ご協力、ご尽力にあらためて感謝しつつ、報告の結語としたい。

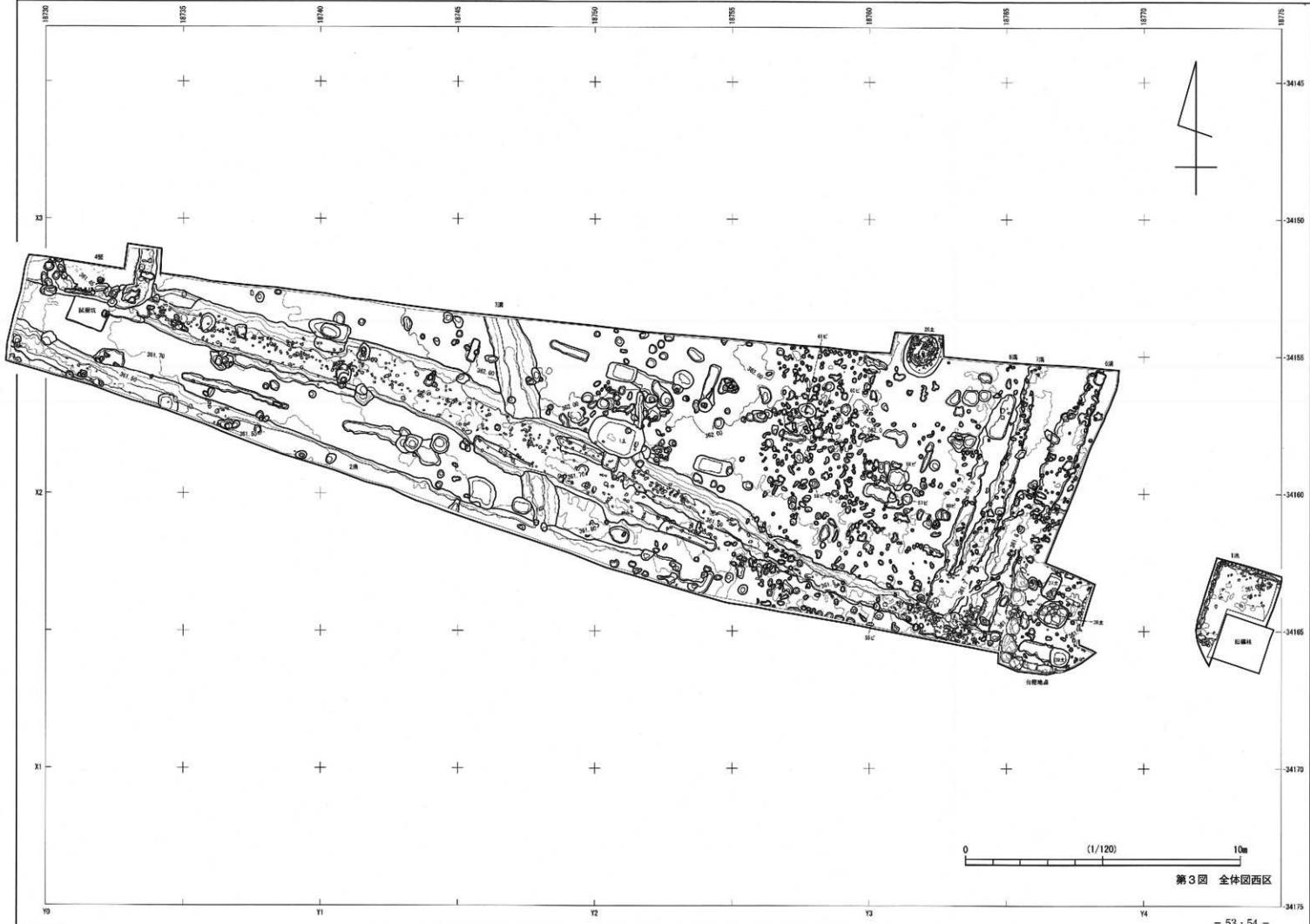


第1図 調査区及び周辺

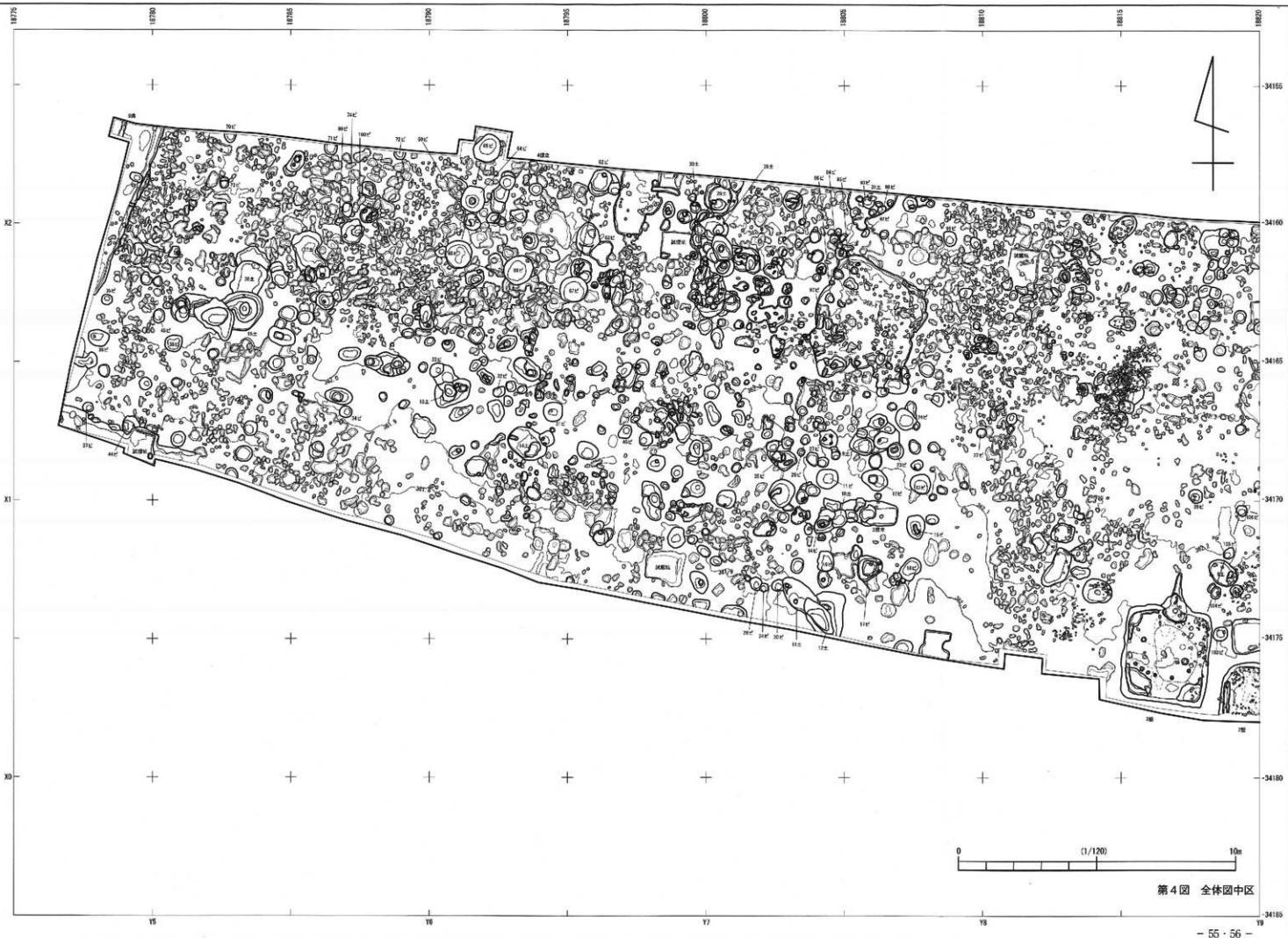


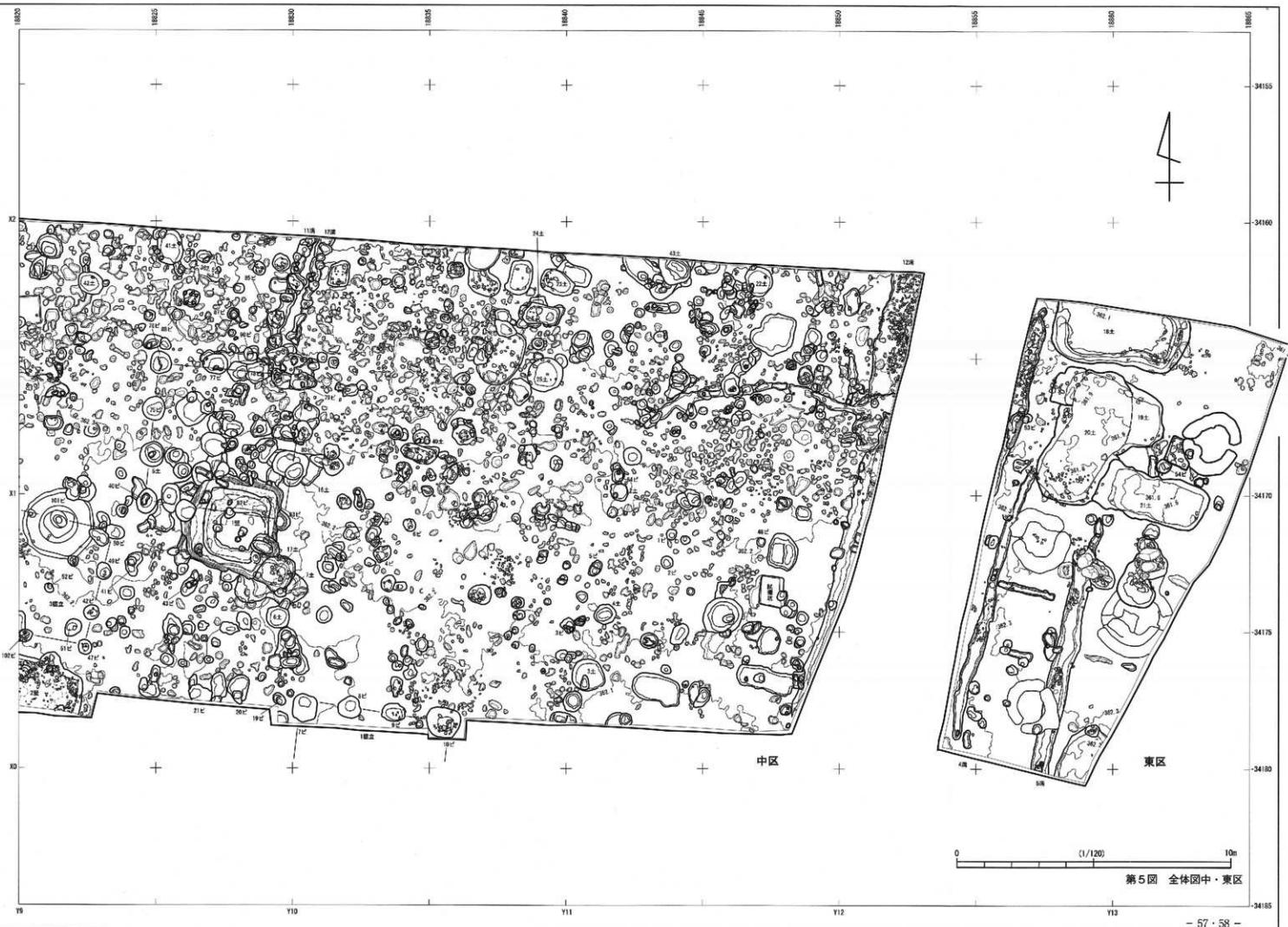
0 (1/400) 10 20m

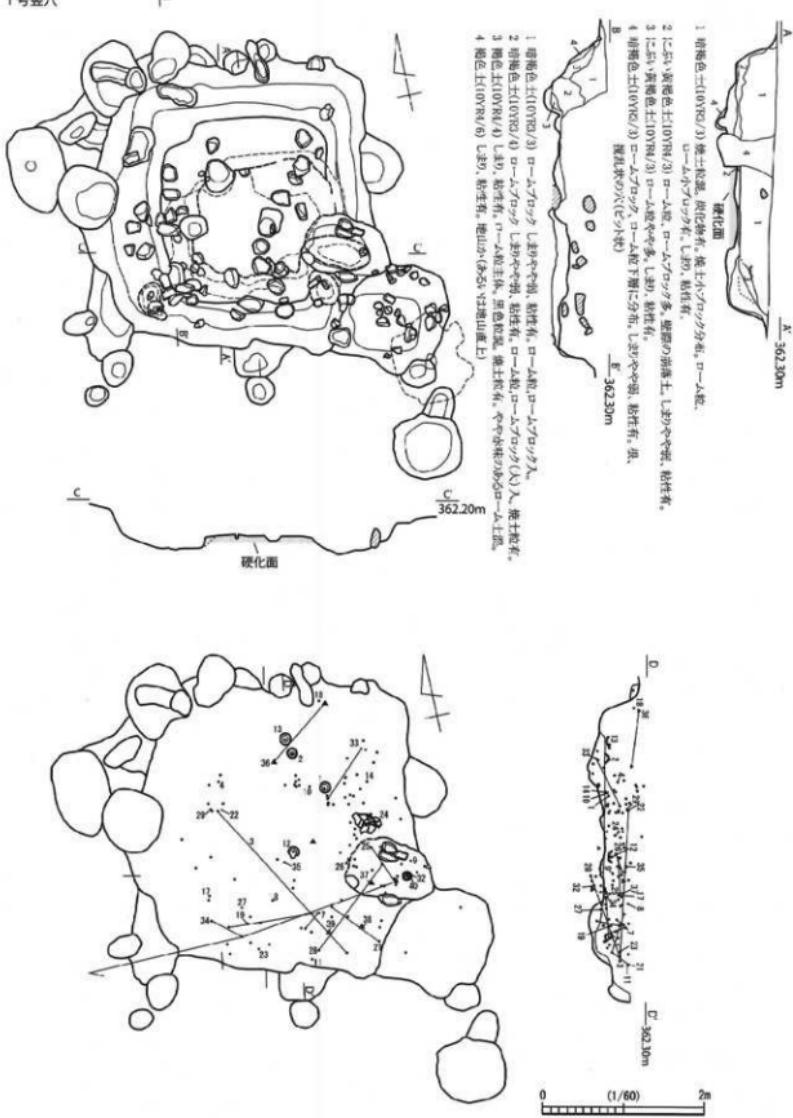
第2図 全体図



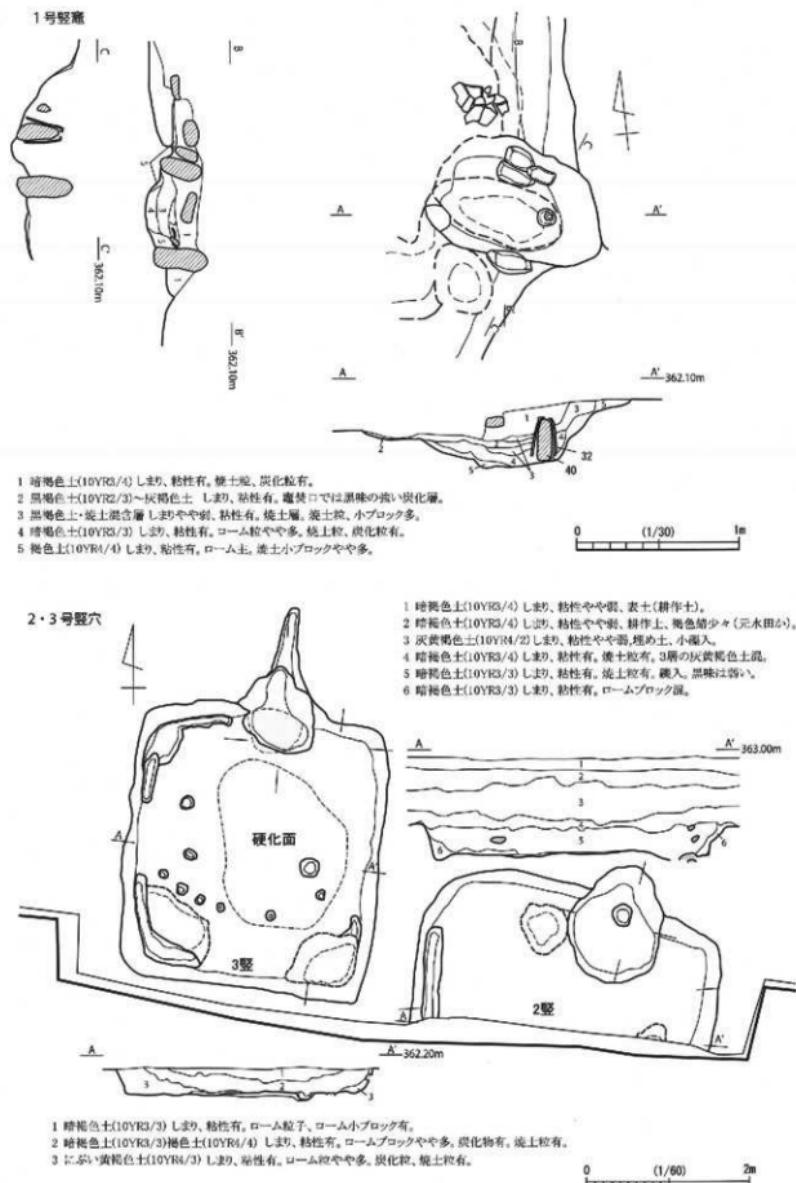
第3図 全体図西区





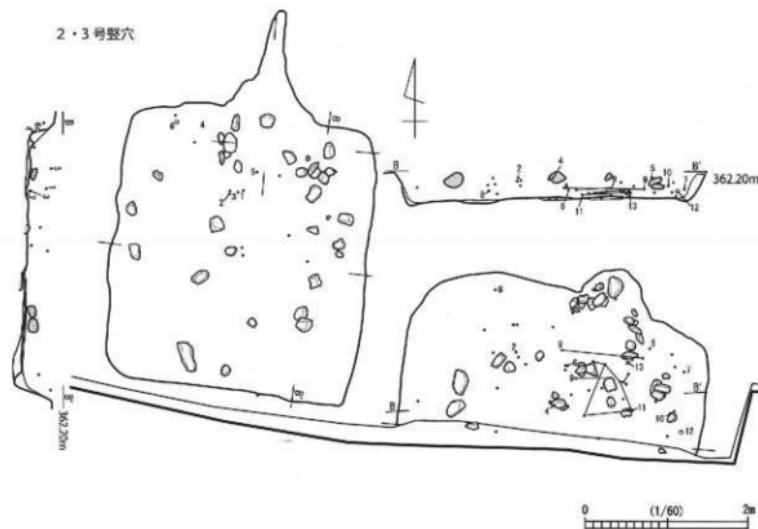


第6図 1号竪穴(1)

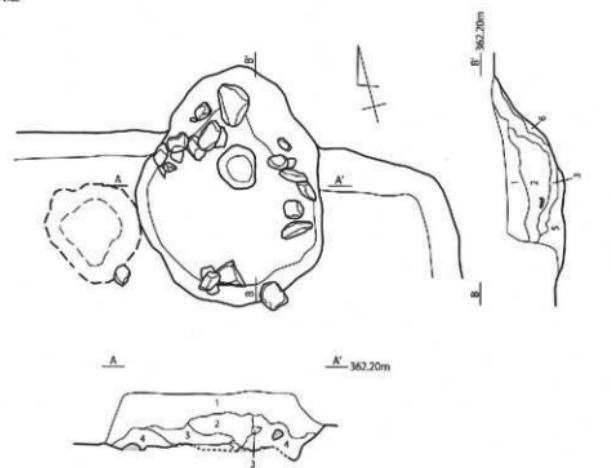


第7図 1号堅窓(2)、2・3号堅穴(1)

2・3号堅穴



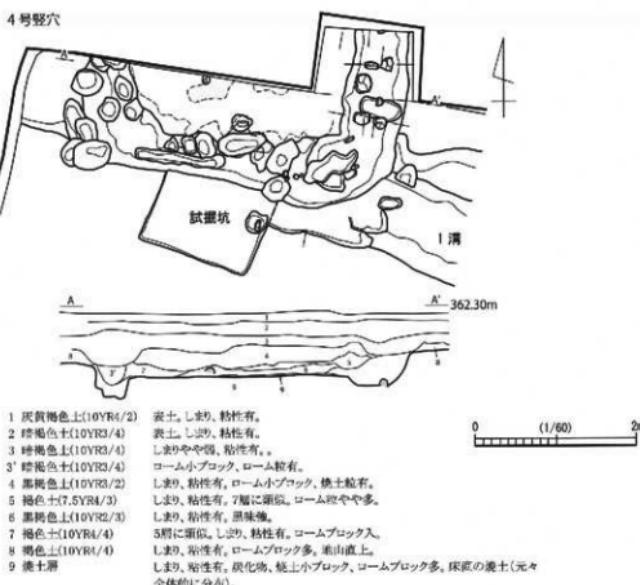
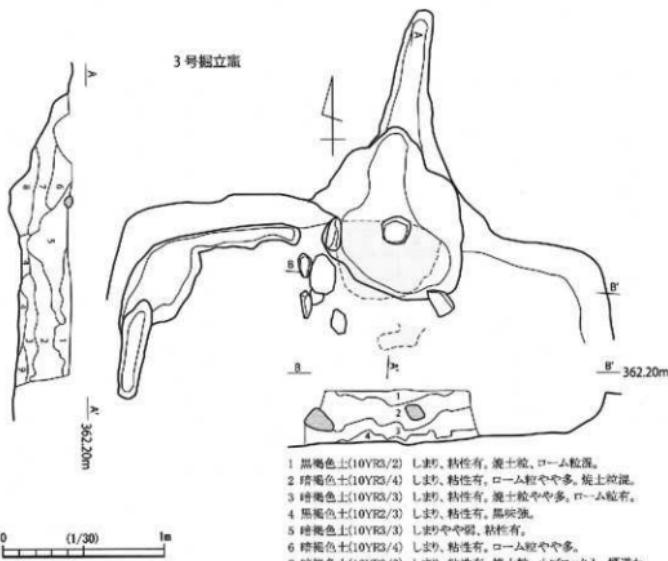
2号堅穴



- 1 増滑色土(10YR3/3) しまり、粘性有。燒土粒、ローム粒有。ローム小ブロック有。
- 2 増滑色土(10YR3/3) しまりやや弱、粘性有。燒土粒、燒土小ブロック有。
- 3 地上層 増滑色土疊びり しまり、粘性有。燒土粒多(小ブロック有)。
- 4 にぶい 黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。黄土有。礫の他少。
- 5 増滑色土(10YR3/4) しまり、粘性有。燒土粒、燒土小ブロック有。ローム粒や多。
- 6 増滑色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム粒多。地山直上か。

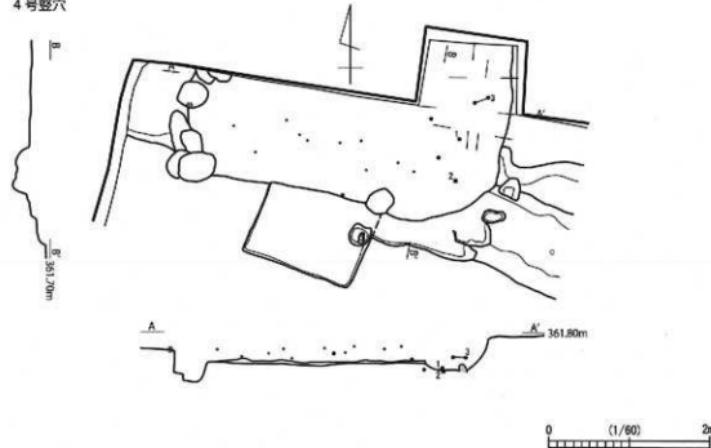
0 (1/30) 1m

第8図 2・3号堅穴(2)

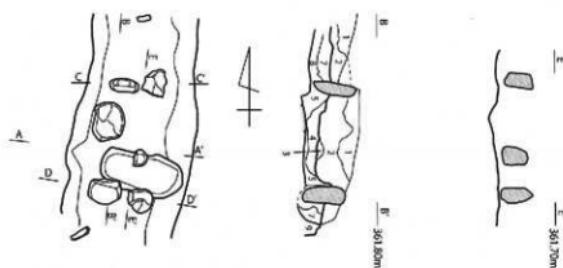


第9図 2・3号豎穴(3)、4号豎穴(1)

4号豊穴



4号豊穴窓

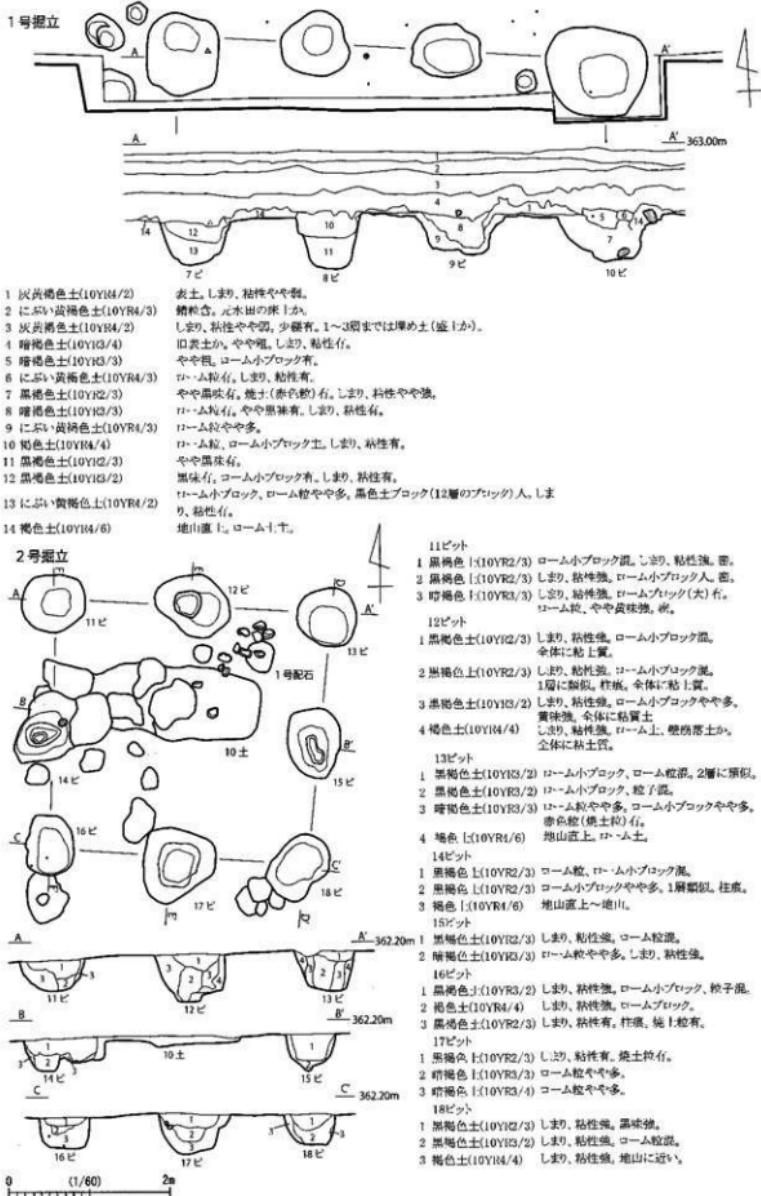


A 361.80m

1 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。褐色土ブロック。
 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりや少弱、粘性有。ローム粒やや多。
 3 黒土層 灰化物混入。
 4 黑褐色土(10YR2/2) 灰化物層。しまり少、粘性有。炭化物多量。
 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロックやや多。
 6 疣上層 電気面、赤直面の淀土層、炭化物混入。
 7 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒、ローム小ブロックやや多。泥り土。
 8 黑褐色土(10YR2/3) 黒色土層。ローム小ブロック有。貼り床の埋め土。
 9 黄褐色土(10YR5/6) ローム土。底下掘り方。

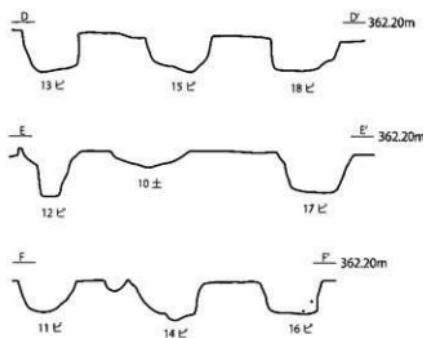


第10図 4号豊穴(2)

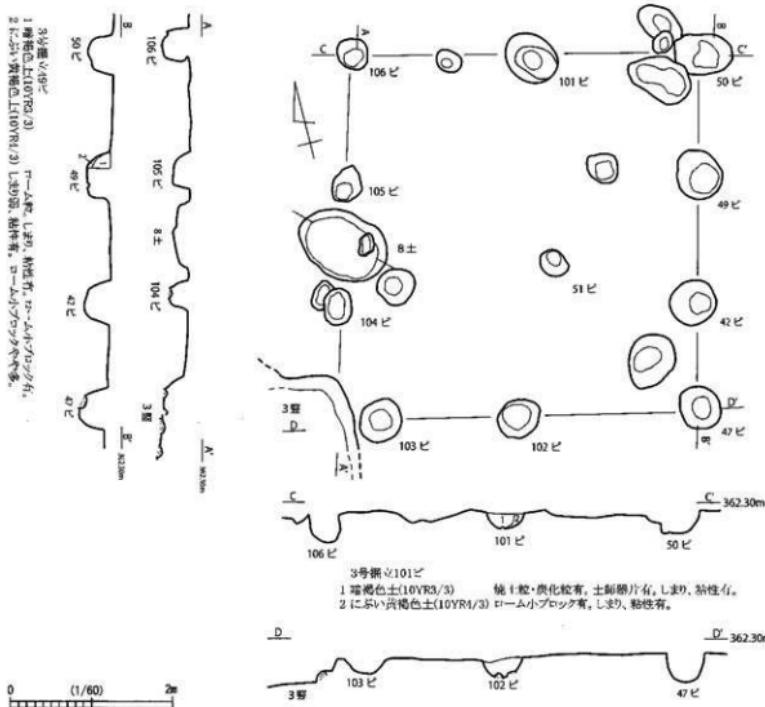


第11図 1号掘立柱建物、2号掘立柱建物(1)

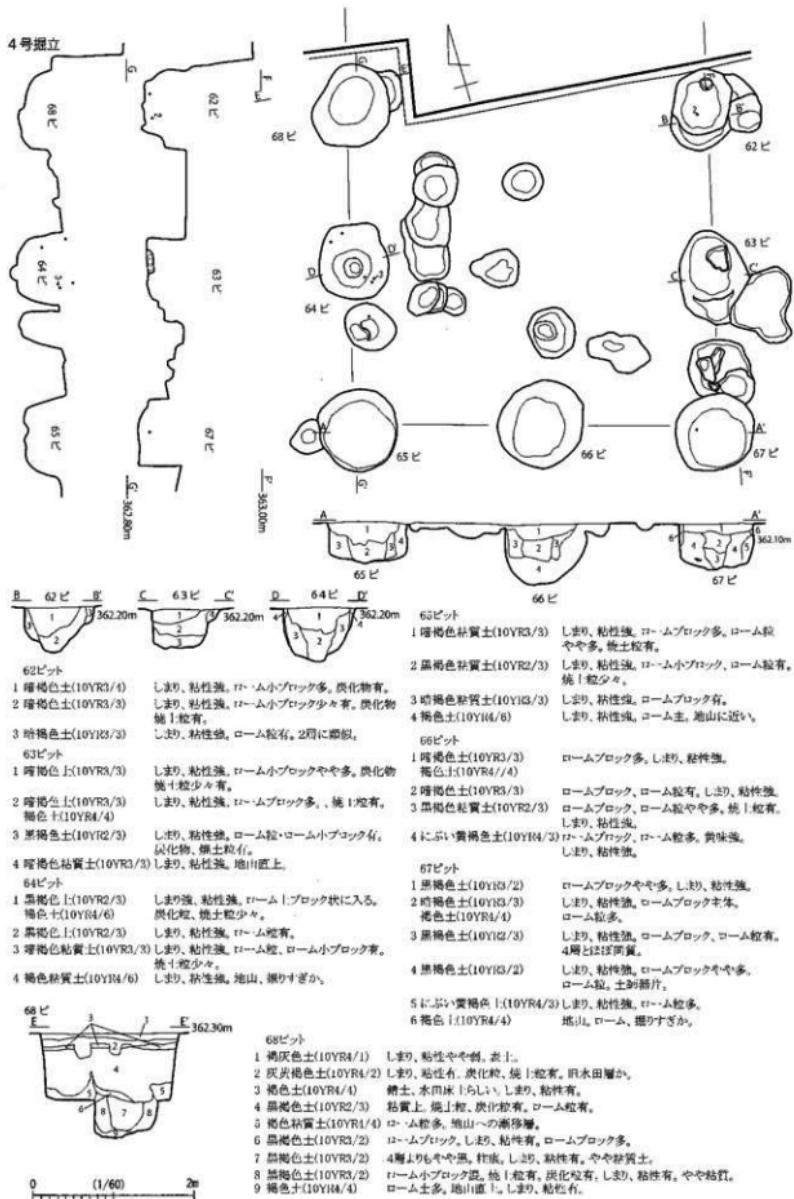
2号掘立



3号掘立

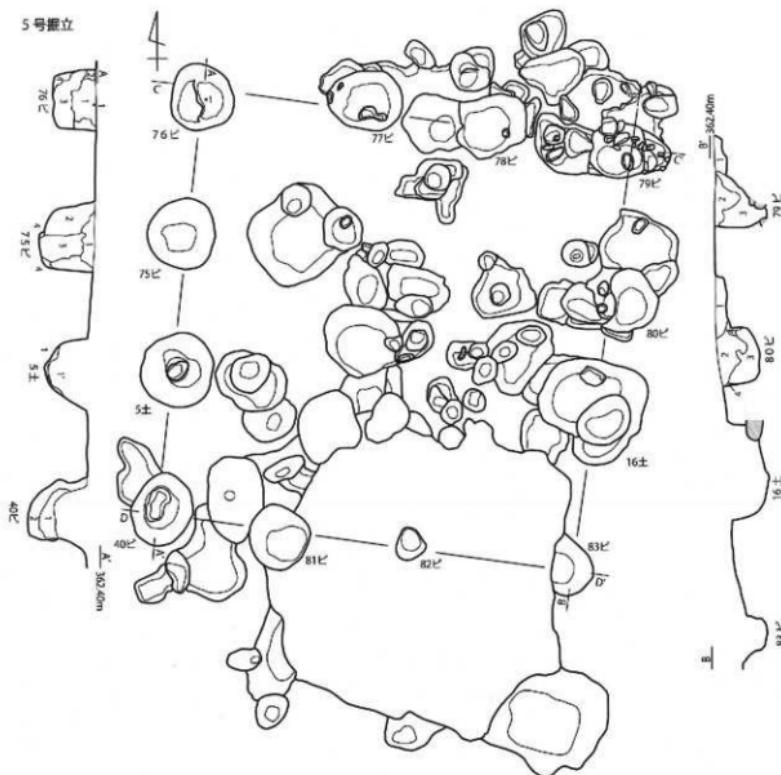


第12図 2号掘立柱建物(2)、3号掘立柱建物



第13図 4号掘立柱建物

5号据立



75ピット

- 1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム小ブロック混。黒色粒、褐色斑調。
- 2 單褐色土(10YR3/1) しまり、粘性有。ローム小ブロック有。黒色は1層よりもやや弱。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム小ブロックが横方向に堆積。黒色土とローム上の混土。

4 黄褐色土(10YR5/6) しまり、粘性有。通山直上～通山上。

5土坑

- 1 極褐色土(10YR4/6) ローム上。しまり、粘性有。褐色土質。
- 1' 極褐色質土(10YR4/6) やや白っぽい。柱状の当たる所らしい。

40ピット

- 1 極色土(7.5YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。盛りすぎとの可能性有。
- 2 單褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。やや暗い。(通山は黄褐色ローム上)。

80ピット

- 1 黑褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック混。
- 2 黑褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒混。ローム小ブロック有。
- 3 單褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。

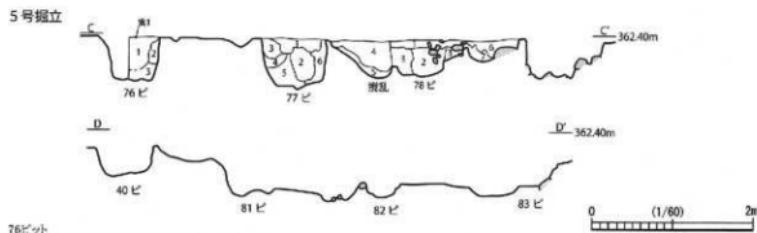
4 黃褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。通山に近いコーム土。

79ピット

- 1 單褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック有。
- 2 黑褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。黑味有。ローム小ブロック有。
- 3 黑褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒有。

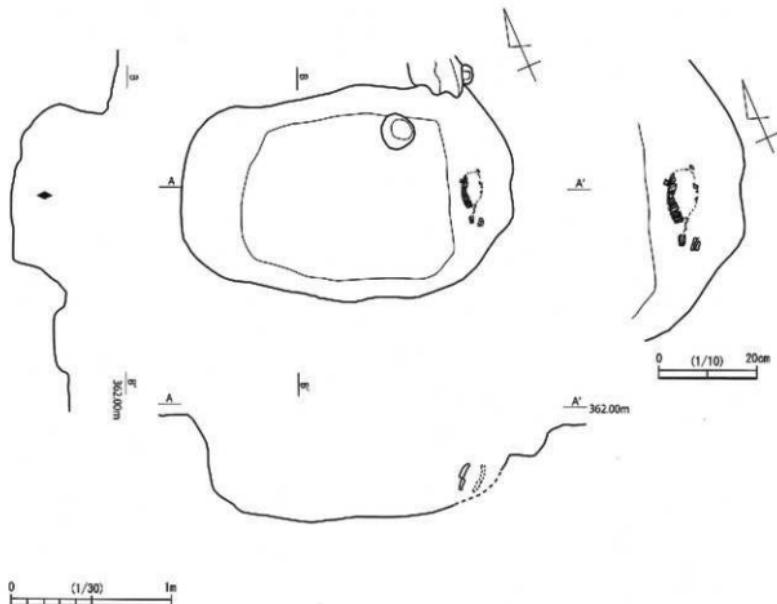
0 (1/60) 2m

第14図 5号据立柱建物(1)

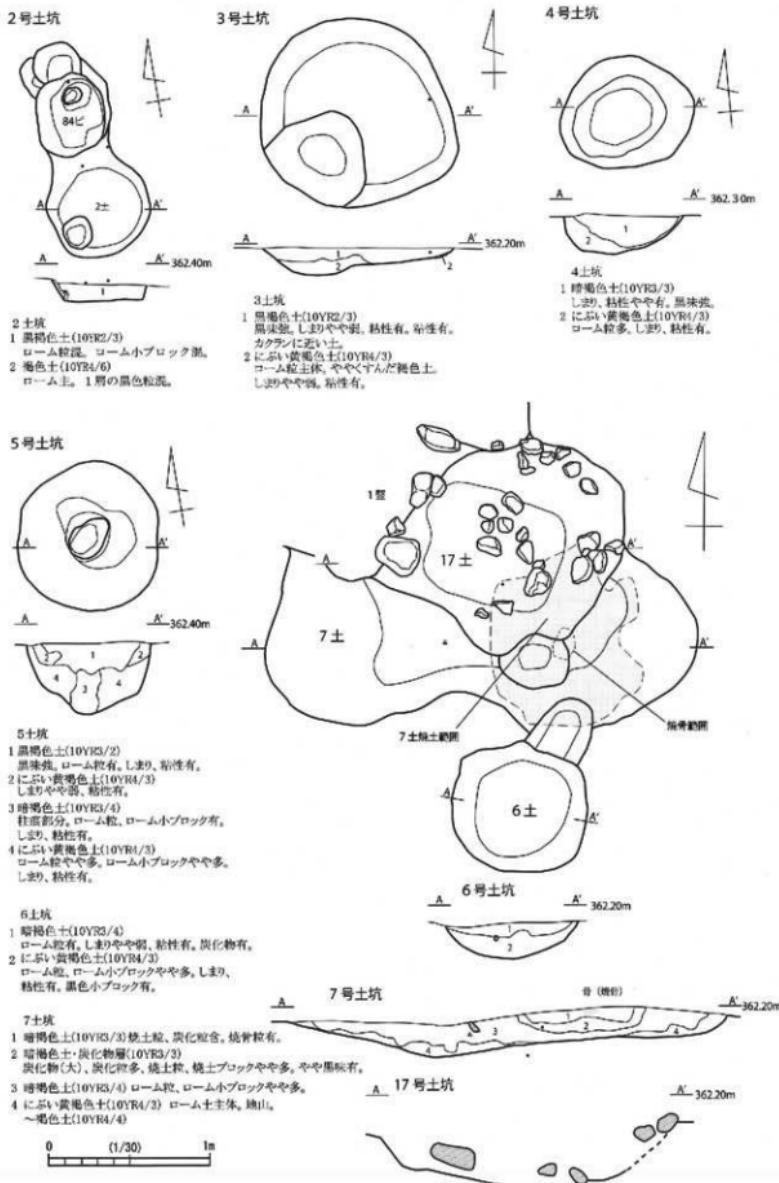


- 76ピット
 1 黑褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。ロームブロック有。
 ローム小ブロック有。
 2 にぶい黄褐色土(10YR1/3)しまり、粘性有。ローム粒やや多。
 3 にぶい黄褐色土(10YR1/3)しまり、粘性有。ロームブロック多く混。
 黒色土との混合。
 4 黄褐色土(10YR5/6)しまり、粘性有。地山に近いローム土。黒色土混。
 77ピット
 1 黑褐色土(10YR3/2)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒混。
 2 にぶい黄褐色土(10YR1/3)しまり、粘性有。ローム粒やや多。
 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒多く混。
 4 黑褐色土(10YR4/6)しまり、粘性有。ローム粒多。ローム土に近い。
 5 黑褐色土(10YR2/3)しまり、粘性有。黒味やや強。
 6 黄褐色土(10YR4/4)しまり、粘性有。地山直上へやや傾けすぎか。

1号土坑

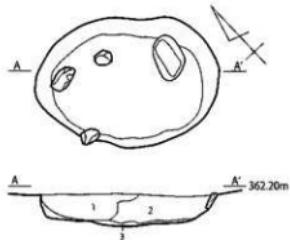


第15図 5号掘立柱建物(2)、1号土坑

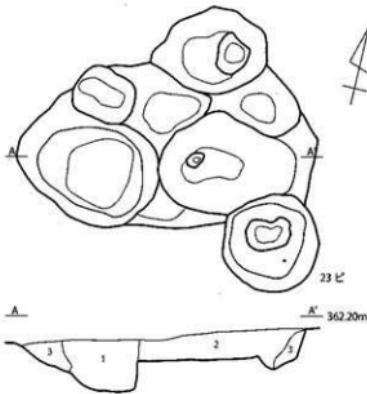


第16図 2~7・17号土坑

8号土坑

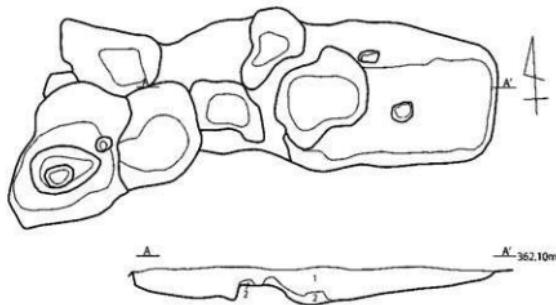


9号土坑

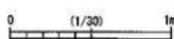


- 8号
- 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強。粘性有。(搅乱状)
 - 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや弱。粘性有。ローム粒やや多。
 - 褐色土(10YR4/6) ローム土。地山、しまり、粘性有。

10号土坑

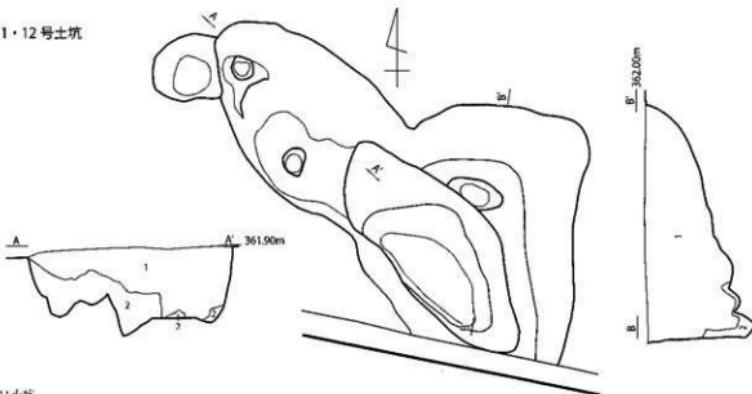


- 10号
- 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性強。燒土粒有。
 - 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ローム粒土。地山～地山直上。



第17図 8~10号土坑

11・12号土坑

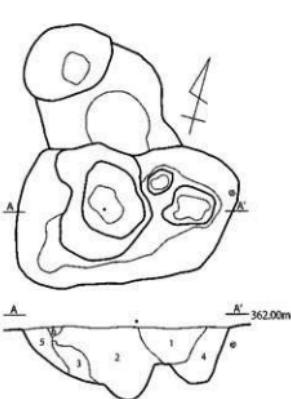


11号坑

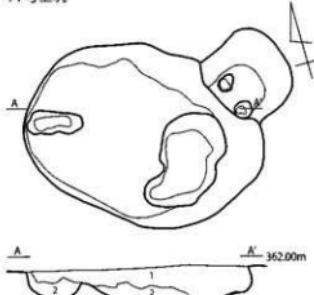
- 1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。燒土粒、炭化粒有。
2 にぶい黄褐色土(10YI4/3) しまり、粘性少。コーム粒や多。地山直上。

- 12号坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性強。ローム小ブロック有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。コーム粒や多。

13号土坑



14号土坑

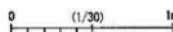


14号坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 粘質、しまり、粘性強。ローム粒、ロームブロック多。
2 暗色土(10YR4/6) しまり、粘性有。ローム土。1層の小ブロック混。

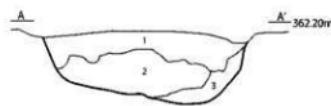
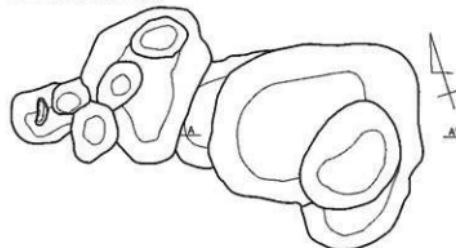
13号坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性強。ローム小ブロック少々混(2層よりは少なく、黒味強)。
2 黑褐色土(10YR2/2) 暗色土 小ブロック しまり、粘性強。暗色土 小ブロック多。
3 黑褐色土(10YR2/2) しまり、粘性強。1層に限る。
4 黑褐色土(10YR2/2) 暗色土 小ブロック しまり、粘性強。2層に類似。
5 緋褐色土(10YR3/3) 地山に近い、12号土坑。
6 暗色土(10YR4/4) 暗色土 小ブロック。



第18図 11~14号土坑

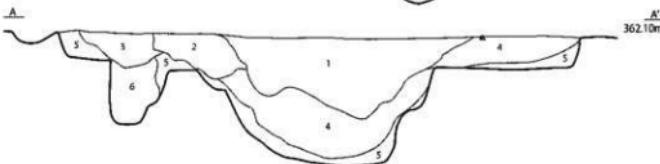
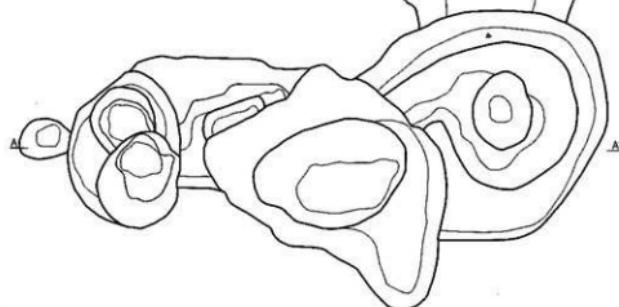
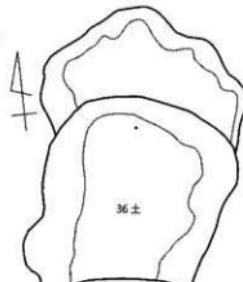
16号土坑(5号掘立柱穴)



16号坑

- 1 黄褐色土(10YR5/8) ロームを入為的に埋める。しりとり、粘性有。
- 2 黑褐色土(10YIG/4) ローム土、ローム粘、ローム小ブロックやや多。しりとり、粘性有。黑色土层。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粘、しりとり、粘性有。粘。

15号土坑



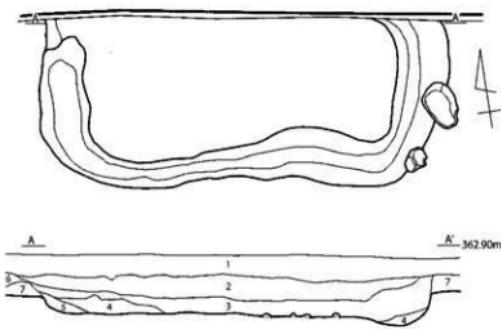
15号坑

- 1 黑褐色土(10YIG/2) しりとり、粘性有。コーム粘、ローム小ブロック含。
- 2 黑褐色土(10YIG/2/2) しりとり、粘性有。コームブロックやや多。ローム粘含。・褐色土(10YR4/4)
- 3 黑褐色土(10YIG/2) しりとり、粘性有。1層に堅硬。ローム小ブロック含。
- 4 喀褐色土(10YIG/3) しりとり、粘性有。ロームブロック、ローム粘やや多。
- 5 棕色土(10YR4/4) しりとり、粘性有。ローム粘土。地山直上。
- 6 黑褐色土(10YIG/2) しりとり、粘性有。黄褐色土と黑色土の互層。ロームブロック多。・黒褐色土

0 (1/30) 1m

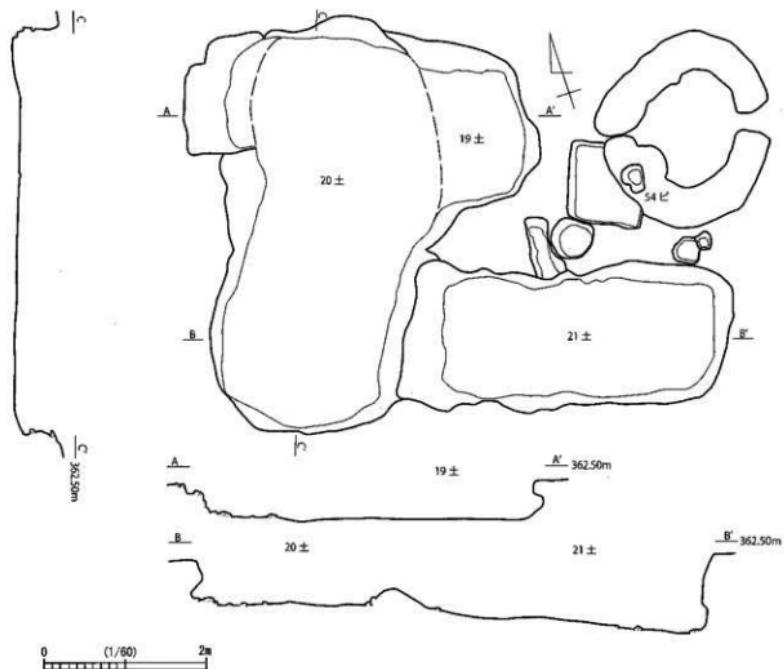
第19図 15・16号土坑

18号土坑



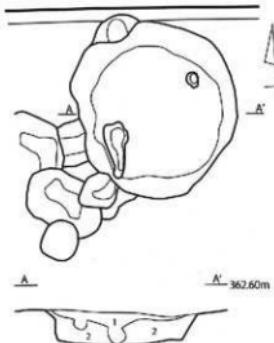
- 18号土坑
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱、粘性有。表土(耕作土)
 - 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。ローム小ブロック多。灰色土(1層)多。6層に層似。
 - 3 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱、粘性有。灰色块強。ローム小ブロックや少。
 - 4 黄褐色土(10YR4/6) しまりやや弱、粘性有。褐色土小ブロック多。ローム粒や多。黄味強。
 - 5 褐色砂礫層(10YR4/6) しまり、粘性无。塊崩落か。颗粒多。
 - 6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。灰色味強。
 - 7 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ヨーハム粒主。褐色味強。

19・20・21号土坑



第20図 18~21号土坑

22号土坑

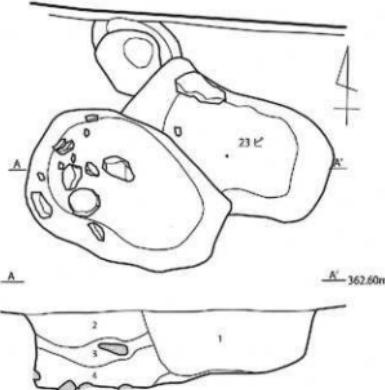


22号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや弱、粘性有。ローム小ブロック入。ローム粒入。

- 2 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性有。ロームが層状に堆積。ロームブロックやや多。
1層よりも黒味強。

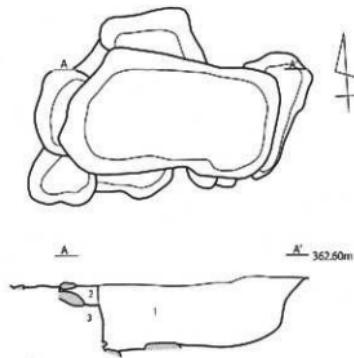
23号土坑



23号土坑

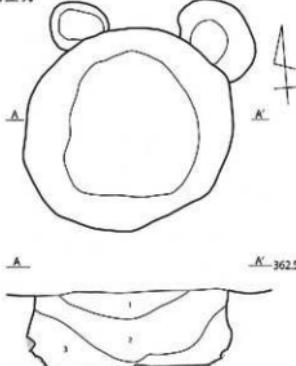
- 1 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロック、ローム粒を全体に含。しまりやや弱、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロックやや多、ローム粒。しまり、粘性有。
3 にぶい 黄褐色土(10YR4/3) ローム小ブロック多。しまり、粘性有。僅人。黒色小ブロック入。
4 暗褐色土(10YR3/3) 2層に類似。しまり、粘性有。

24号土坑

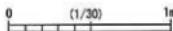


- 24号土坑
1 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロック、ローム粒やや多。
しまりやや弱、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒やや多、しまり、粘性有。
3 黄褐色土(10YR4/4) ローム上、屯山。しまり、粘性有。

25号土坑

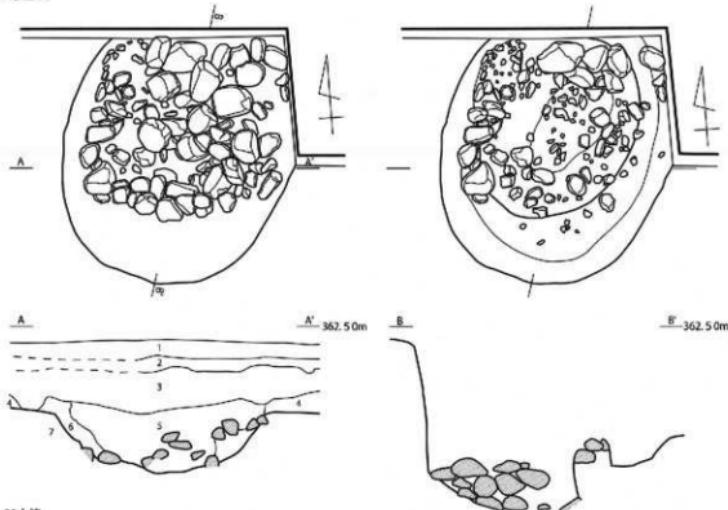


- 25号土坑
1 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム小ブロック有。
2 にぶい 黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。ローム粒、
ローム小ブロックやや多、融入。
3 暗褐色土(10YR3/3) 1層よりも黒味有。しまりやや弱、粘性有。
ローム粒有。



第21図 22~25号土坑

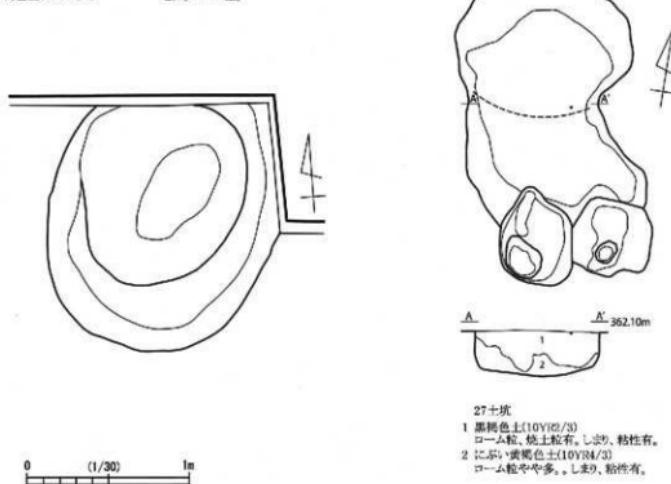
26号土坑



26号坑

- 1 淡黄色褐色土(10VR4/2) 表土。しめり、粘性有。耕作土。
- 2 茶灰土(10VR4/1) 壱土(埋め土か)。しまり、粘性有。
- 3 着褐色土(10V4/4) しまり、粘性有。
- 4 にじみ黄褐色土(10VR4/3) しめり、粘性有。ロームブロック多。地山直上層。
- 5 着褐色土(10V4/3) しまり、粘性有。
- 6 橙色土(10VR4/4) しめり、粘性有。
- 7 橙色土(10VR4/4) 地山。ローム土。

27号土坑

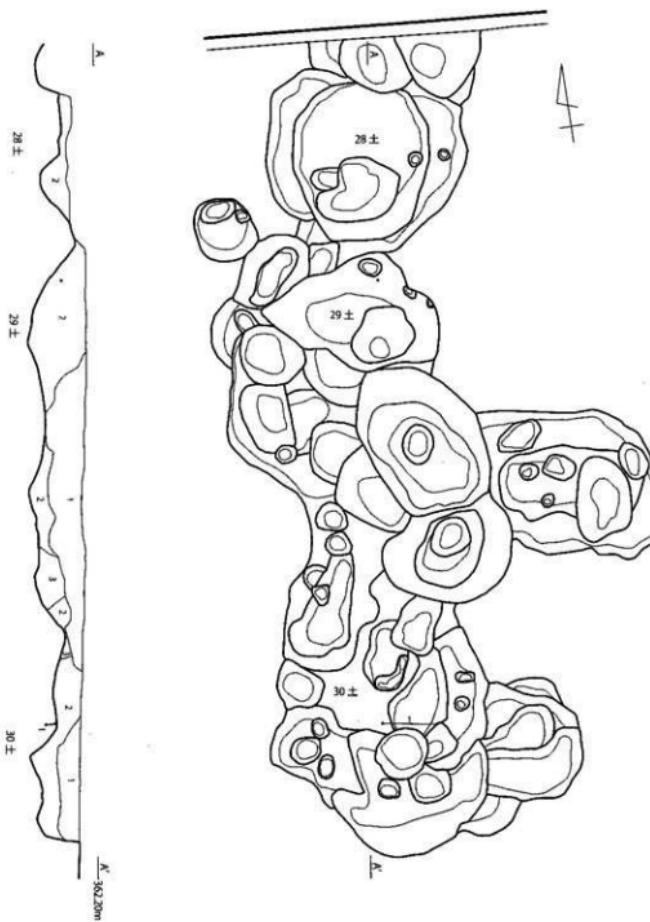


27号坑

- 1 基褐色土(10Y6/3) ローム粒、焼土粒有。しまり、粘性有。
- 2 にじみ黄褐色土(10VR4/3) ローム粒や多。しまり、粘性有。

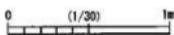
第22図 26・27号土坑

28・29・30号土坑



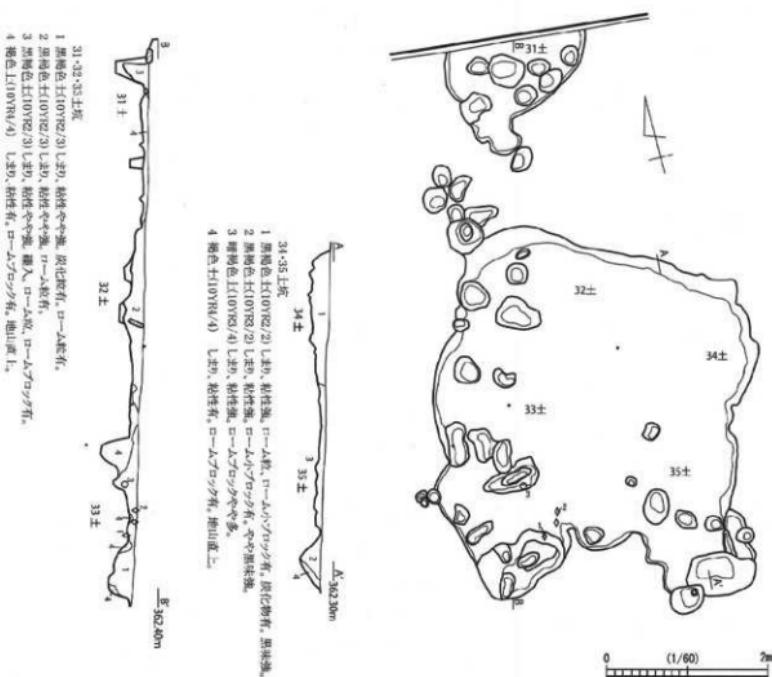
28・29・30号土坑

- 1 黒褐色 [10YR2/3] しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム鉢底。粘質土。
- 2 暗褐色 [10YR3/3] しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム鉢やや多。粘質土。
- 3 海色土 [10YR4/4] しまり、粘性有。ローム土主体。通山直上。

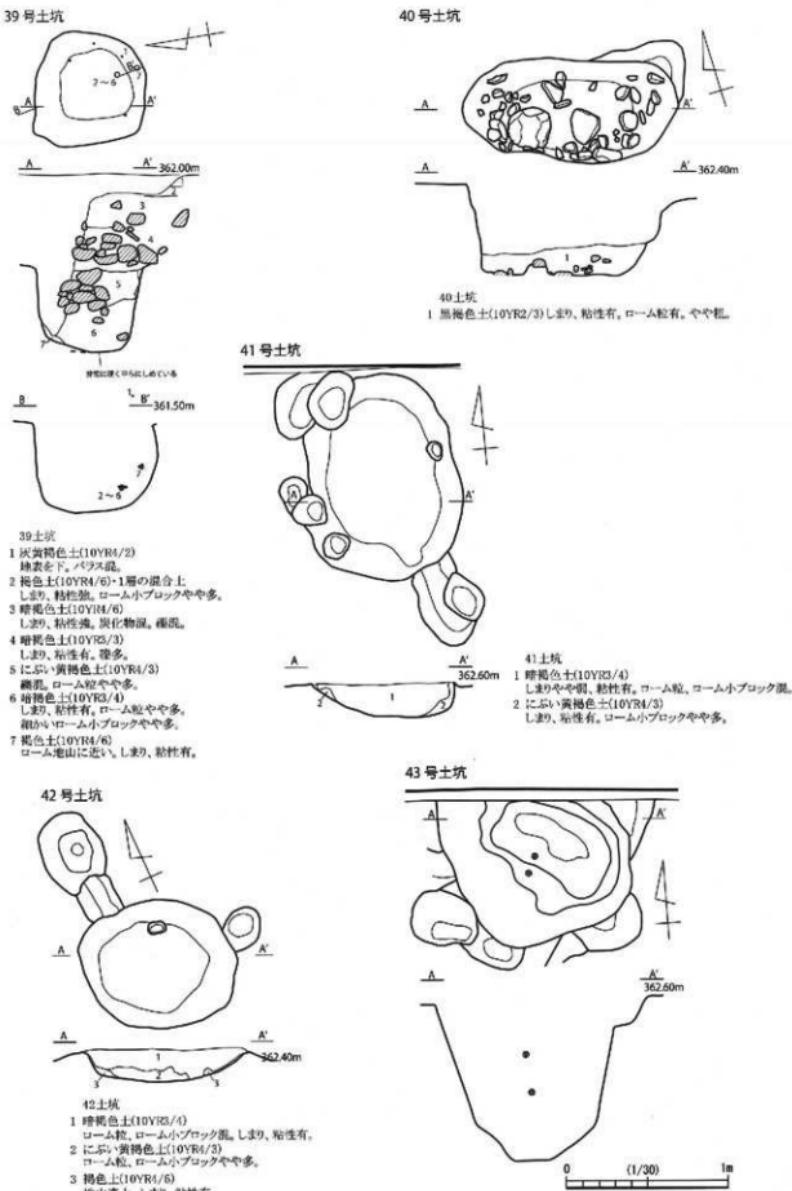


第23図 28~30号土坑

31 ~ 35号土坑

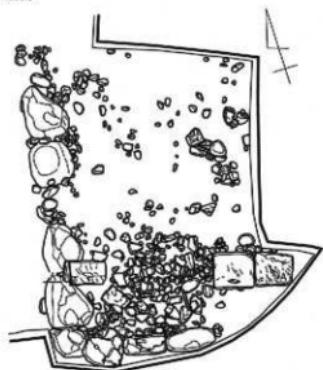


第24図 31~35・38号土坑



第25図 39~43号土坑

1層目



2層目



台座地点

1 黄褐色砂層(10YR5/6)

歩道工事に伴う砂層。

2 灰黄褐色土(10YR4/2)

1層の砂を含む。

3 灰黄褐色土(10YR4/2)

非常に硬く堅固な層粘性有。現代の石材も混入。

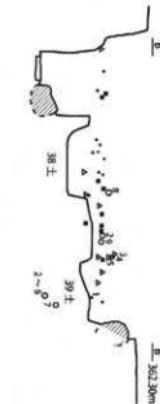
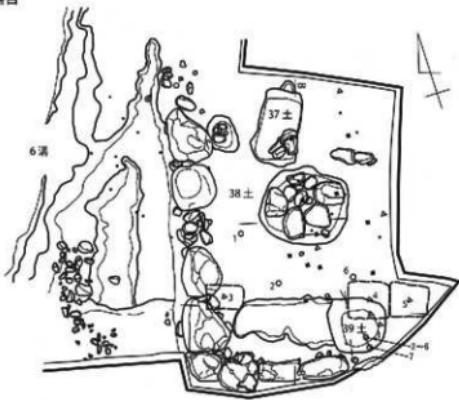
4 にぶい・黄褐色土(10YR4/3)

しり、粘性有。古い地表面か。礫を敷いて(?)整地したようだ。
ロームブロック有。

5 黑色土(10YR4/6)

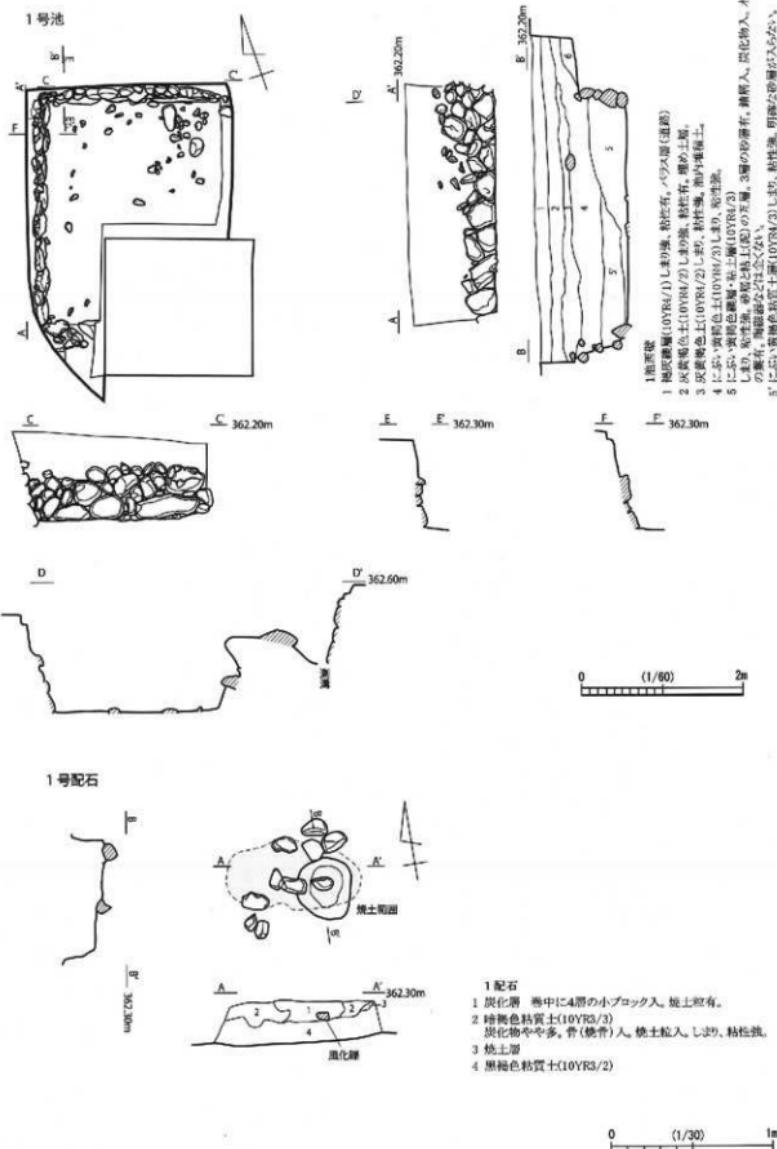
塊山。ローム上。

3層目



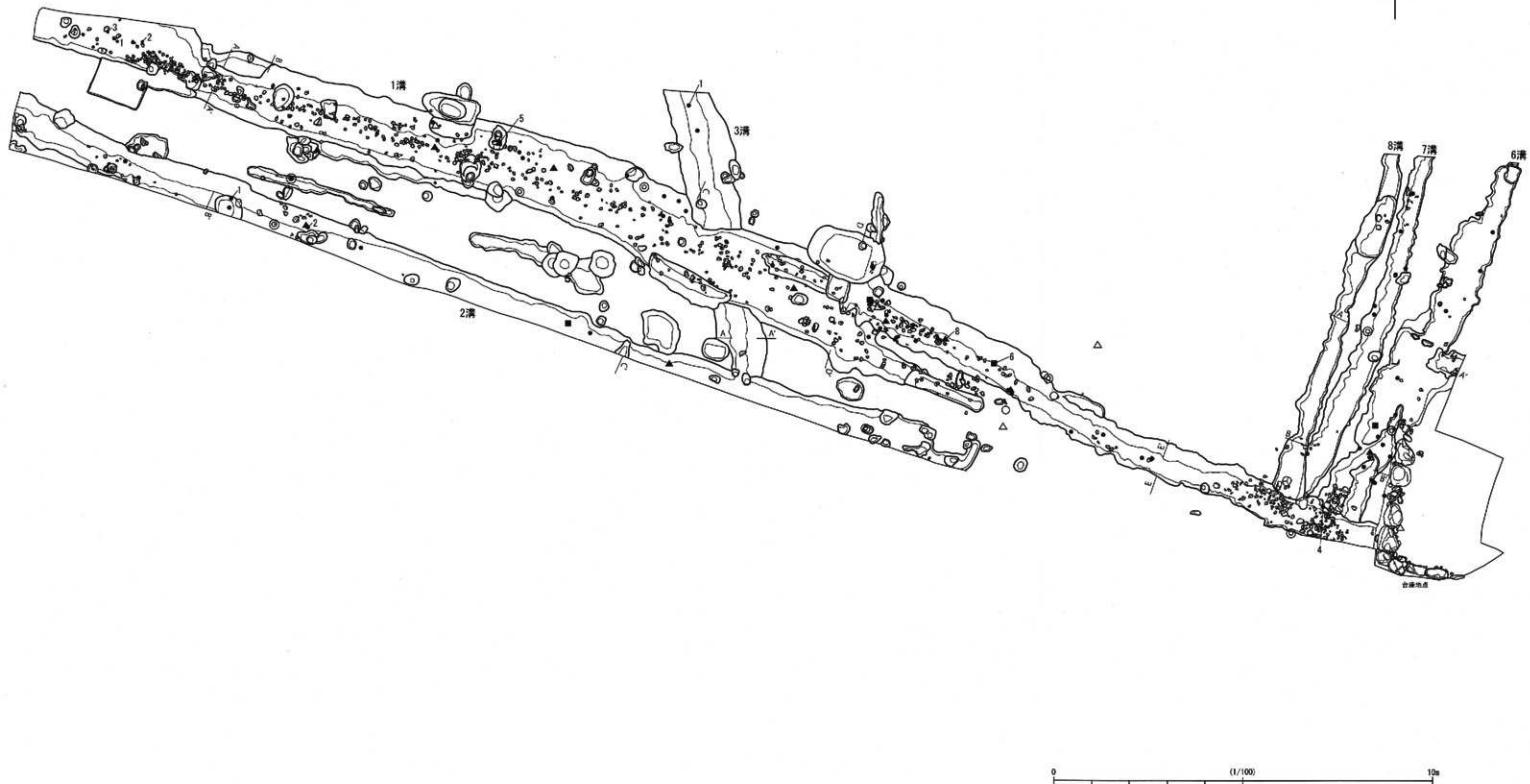
0 (1/60) 2m

第26図 台座地点

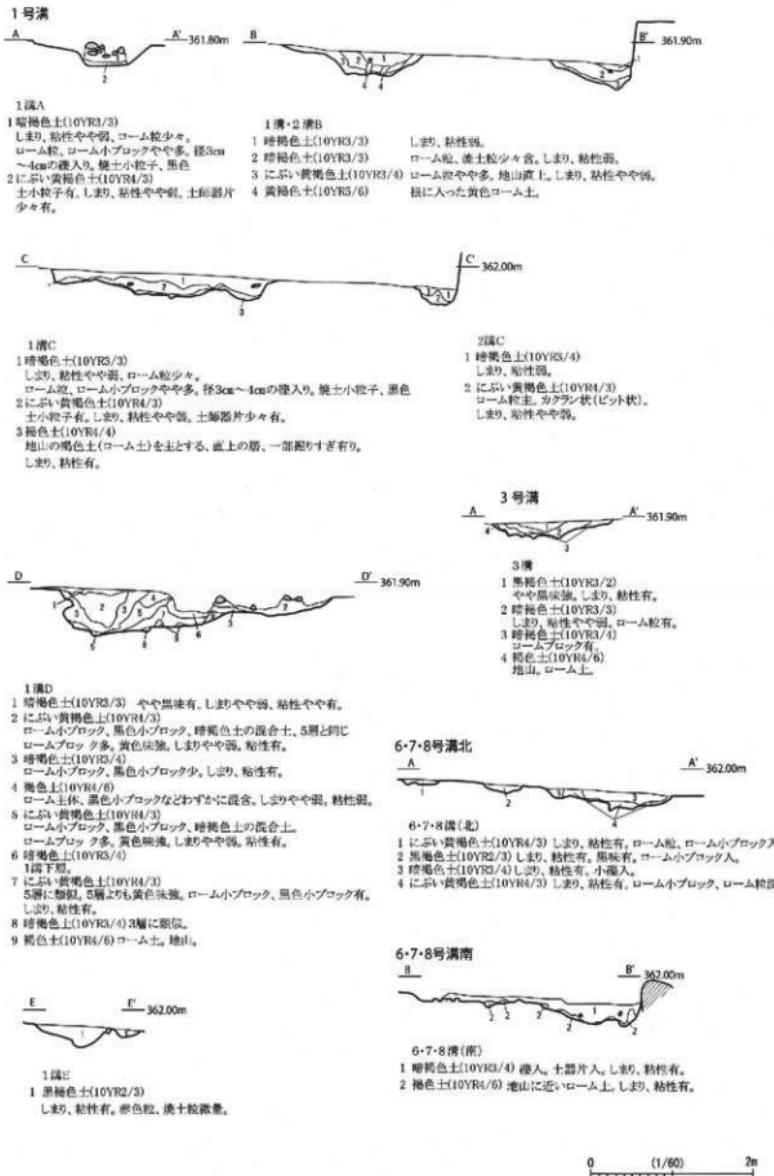


第27図 1号池、1号配石

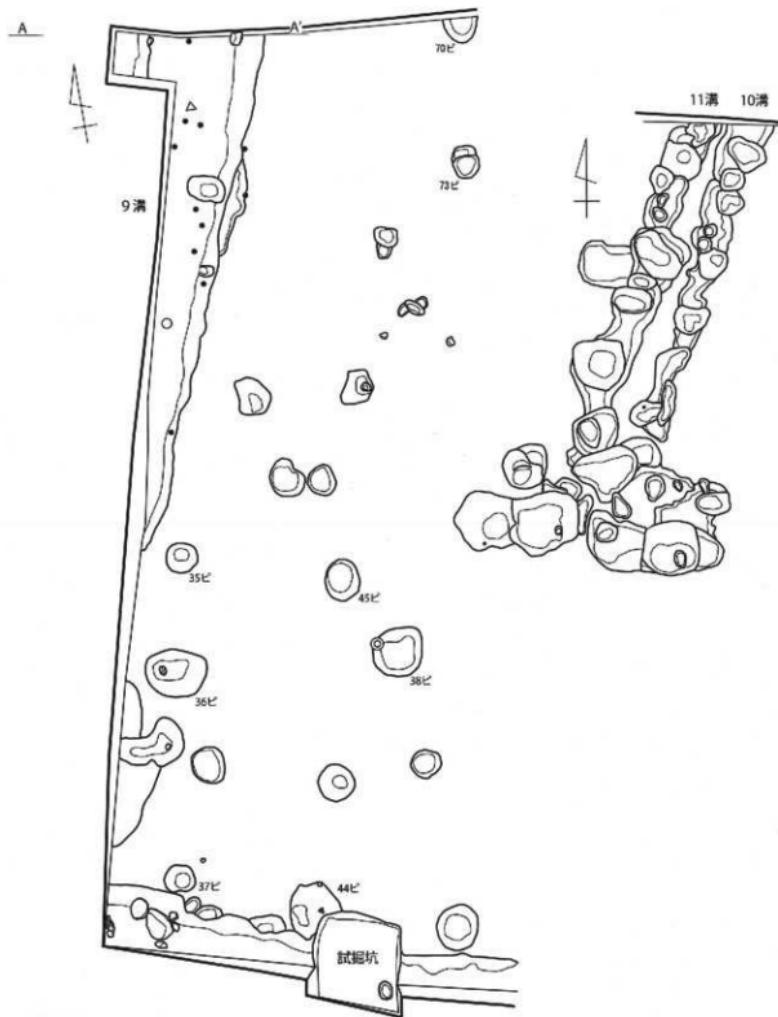
4



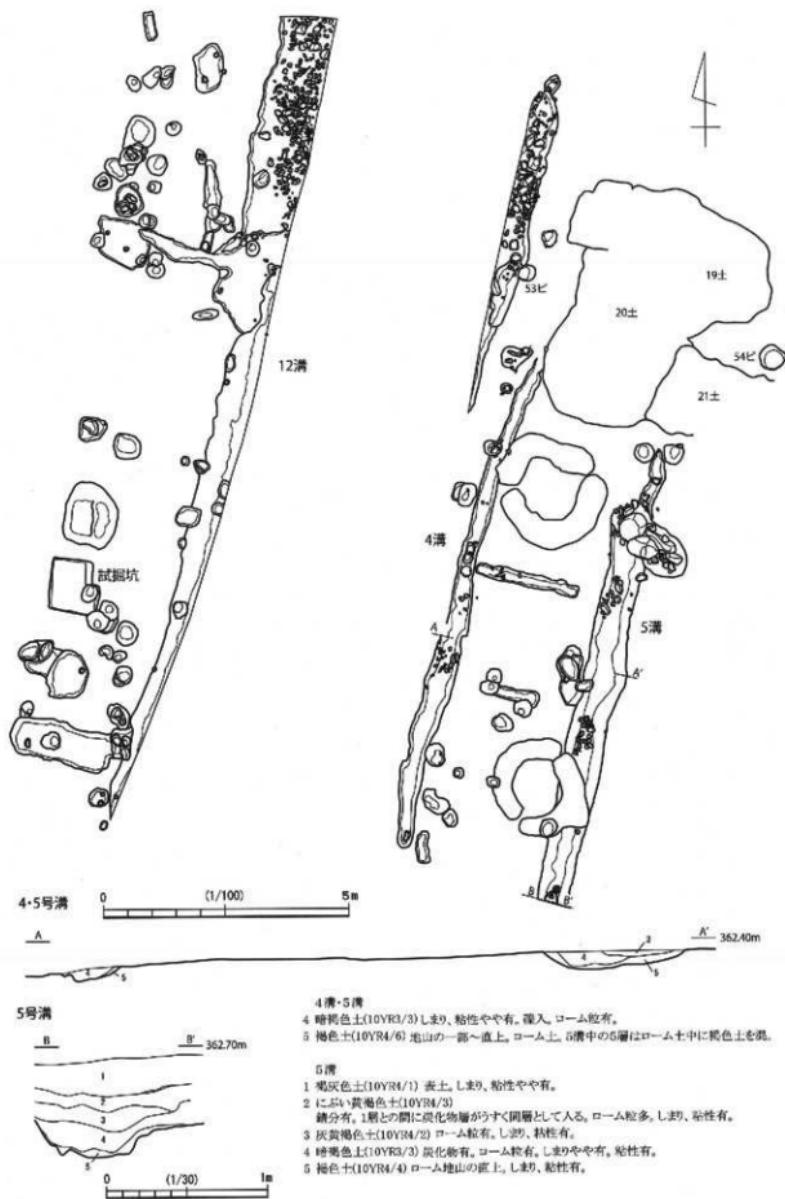
第28図 1~3・6~8号溝(1)



第29図 1~3・6~8号溝(2)

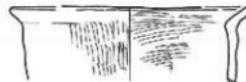
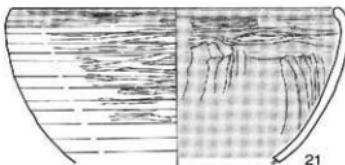
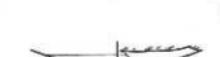
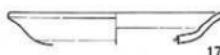
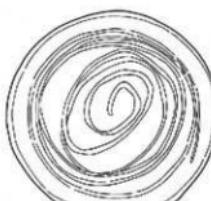
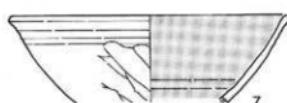
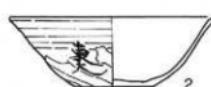
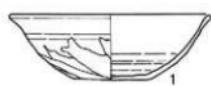


第30図 9～11号溝



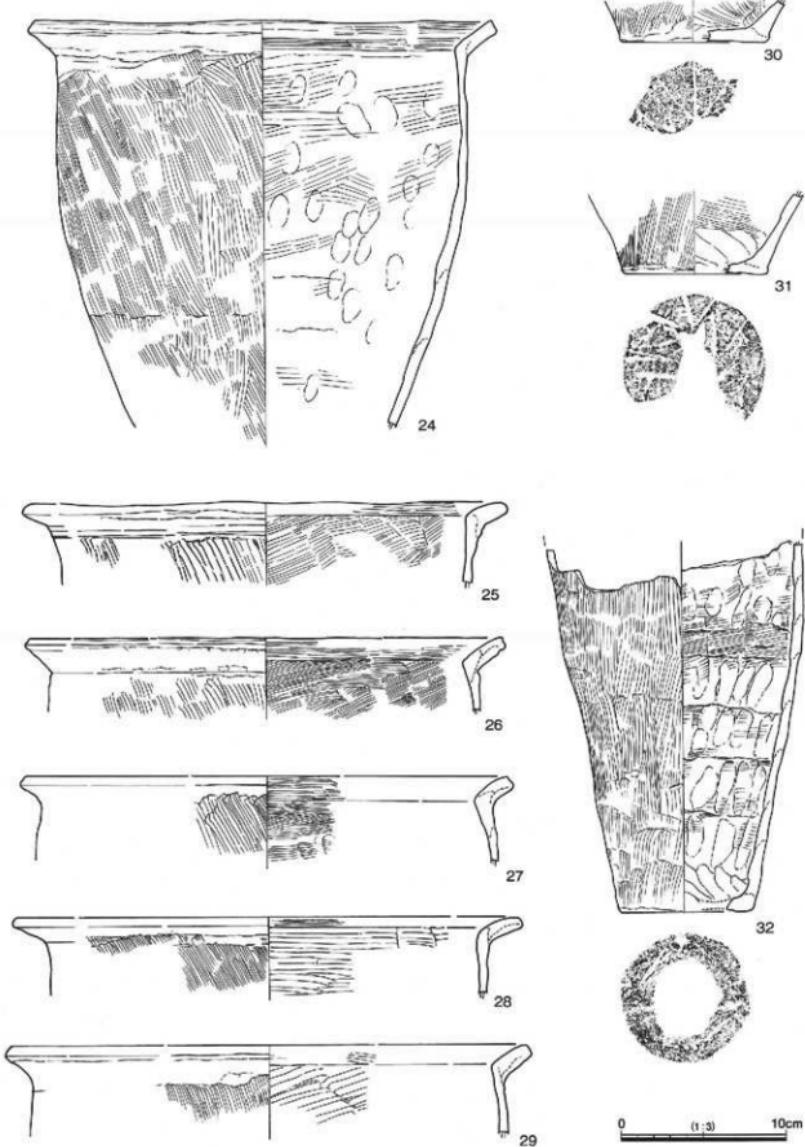
第31図 4・5・12号溝

1堅

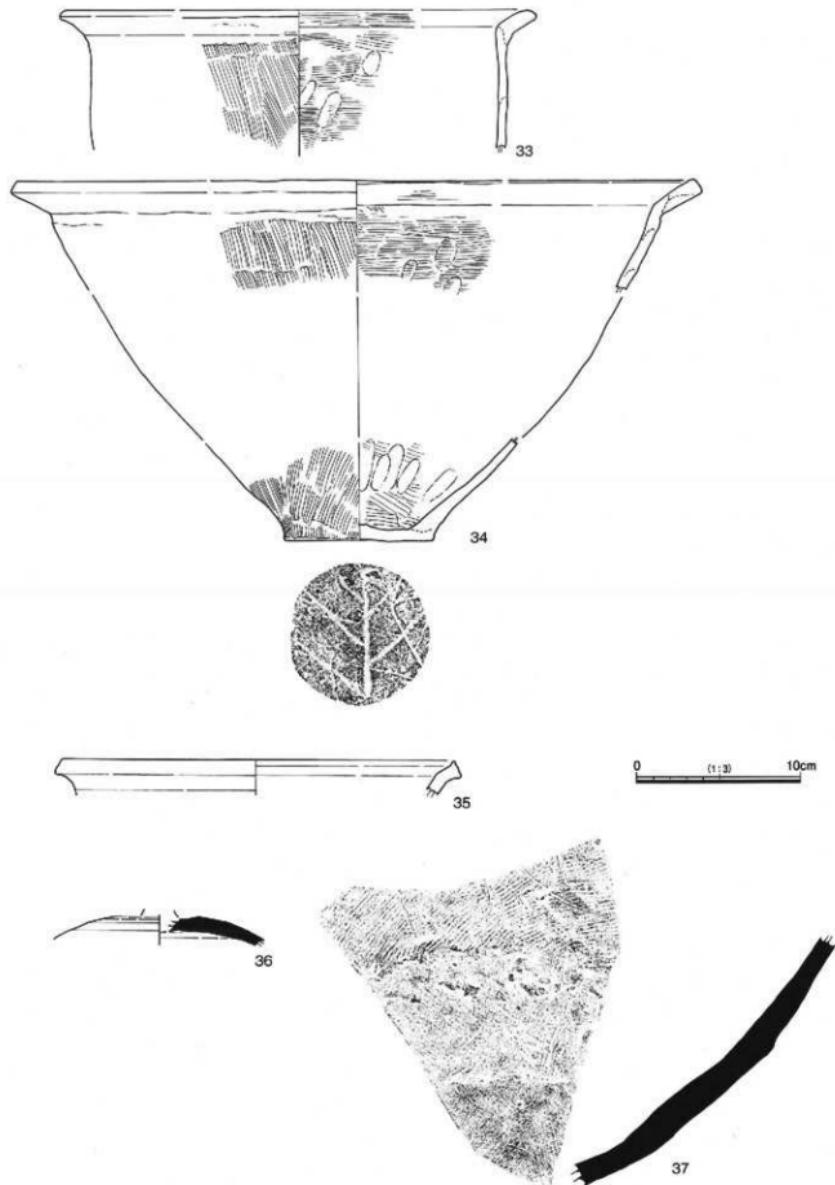


0 (1:3) 10cm

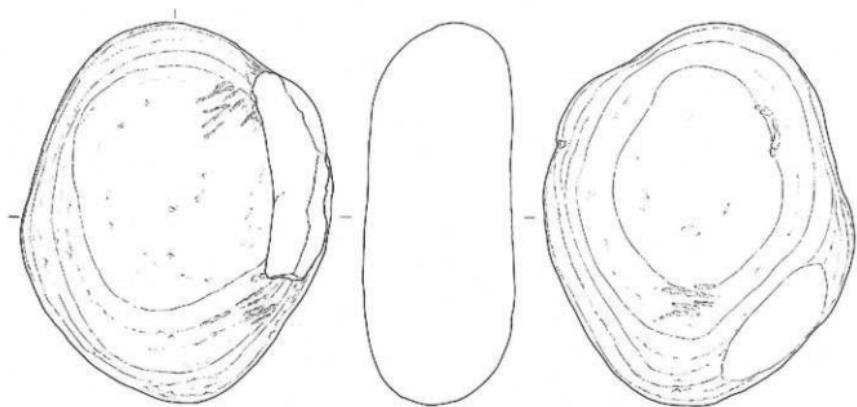
第32図 出土遺物(1)



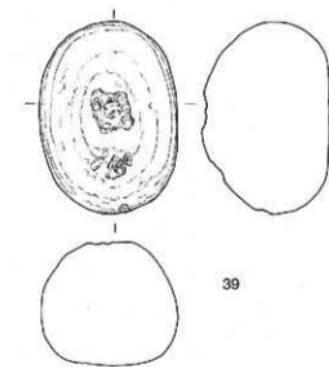
第33図 出土遺物(2)



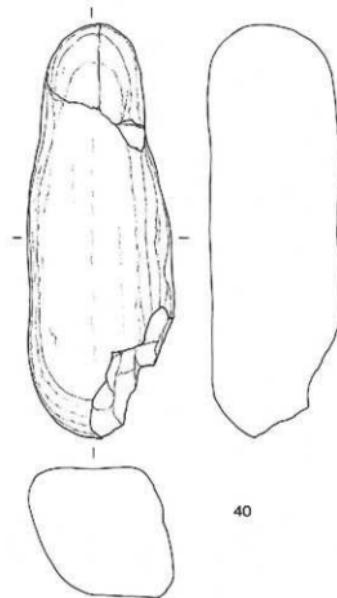
第34図 出土遺物(3)



38



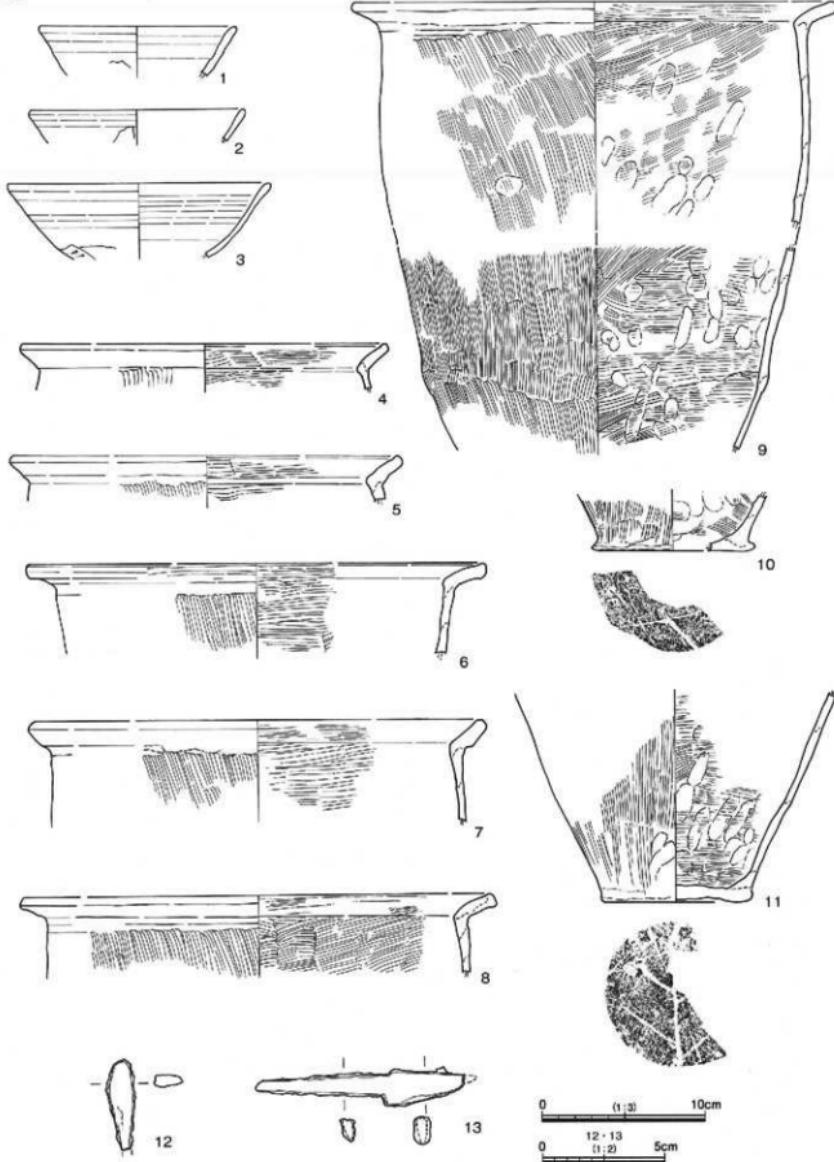
39



40

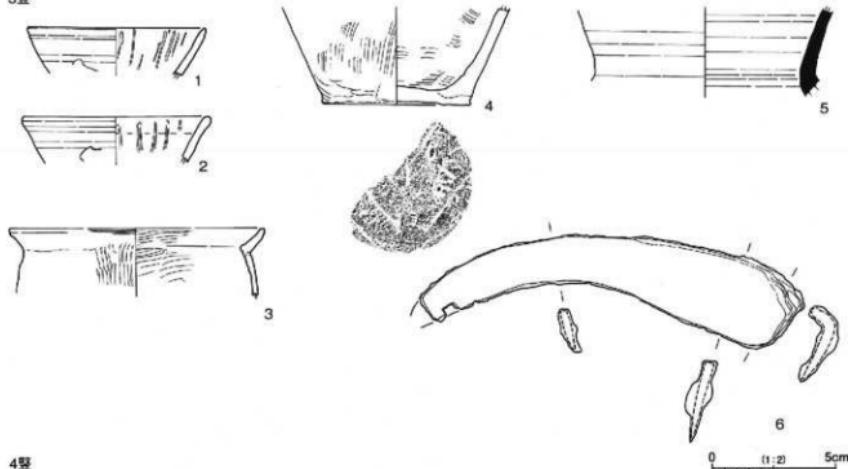
0 (1:3) 10cm

第35図 出土遺物(4)

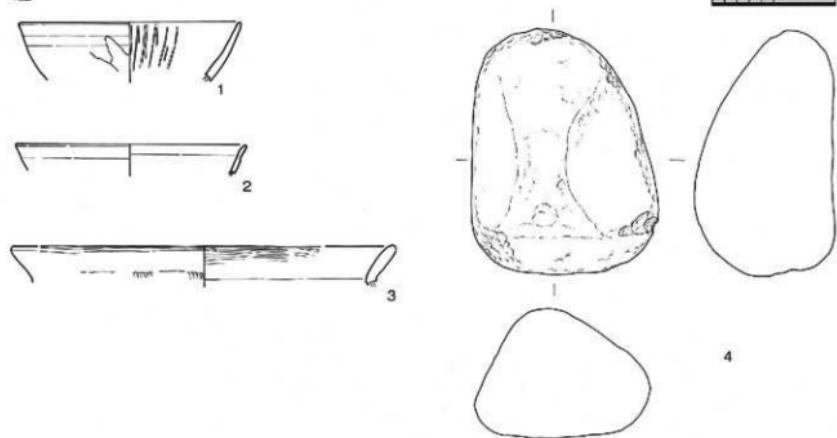


第36図 出土遺物(5)

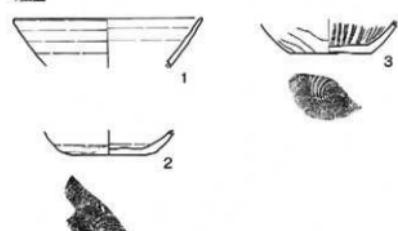
3型



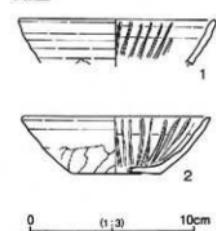
4型



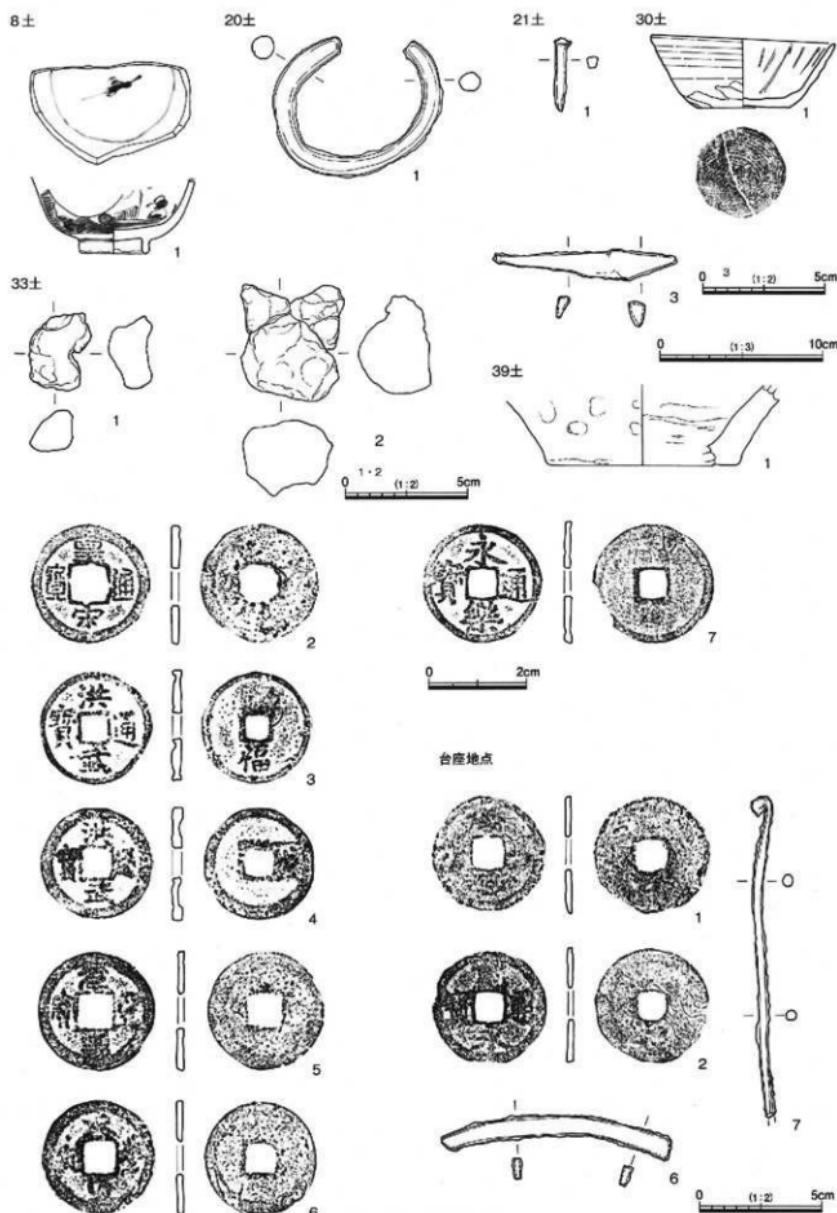
4獨立



5獨立

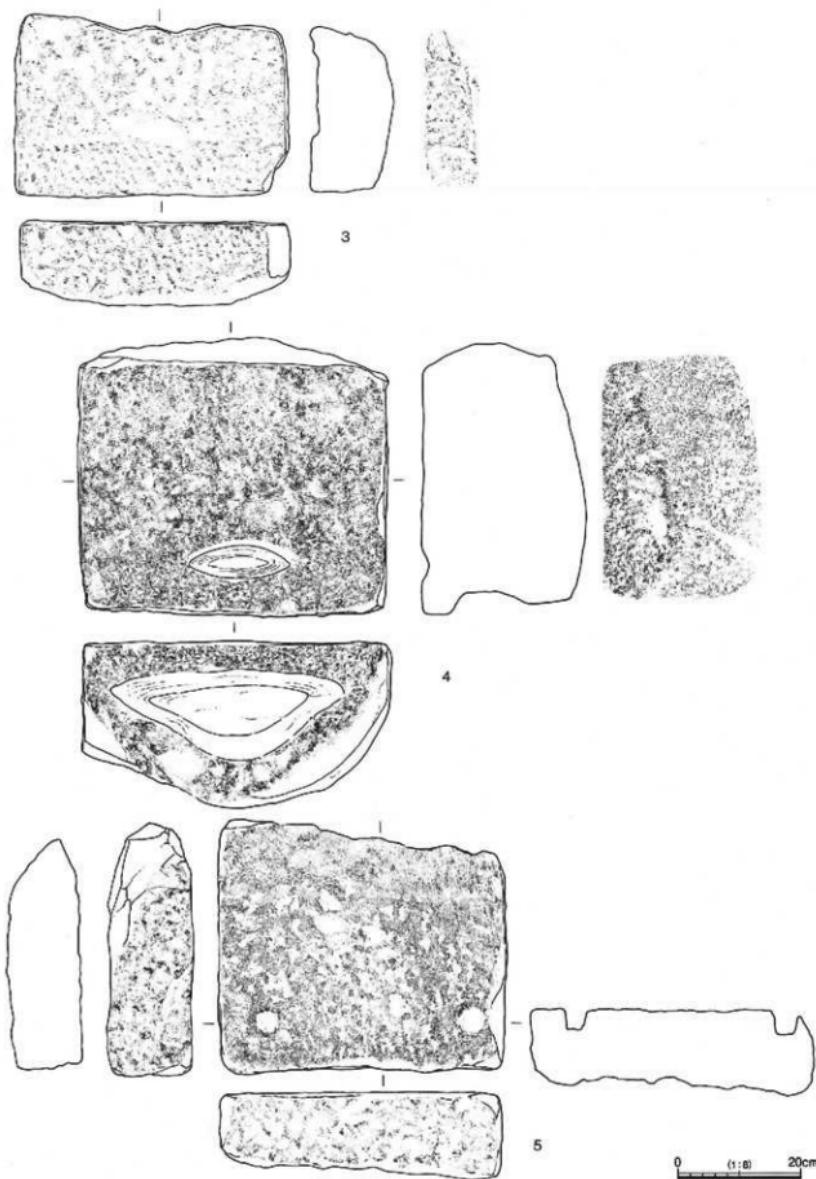


第37図 出土遺物(6)

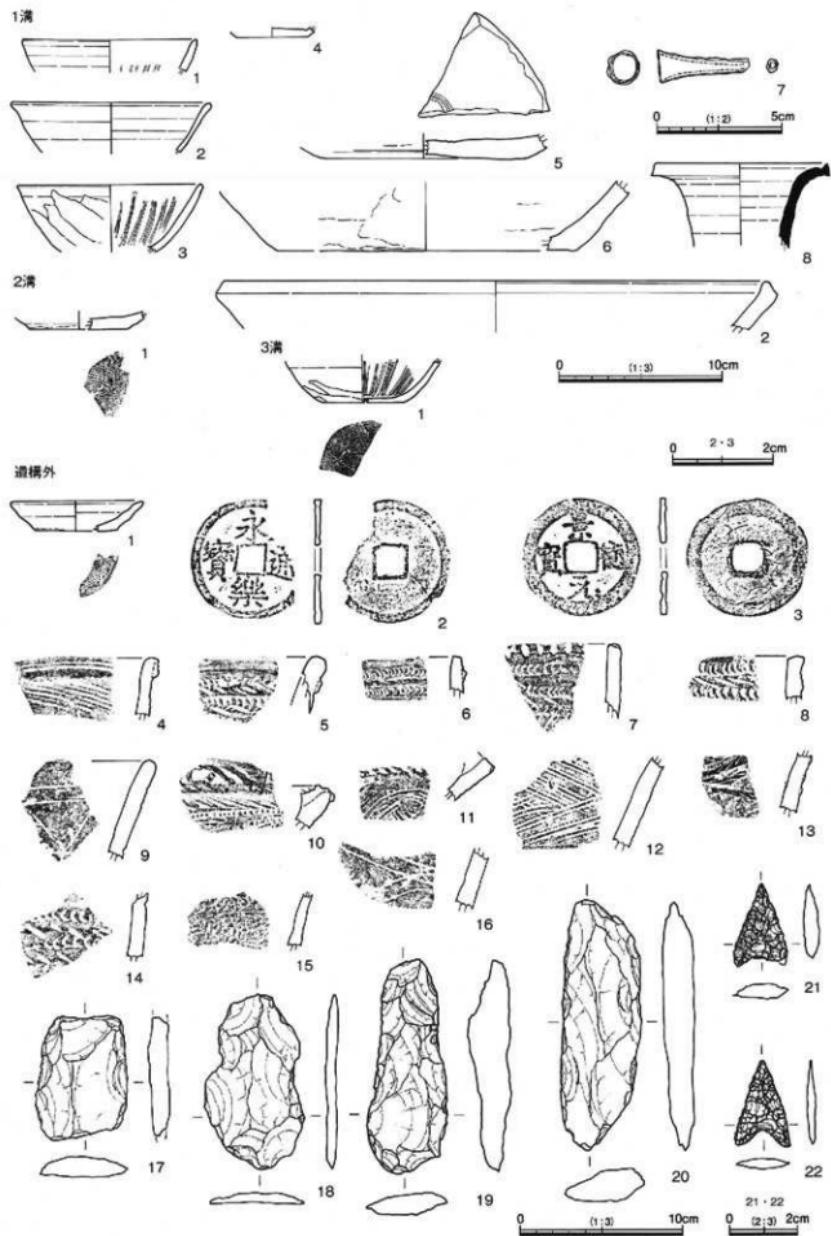


第38図 出土遺物(7)

台座地点



第39図 出土遺物(8)



第40図 出土遺物(9)

写 真 図 版

図版 1

調査区全景
(合成写真)





1. 調査区周辺空中写真（南より 中央は清白寺及び清白寺参道）

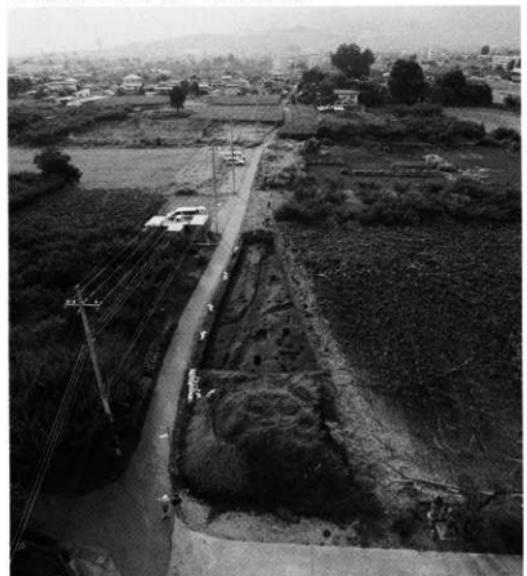


2. 調査区空中写真（西より）

図版 3



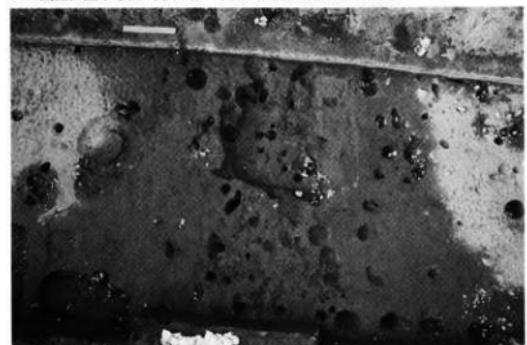
1. 調査区空中写真（上より 盛り土反転後）



2. 調査区空中写真（東より 中央は連方屋敷に通じる道）



3. 西区 1号溝ほか空中写真（上より）



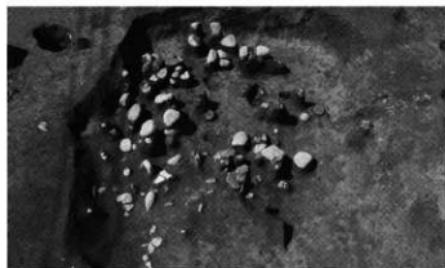
4. 中区空中写真（上より 1号竖穴ほか）



5. 東区空中写真（上より）



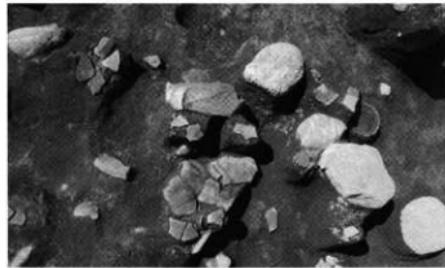
1. 1号竖穴墓物出土状況（西より）



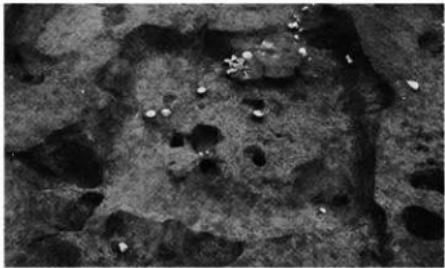
2. 1号竖穴墓物出土状況（東より）



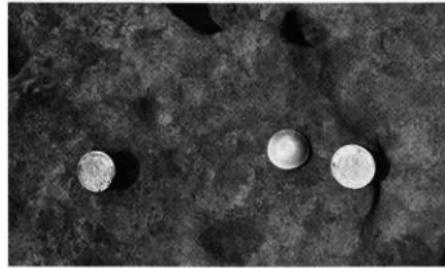
3. 1号竖穴墓物出土状況



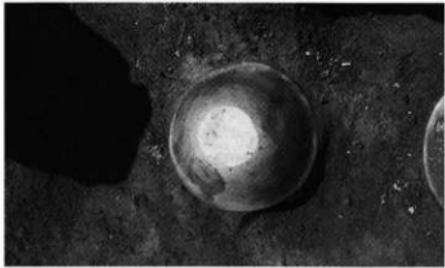
4. 1号竖穴墓物出土状況



5. 1号竖穴墓物出土状況

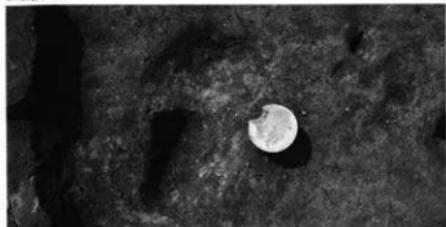


6. 土器器皿・皿出土状況



7. 「東大」銘墨書き土器出土状況

図版 5



1. 土器器出土状況



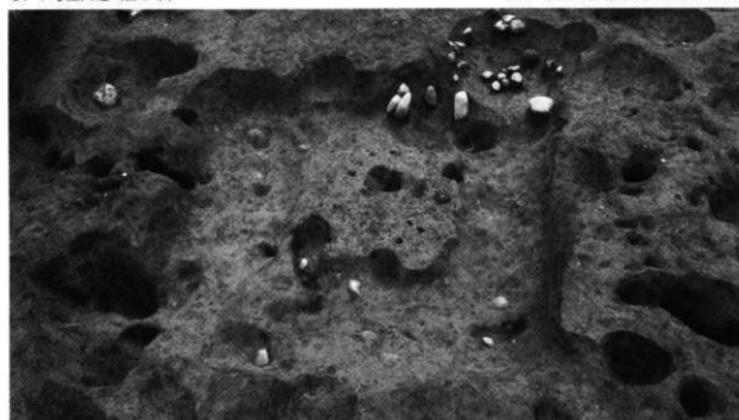
2. 窯内支脚転用土器出土状況



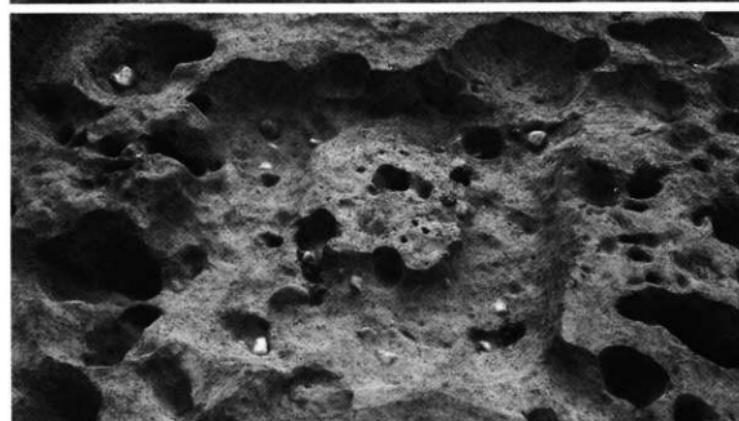
3. 1号竪穴窯（西より）



4. 1号竪穴窯（支脚転用土器を外した状況）



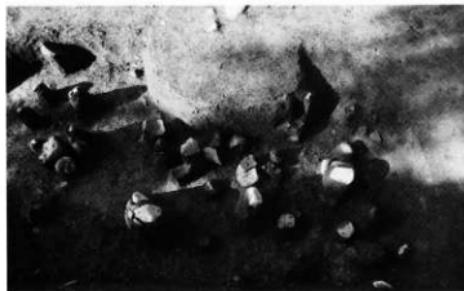
5. 1号竪穴窯掘状況
(西より)



6. 1号竪穴掘り方状況
(西より)



1. 2号竪穴遺物出土
状況（北より）



2. 2号竪穴竈周辺遺物出土状況（南より）



3. 2号竪穴竈截ち割り状況



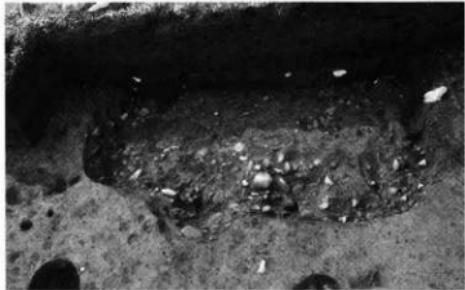
4. 2号竪穴竈碎出土状況（竈正面より）



5. 竈礫出土状況（竈上より）



6. 2号竪穴完掘状況（南より）



7. 2号竪穴振り方状況（北より）



1. 3号整穴ベルト（南より）



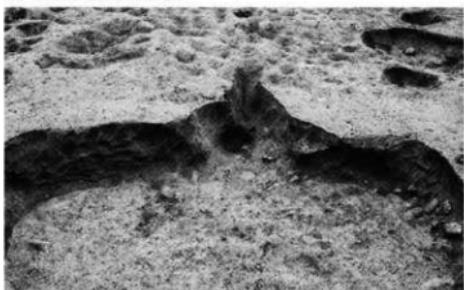
2. 3号整穴遺物出土状況（北より）



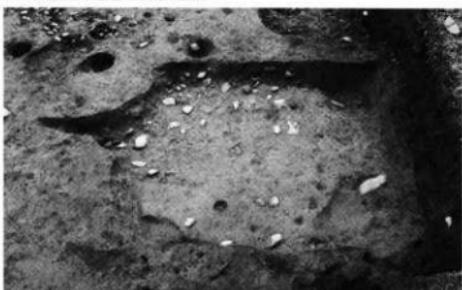
3. 3号整穴内縁出土状況



4. 3号整穴竪周辺出土状況



5. 3号整穴完掘状況



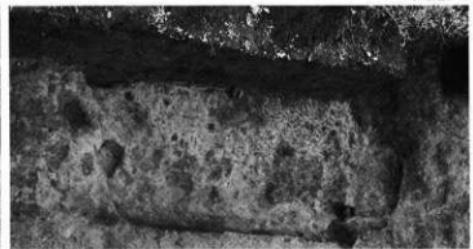
6. 3号整穴掘り方状況



7. 3号整穴完掘状況
(南より)



1. 4号竪穴覆土断面（南より）



2. 4号竪穴遺物出土状況



3. 4号竪穴蓋打ち割り状況（正面西より）



4. 4号竪穴蓋打ち割り状況（南より）



5. 4号竪穴蓋抽石・支脚石出土状況（西より）



6. 4号竪穴蓋抽石・支脚石出土状況（南より）



7. 4号竪穴完掘状況（南より）

図版 9



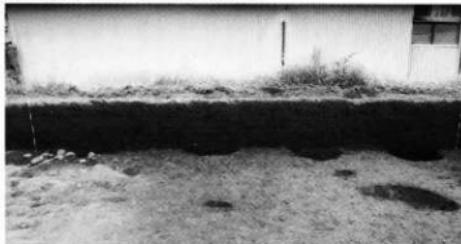
1. 1号掘立 10号ピット断面（北より）



2. 1号掘立 7号ピット断面（北より）



3. 1号掘立 8号ピット断面（北より）



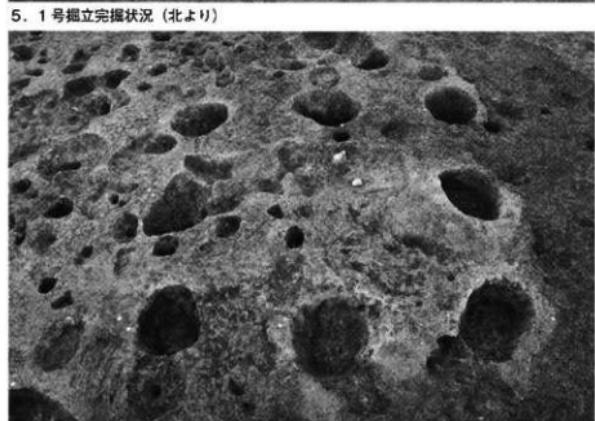
4. 1号掘立柱穴列断面（北より）



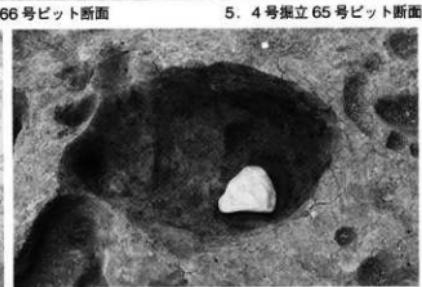
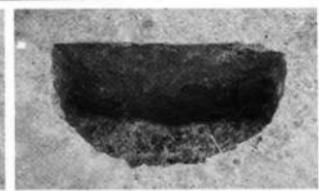
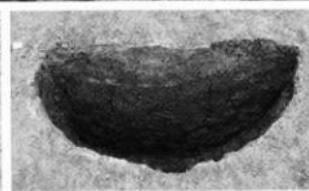
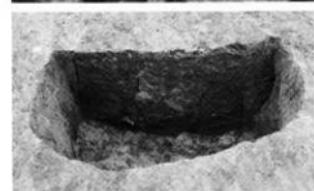
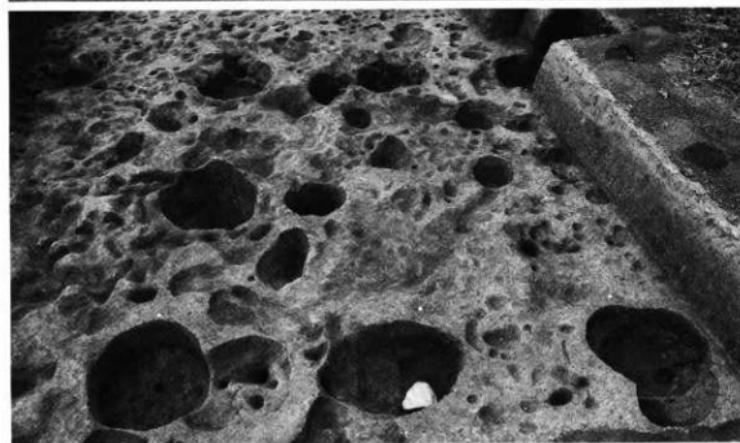
5. 1号掘立完掘状況（北より）



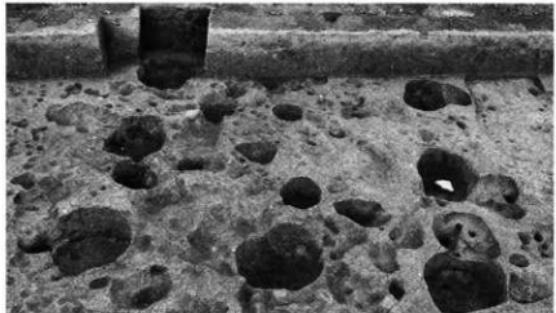
6. 1号掘立完掘状況（西より）



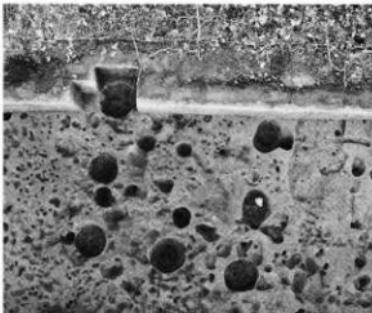
7. 2号掘立完掘状況（南より）



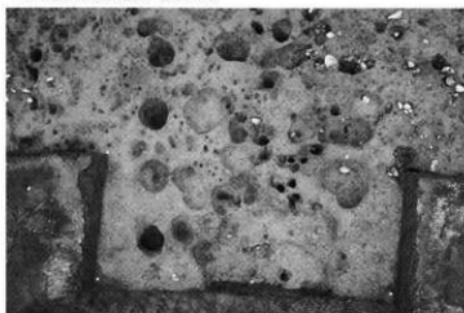
図版 11



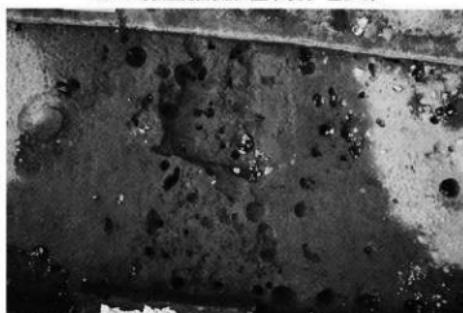
1. 4号掘立完掘状況（南より）



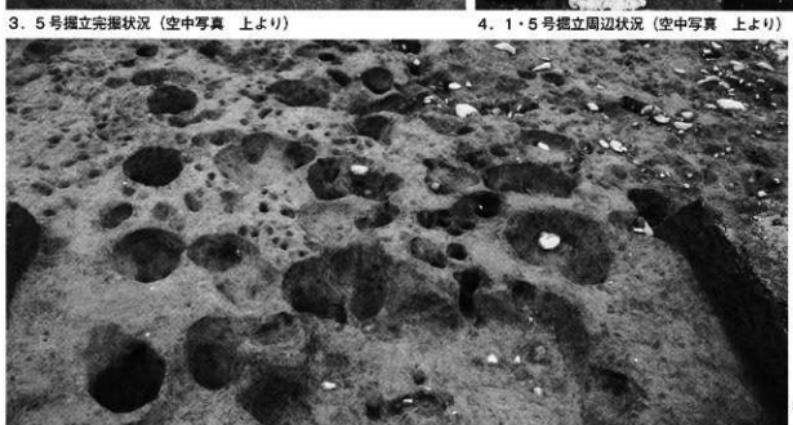
2. 4号掘立完掘状況（空中写真 上より）



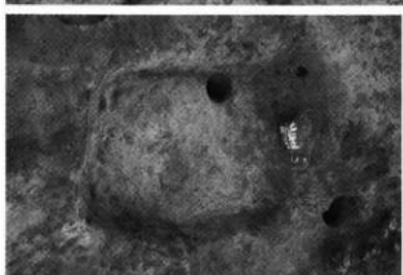
3. 5号掘立完掘状況（空中写真 上より）



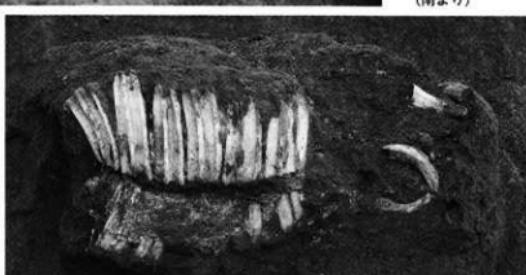
4. 1・5号掘立周辺状況（空中写真 上より）



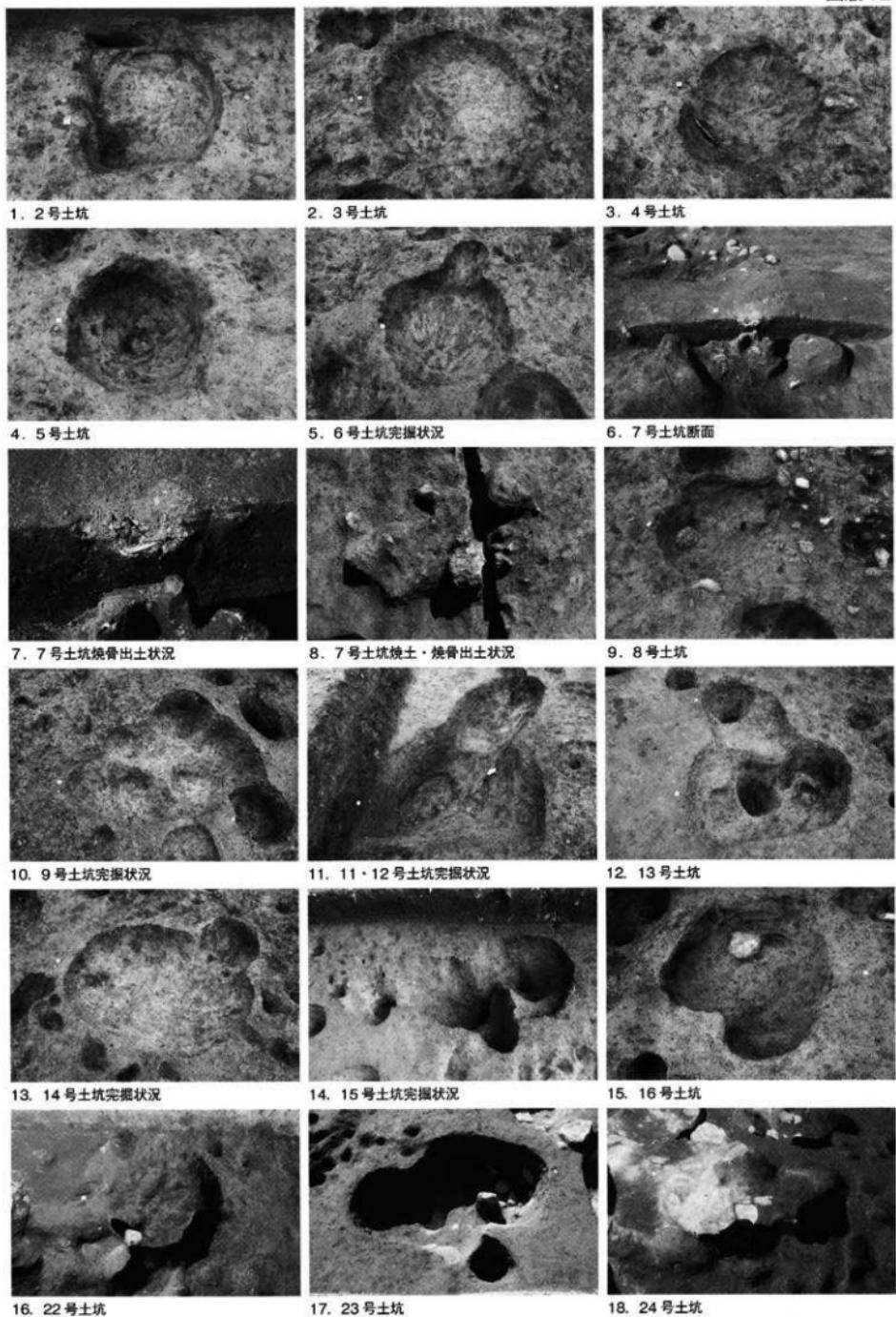
5. 5号掘立完掘状況
(南より)



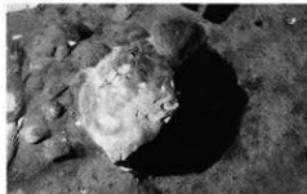
6. 1号土坑



7. 1号土坑（馬齒出土状況）



图版 13



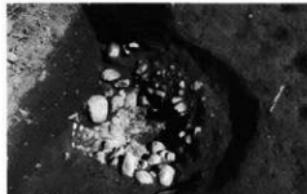
1. 25号土坑



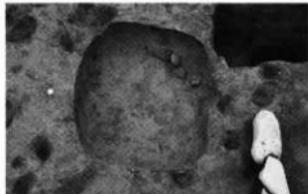
2. 26号土坑断面



3. 26号土坑半截状况



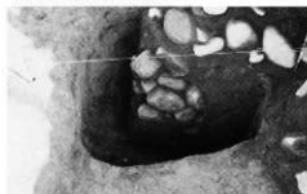
4. 26号土坑完掘状况



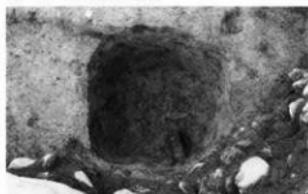
5. 38号土坑完掘状况



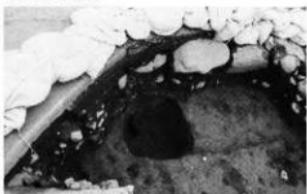
6. 38号土坑



7. 39号土坑



8. 39号土坑



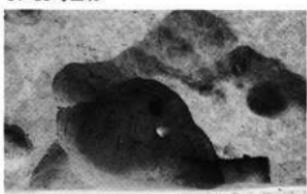
9. 39号土坑



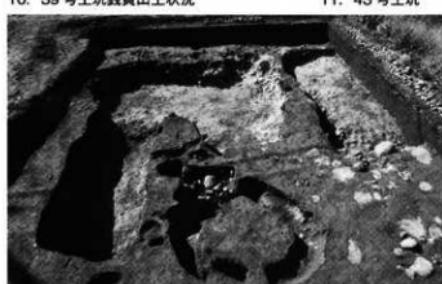
10. 39号土坑出土状况



11. 43号土坑



12. 43号土坑



13. 19·20·21号土坑完掘状况



14. 18号土坑断面



15. 18号土坑完掘状况



1. 清白寺参道と周辺調査状況



2. 参道脇の1号池



3. 1号池石垣状況



5. 台座地点下層（東より）



4. 台座地点上層（東より）

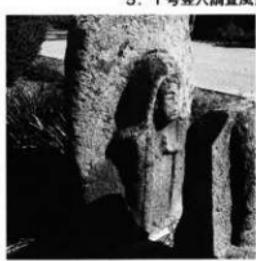


8. 台座地点完掘状況

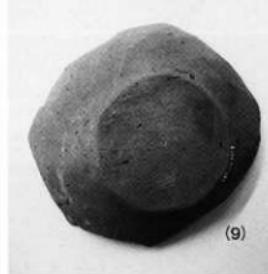
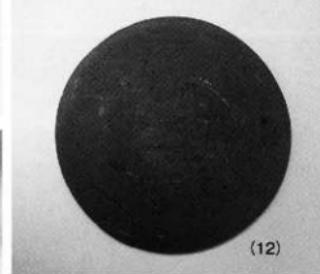
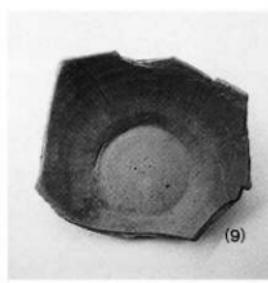
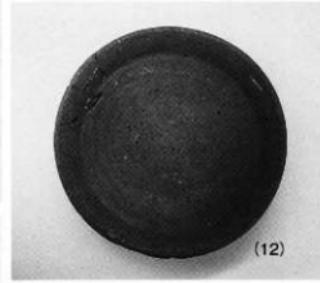
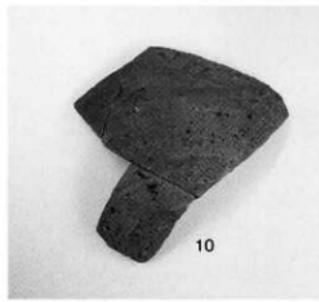
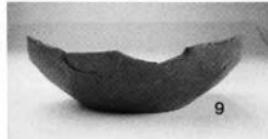
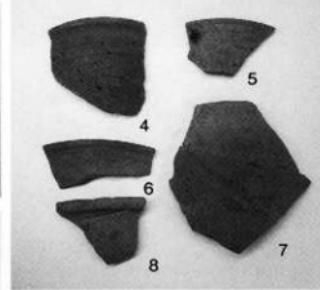
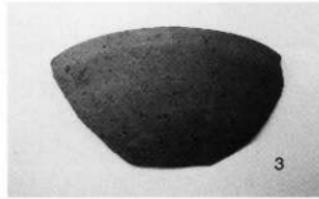
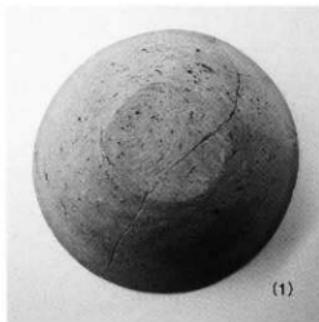


7. 台座群出土状況（南より）

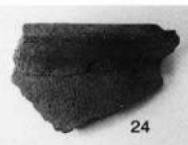
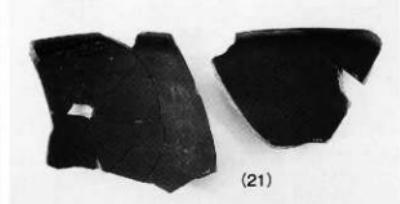
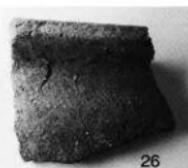
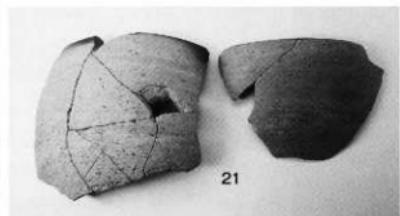
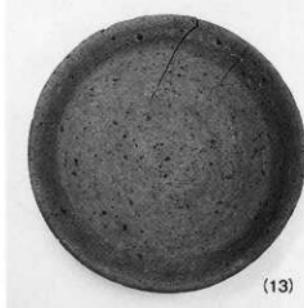
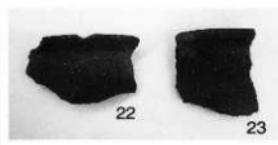
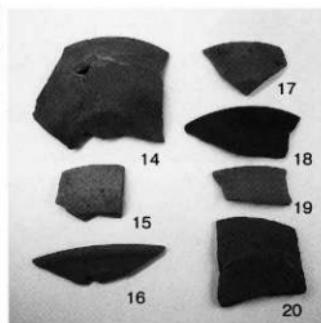
図版 15

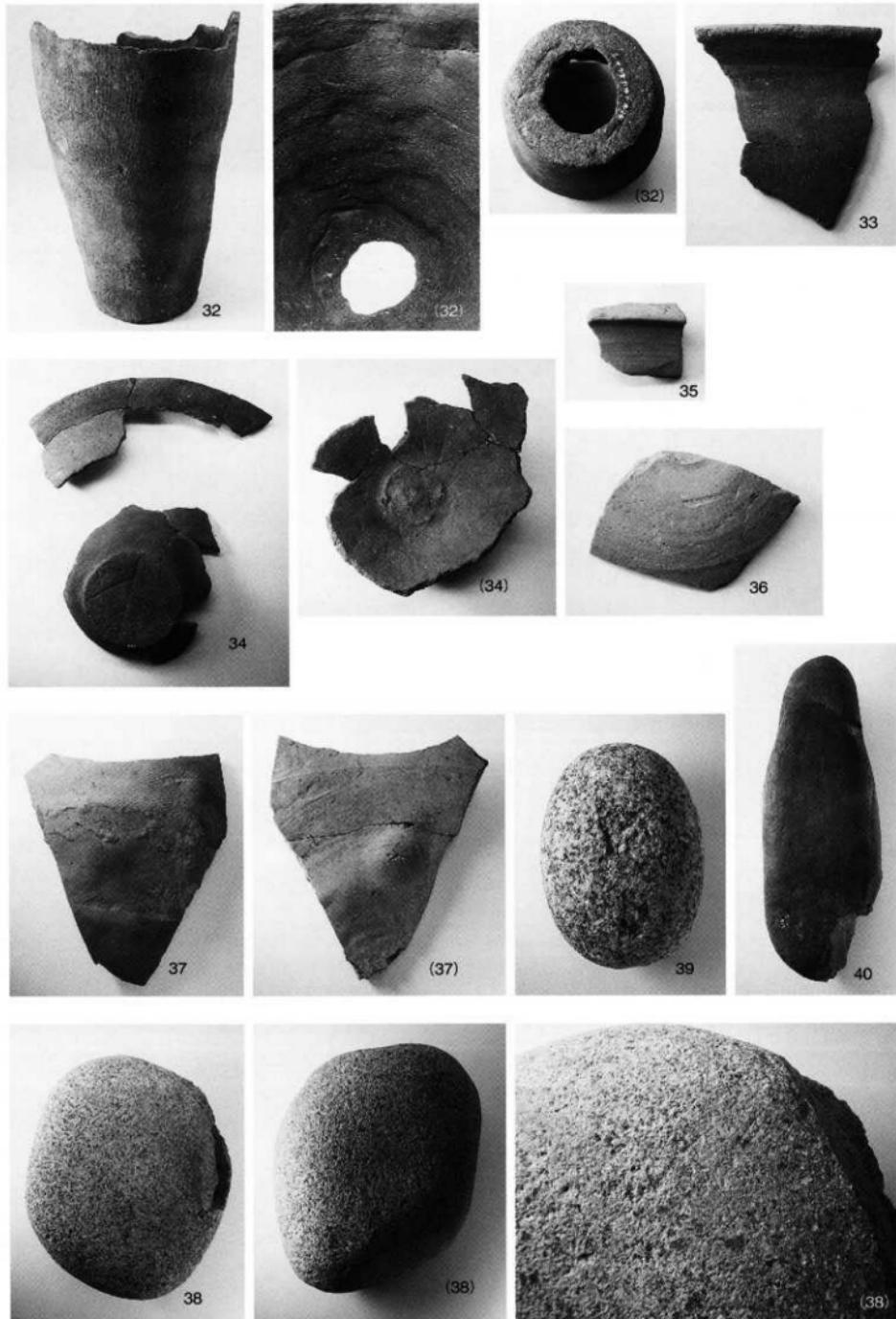


1 壺遺物



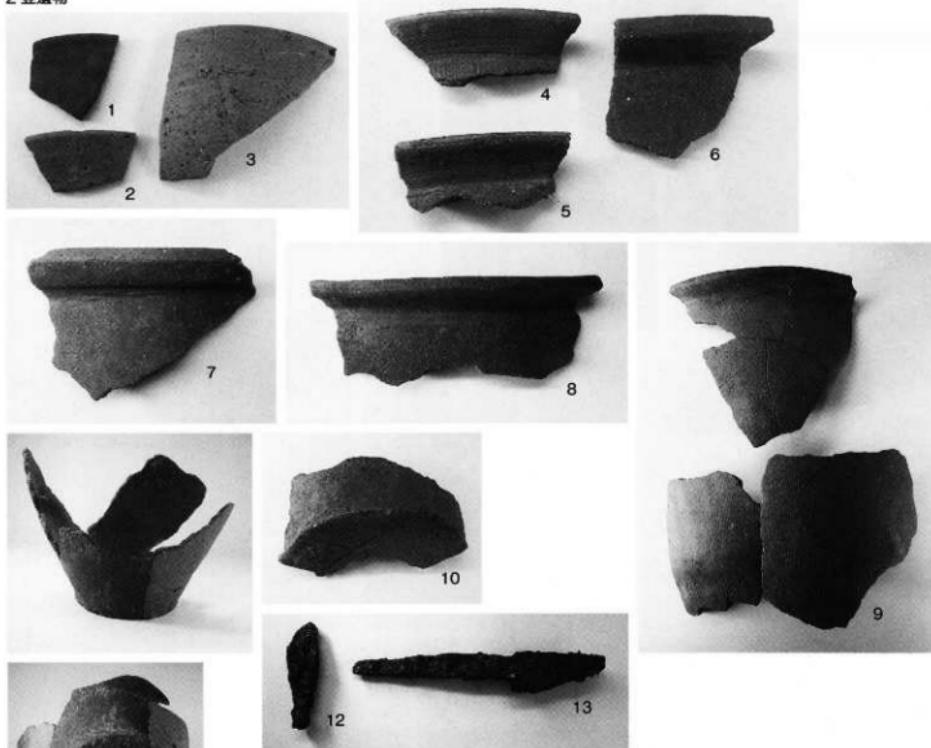
図版 17



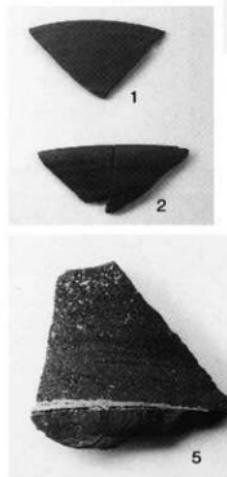


図版 19

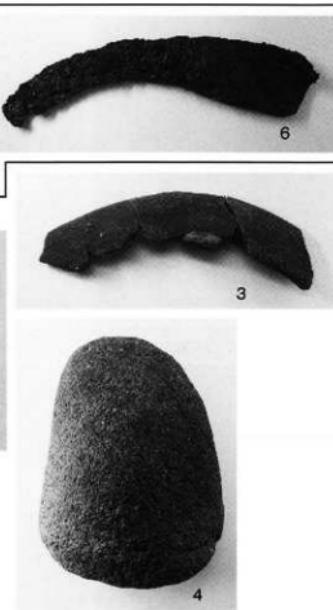
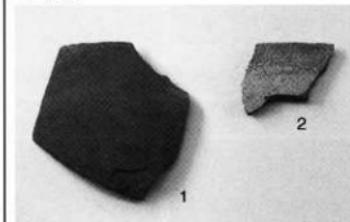
2 竪遺物



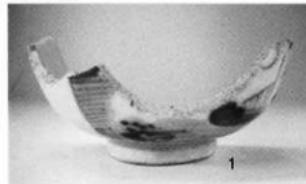
3 竪遺物



4 竪遺物



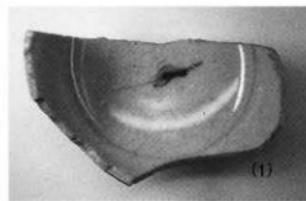
18 土遺物



29 土遺物



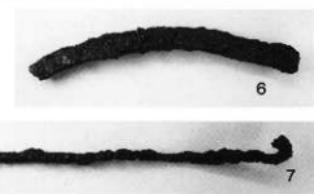
21 土遺物 30 土遺物



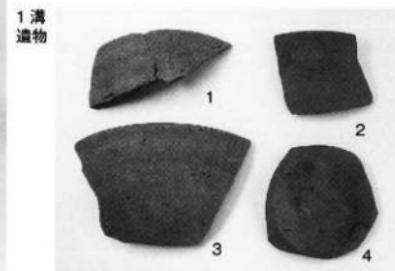
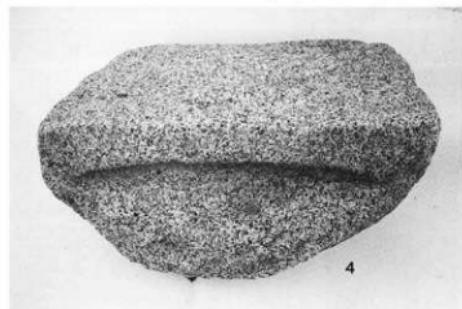
39 土遺物



33 土遺物

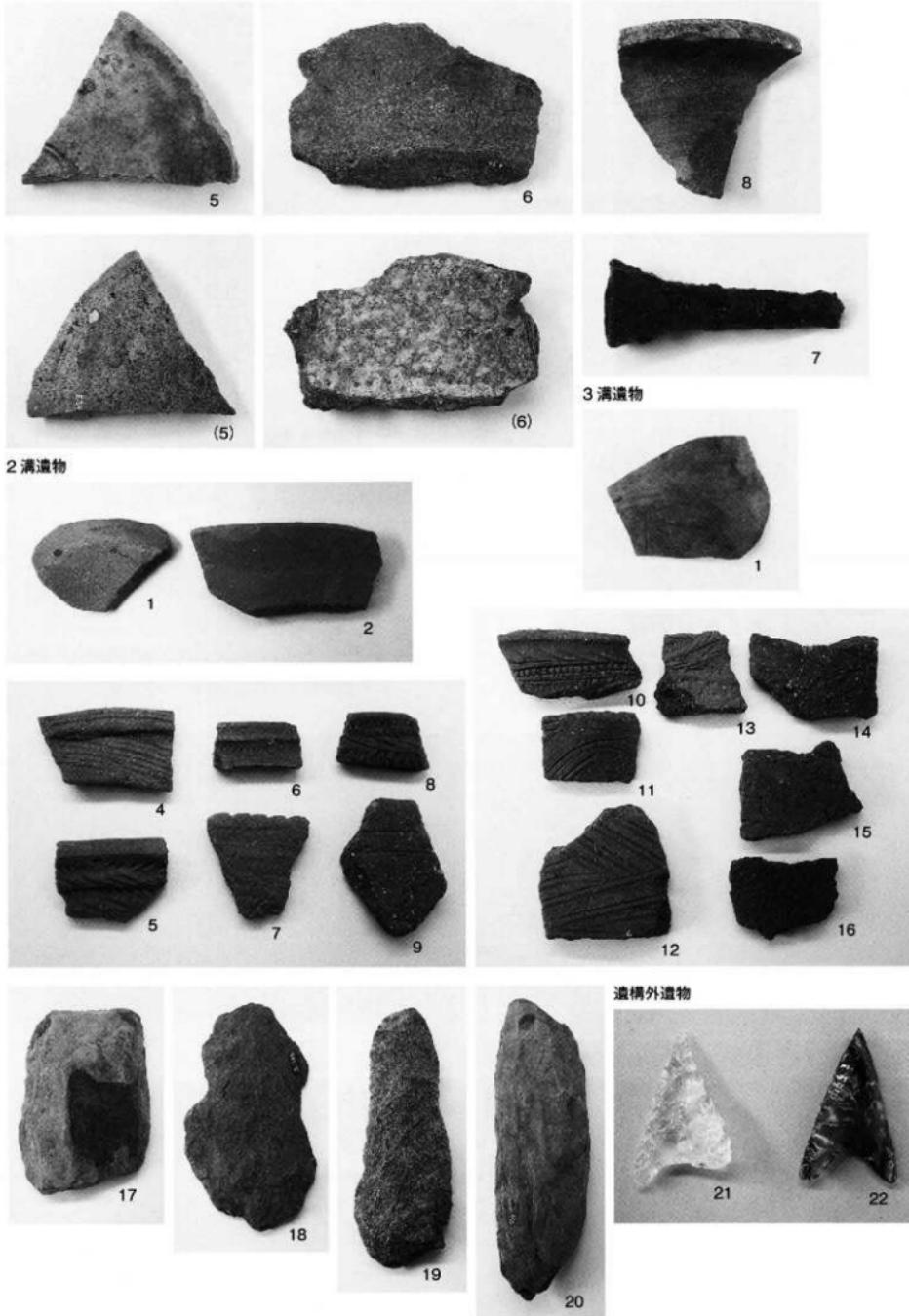
台座地点
出土遺物

台座地点遺物

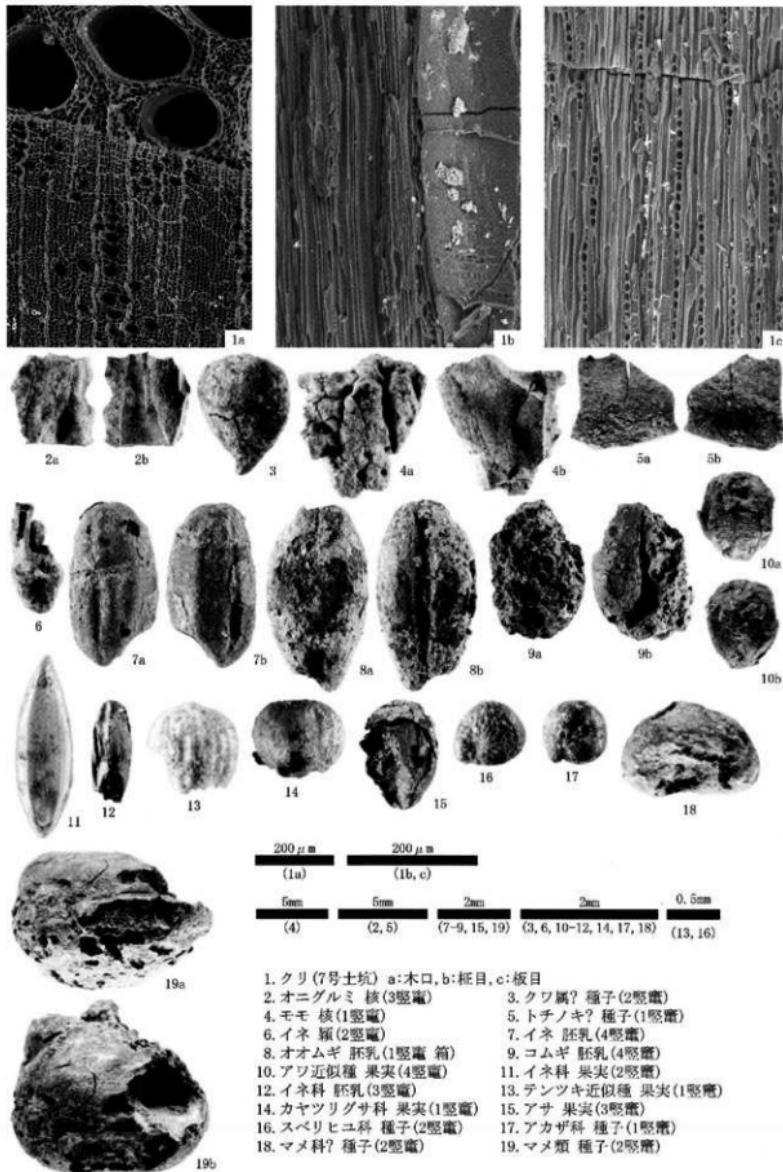


圖版 21

1 满遺物



炭化材・種実遺体



焼人骨



1. 前頭骨?(1号配石)
3. 齒牙片(1号配石)
5. 前頭骨左眼窩上緣片(7号土坑)
7. 下頸骨左下頸頭(7号土坑)
9. 頭蓋骨(7号土坑)
11. 肋骨(7号土坑)
13. 四肢骨
- 15中手骨/中足骨/指骨(7号土坑)

2. 齒牙片(1号配石)
4. 大腿骨(1号配石)
6. 左頸骨(7号土坑)
8. 側頭骨錐体部(7号土坑)
10. 頭蓋骨(7号土坑)
12. 肋骨(7号土坑)
14. 四肢骨(7号土坑)

1号土坑馬歯(1)



1. 上面（右側頬側面）



2. 上部除去後（左側舌側面）

4. 切歯・臼歯（図版 25 の下の写真番号は分析時に付与したもの）

左上顎臼歯 [15:P2、16:P3、17:P4、18:M1、5:M2、4:M3] 頬側面。下部は咬合面

右上顎臼歯 [23:P4、22:M1、2:M2、1:M3] 舌側面。下部は咬合面。P2、P3 は茎に独立。

右下顎臼歯 [27:M2、26:M1、25:P4、24:P3、3:P2] 頬側面。上部は咬合面。M3 は存在しない。

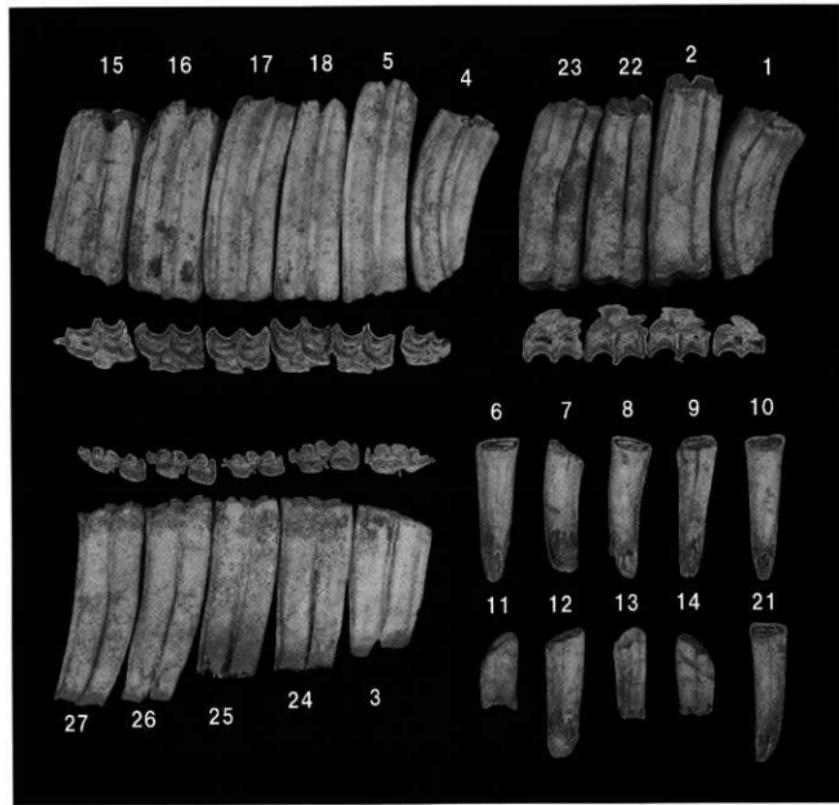
切歯 [6～14、21]

図版 25

1号土坑馬齒(2)



3. 左側頬側面



4. 馬齒

報告書抄録

ふりがな	さんかしょいせき
書名	三ヶ所遺跡
副書名	市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書
巻次	山梨市文化財調査報告書 第12集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	樋原功・松元美由紀・植月学
編集機関	財団法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 Tel 055-263-6441
発行年月日	西暦 2010年1月29日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° °'	° °'			
さんかしょいせき 三ヶ所遺跡	やまなしけんやまな しきさんかしょ 山梨県山梨市三ヶ所 564-2	205	107	35° 41' 30.7"	138° 42' 27.6"	2008年7月 29日～ 10月31日	1640m ²	市道建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ヶ所遺跡	集落遺跡	平安時代～ 中世	竪穴住居 4 (平安 時代)・掘立柱建 物5棟・土坑・溝・ ビット・池など	绳文土器(諸鏡式)・平 安時代土器・中世カワ ラケ・陶磁器・石造物台 座・鉄製品・馬糞ほか	1号竪穴より墨書き土器「東大」、 仏鉢形土器挽出土。1号土坑 より馬糞出土。火葬骨2か所で 出土。

要約	縄文時代前期に土器散布。9世紀後半に掘立柱建物群を中心とした集落形成。10世紀初頭に竪穴住居を中心とした集落となる。中世には条里溝により東西、南北方向の地割施行。中世以降と考えられる馬の埋葬墓1基あり。清白寺に関わる江戸時代の石造物台座群、中世以降の火葬骨(火葬施設か)、墓坑。
----	---

山梨市文化財調査報告書 第12集

三ヶ所遺跡

— 市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書 —

平成22年(2010)1月29日 発行

編 集 勧山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 Tel 055-263-6441

発 行 山梨市・山梨市教育委員会・勧山梨文化財研究所

印 刷 勧帝京サービス

